
異世界回帰ナイトメア

ウスバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界回帰ナイトメア

【Nコード】

N6970Y

【作者名】

ウスバー

【あらすじ】

深夜0時、気付くと俺はファンタジーゲームのような世界に立っていた。

夜毎に異世界に飛ばされる俺は、今夜もこの悪夢の世界で、消えた幼なじみを探す。

お読みになる前に

この作品は、現在なろうに投稿中の別作品『天啓的異世界転生譚』に足りない要素（シリ阿斯・バトル・謎解き・成長・一人称）満載の話を書いて、気分転換しようとして作り始めた物です。

それなりにまとまった量が出来たので試しに投稿をさせて頂きますが、別作品については頑張りすぎて燃え尽きた感があるので、こちらは頑張りません。のんびりひっそりと進めていくつもりです。

以下、頑張らないポイント。

- ・更新速度を頑張りません。

最初にスタートダッシュでいくらか投稿した後、週一か隔週くらいで更新して、ロングラン投稿を目指したいと思っています。

- ・感想を頑張りません。

当面の所は感想・レビュー欄は閉じておきます。
誤字脱字や設定のミスについては必ず出て来るでしょうが、あまり気にしないことに決めました。見つけても笑ってスルーしてやってください。

- ・ジャンルも頑張りません。

この作品は神様転生でも勇者召喚でもVRMMOトリップでもありませんが、大体それに準ずる物です。

また、この作品の主人公はチートでも最強でもありませんが、大体それに準ずる物です。

- ・情景描写まで頑張りません。

風景・景色の描写、文化・生活の描写、ついでに人物の容姿・服

装等の外見描写、全て苦手ですのであまり頑張りません。

異世界旅行記的な面白さはおそらくありませんのでご注意下さい。

・告知もやつぱり頑張りません。

不定期に気の向くままに更新。次の更新予定なんて本人もたぶん知りません。

また、予告なくちよくちよくと文章や設定等をいじり、特にパラメータ関連は知らない内に細かい修正が入ったりするかもしれません。

さすがに全面改稿等、大規模な修正をする時は最新話のあとがきで告知するつもりですが、たぶんそんな頑張りが必要なことはそもそもやりません。

・シリアス・バトル・謎解きはちよつとだけ頑張ります。

シリアスもバトルも書くのは苦手だったりしますが、ほんの少しだけ頑張ってみます。

ファンタジーに謎解き要素がある必要性は皆無だと思いますが、こちらはかなり頑張ってみるつもりです。

こんなに頑張らない作品でも読んでやるよという寛大な方は、是非『次の話』をクリックしてみてください。

初っ端から意味不明なプロローグが始まるはずです。

では、楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ

たぶん、十日ほど前のことだったと思う。

月明かりの下で、俺はいつものように縁ゆかりと話をしていた。

『世界は暗闇に包まれ、既存の秩序や法則は全て崩壊し、確かな物は何一つありません。』

この世界で貴方が初めて見つけた物は何ですか？』

『それ、何の心理テストだ？』

突飛なことばかり言う奴だったが、今日のそれは一際荒唐無稽だった。

『んー。悪夢の世界を生き抜けるかどうかのテスト、かもね』

『意味が分からねえよ』

なんて突っぱねても、俺が縁の言葉を無視できるはずもなく、数秒ほど置いて、俺は結局答えていた。

『光、かな？』

『ひかり？』

意外そうな顔をされたけど、それほど意外な答えでもないはずだ。

『だって、真っ暗なんだろう？ だったら懐中電灯でも、ペンライトでも何でもいい。』

とにかく明かりがないと、困るじゃないか』

『どうして？』

真顔で聞いてくる。

『どうして、って……』

それが当たり前だからと、俺はそう答えたかった。
しかし、縁の表情がそれを許さない。
なぜなら実際に、俺が考えていたのはもっと別の理由なのだ。

『どうして明かりがないと、困るの？』

それを読み取ったみたいに、窓から身を乗り出して、幼なじみの顔が近付いてくる。

俺は、これに弱い。

急に心臓が狂ったみたいに高鳴って顔面に熱が集中して、何を考えていいのかわからなくなる。

そして、それが分かっててこいつはこんなことをしてくるのだ。

『だって、明かりがないと……』

だから俺は、為す術もなく重い口を開く。

耳の後ろを流れる血潮の音が耳障りで、月明かりで火照った顔を見られないように、微妙に顔を逸らしながら……。

それでも、俺は言ったんだ。

赤面物の台詞を、真顔で。

『お前を、探しに行けない』

それを聞いて、不意打ちを受けたみたいに目をまるくして、それからその顔が泣きそうな形にくしゃつとゆがんで、まるで泣き笑いのような顔で、縁は

「いめんね、光」。ちよなひ……」

「お兄ちゃん！」

静寂を揺らす無粋な声に、俺はゆっくりと目を開ける。
途端に俺の網膜に、刺すような人工的な明かりと、年下らしき少女の顔が映る。

こいつ、誰、だっけ？

まだ、頭が働かない。

というか、ここ、どこだっけ？

まだ、意識が夢の中からもどらない。
当たり前に分かるべきことが、何も理解できない。
世界の空気に体がなじまず、体の機関が全て空転している。

「なんでお兄ちゃんはこのなとこで呑気に寝てるの?!」

そんなこと俺にだって分からない。
とにかく体が重い。
眠らせて欲しい。

「縁お姉ちゃんがお兄ちゃんだけどっかに連れてっちゃったから、
なにかあるのかなって思っ^{ゆめ}て、結芽もついてきたのに!」

縁、お姉ちゃん？ それに、お兄ちゃん？

脳が軋みを上げる。

結芽、か。ええと、こいつは俺の妹、だっ^たたっけ？

「もーいいよ！ わたしはまた寝ちゃうから!」

ベッドの正面にある扉を開けて、

「もう全部知らないから！ 絶対起こさないでね！」

奥の部屋に行ってしまったおつとする結芽。

あれ？ こいつ行っちゃう、のか？

なんとなく、奥に見えたベッドだけの部屋が寂しげで、

「結芽！」

俺は意味もなく、結芽を引き留めていた。

「なに？」

結芽が俺を、驚くほど感情のこもらない目で見る。

「あー、その……」

思えば、たぶんここで俺は少しだけ、夢から醒めた。

夢から醒めて、なのになまた寝ぼけたことを言った。

「いい夢、見ろよ」

これはないだろう。年下とはいえ思春期の少女に、そんな子供だましにもならないような言葉が意味をなすはずがない。

案の定、結芽は一瞬だけきょとんとしたが、すぐに悪戯っぽい笑みでこちらを見返してきた。

「へー。お兄ちゃんは、わたしにどんな夢を見てほしいのかな？」

申し訳ないが、そんなに期待するような目で見ないで欲しい。
こっちの脳みそは既に限界だ。

眠りたい。とにかく眠りたい。出来れば楽しく眠りたい。

「俺と結芽が楽しく暮らす夢、とか？」

そんな連想から生まれたその苦し紛れの言葉は、意外にも結芽に
まで届いたようで、

「ふうん。……それはとても、いい夢だね」

温かい言葉を返してくれた、と思う。

なのにその時結芽が浮かべた寂しげな表情。

それは、少女に似つかわしくない、とてもとても、大人びた顔で、

「おやすみ……お兄ちゃん」

それでも結局扉は閉まる。

結芽の姿は、その奥に消えていく。

「おやすみ……結芽」

それを見届けて、俺も目を閉じた。

それが、俺にとって全ての終わりで、全ての始まりだった日の記憶。

この日こそが俺の、平和で平凡で平穏だった日常が、退屈だけだと愛すべき世界が終わった日。

そして、俺の前から縁が消えた日だったのだと思い出すのは、だいぶ後になってからの事だった。

1・ハロー、トラベラー

たぶん、『あの日』から一ヶ月と少し前。

『ゲーム？ 夢の中で？』

俺は、縁の突拍子のない話に、つい驚きの声を上げてしまった。

『あんまりびつくりしないでね、って言ったのに』

縁は少しだけ唇をとがらせた。

そんな仕種も愛らしい、ではなくて、

『だけど、そんなこと出来るのか？』

『分からないよ。分からないから、聞いてるんだし』

こっちとしてはもつと訳が分からない。

『そもそもお前って、夢で見るほどゲーム好きだったけ？』

俺も縁も、ゲームはあまりやらない方だったはずだ。

かろうじて俺は最新のゲーム機くらいは持っていたりもするが、縁の家にそんな物があったかどうかは……正直記憶にない。

『やらないよ。特にRPGとかそういうのあんまりやったことないから、最初は苦労した』

まだ少しだけふくれっ面のまま、縁がぶっきらぼうに言う。

『苦労、って？』

『キャラクタービルド、とか、パーティの構成、とか？』

『はあ？』

縁の口からあまりに似合わない言葉が出て来て、俺はつい間抜け顔を晒してしまった。

『そんな顔しないでよ。なんとなく集団のリーダーみたいなのを任されちゃったから色々大変だったの!』

顔を真っ赤にして怒る縁もやっぱり愛らしい、ではなくて、

『あ、悪い。でも、なんか本格的だなんて思ってたさ』

ちよつと失礼な態度を取りすぎたか、と俺は慌ててフォローを入れた。

それを聞いても縁はまだ不機嫌そうな顔をしていたが、俺が頑張つて視線を外さずにいると、やがて表情を緩めた。

『んー、もういい。』

光一にゲームのこと、色々聞いてみようと思ったけど、考えてみれば光一だってそんなにゲーム詳しい訳じゃないもんね。ネットとが使つて自分で調べる。

あーあ、説明書さえあればなあ……』

そして、ようやく機嫌を直した縁に対して、

『さすがに夢にマニュアルはないだろ』

と無神経な一言を言つてまた縁をふくれっ面に戻すことになるのだが、それもまた、遠い日の記憶で……。

「……ただいま」

俺はあいさつというより、独り言みたいにそう言い捨てながら、玄関の扉を開けて、

「おかえり」

すぐにその返答が返ってきたことに驚いて、玄関の前でしばし、硬直した。

「おかえり、お兄ちゃん」

それが不満だったのか、自分の存在を主張するみたいに、もう一度声かけられる。

それで、ようやく俺の硬直は解けた。

「な、何だ、結芽^{ゆめ}か」

息をつくようにそう言っで、俺は靴を脱いだ。

声の正体が義妹だと分かって俺は少しだけ緊張を解くが、それでも心臓はなかなか平常運転に戻ってくれない。

靴を脱ぐためその場にかがんでいる間にも、妹の視線を感じる。上からのプレッシャーがすごい。

靴を脱ぎながら、ちらりと前をうかがう。

妹の真っ白な素足と、その少し上辺りまで垂れた、水色のエプロンの端が見えた。

これの色違い、俺も持つてるんだよな、なんて考えながら、出来るだけ時間をかけて靴を脱ぐ。

それでもそんな時間稼ぎには限界がある。

とうとう靴を脱ぎ終えてしまった俺は、顔を上げながら妹に何でもないように声をかけて、

「どうしたんだよ、こんな所で。何か用事でも……」

「お兄ちゃんを、待つてた」

最後まで言わせてももらえなかった。

妹は、その黒目がちの大きな瞳にどこか思い詰めた色をたたえて俺を見ている。

……正直、何か色々ぞくぞく来た。

「お兄ちゃん。最近結芽のこと、避けてるよね」

疑問ではなく断定。

想像して然るべきだった指摘に、それでも律儀に動揺する心を鎮めるのに数瞬。

けれどすぐに持ち直して、俺は必死に取り繕って口を開いて、

「まさか。そんなことな」

「それって、好きな人ができたから？」

またも、言葉の出足を潰される。

しかしそれも当然か。

俺と結芽では言葉に入れている力が違う。

こいつの言葉はいつも直球勝負だ。

あらゆる意味で遊びがない。

だから妹は攻め手を緩めない。

「天壤先輩は、お兄ちゃんのことなんてたぶん気にもしてないよ？」
痛烈な言葉を、たぶん、俺に痛烈に響くだろうと考えている言葉を、容赦なく吐いてくる。

……だが残念。

そんな言葉に意味はない。

そんなことはとづくに知っている。

そもそも、俺が『惚れているという設定の』天壤先輩とは廊下ですれ違ったことすらない。なのに気にされていたとしたら、その方がずつとホラーだ。

俺の無言をどう解釈したのか、妹は少しかだけ語気を緩めて俺に歩み寄ってくる。

「ねえ。お兄ちゃん。前みたいにはできないのかな？」

好きな人ができたら、妹とは一緒に話すこともできないの？」

「……………」

俺は、何も答えられなかった。

そもそも、順番が違う。

好きな人が出来たから前のように話せないんじゃないなくて、前のように話せないから、好きな人が出来たなんて嘘を吐いたんだ、なんて事情、当人に話せるはずもなく、

「悪い。疲れてるから」

その一言だけで話を打ち切ると、

「お兄ちゃん！」

無言の背中で妹の声を跳ね返しながら、俺は自分の部屋に向かう。

それでも、妹の声は俺を追いかけてくる。

「待つて！ お兄ちゃん、ご飯は？」

「…要らない。向こうで食べてきた」
嘘だった。

けれど、要らないのは本当だ。

まるで食欲がわかない。

もういつそのまま寝てしまおうと考えながら、俺は部屋に入る。

ドアが閉まる瞬間、

「こんなのぜんぜん楽しくないよ、お兄ちゃん……」

聞こえてきた妹の言葉が、やけに胸に突き刺さった。

「ふう……」

俺は後ろ手に部屋のドアを閉め、手早く制服から着替えるとベッ
ドに倒れ込んだ。

俺たちが倦怠期の夫婦みたいな会話を交わす羽目になったの
には、一応理由がある。

結芽は俺の本当の妹ではない。

一年ほど前のある日、家主の諒子^{りょうこ}さんが、

「今日から家族が増えることになったよ」

と言っていきなり連れて来たのが、彼女、遠野結芽^{とおのゆめ}だった。

突然新しく出来た家族に当然俺は戸惑ったが、幸いにも結芽と俺の相性は悪くなかった。

俺たちは少しずつ少しずつ、お互いのことを理解していった、それにつれてゆつくりと、ちよつとずつ仲良くなつていった、段々と仲良くなつていった、さらに仲良くなつていった、もっと仲良くなつていった、もっともつと仲良くなつていった………結果、仲良くなりすぎた。

普通の兄妹なんて物を知らなかった俺たちは、お互いに愛情を注ぐことにはばかり夢中になって、いつの間にか兄妹という関係性を飛び越えてしまっていた。

……いつからだっただろうか。

妹の俺を見る目が、妙に熱く潤んでいることに気付いたのは。

……いつからだっただろうか。

妹の俺への態度に、単なる兄妹愛以上の何かを見出したのは。

いくら義理とはいえ兄妹で色恋沙汰なんて冗談にもならない。

何より、俺たちをこうして養ってくれている諒子さんに申し訳が立たない。

そうして俺は、結芽の熱が冷めるまで、妹と距離を取ることが決めた。

そうは思っけていても、無邪氣に懷いてくる結芽を邪険に扱うのはどうにも心苦しい。

おまけに付け焼刃の兄の悲しさか、そういうことを意識してからこちら、どうしても結芽を『妹』ではなく『かわいい年下の女の子』として見てしまう自分にも氣付いていた。

だからせめて、好きな人が出来たと言つて距離を置こうとしたのだが、

「それを理由に詰め寄つて来られちゃ、逆効果だよなあ……」

あの妹が、そんな嘘でどうにかなるような相手であるはずがなかった。

「あー、もういいや！ 寝よ寝よ！」

本当に眠る氣なんてなかったはずだったが、これ以上起きていても氣が滅入るだけだ。

蛍光灯の光を、腕をかざしてさえぎる。

そのまま全てを忘れるように目をつぶつて、頭の中を空っぽにする。

幸い遅くまで遊び歩いていたせいか、自分の想像よりも体は疲れて眠りを欲していた。

意識は瞬く間に、夢の世界へと旅立つて……。

(……あれ?)

気が付いた時、辺りは真っ暗になっていた。

(俺、いつ電気消したっけ?)

そんな呑気なことを考えたのも束の間、すぐに異常に気付く。

(なんだ、これ……!)

明かりどころの話じゃない。

俺は今、自分の疑問を声に出して言っただつてもりだつた。
なのに、声が出ない。

いや、声の出し方が分からない。

(なんなんだ? なんなんだよ、これは……!)

それどころか、体の感覚が一切ない。

手を動かそうにも、手の動かし方が思い出せない
足を動かそうにも、足がどこにあるのかすら分からない。

目や耳も鼻も利かない。

世界を知覚する全ての情報が遮断されていた。

何が何だか分からない。

あまりに状況が理解出来ず、パニックを起こしかける。

だがそんな時、闇に『声』が響いた。

「ハロー、トラベラー。」

ナイトメアの世界にようこそ。

貴方は7013027492人目の探訪者です」
トラベラー

2・ユニークスキル

たぶん『あの日』から、十日ほど前の記憶。

『だって、明かりが、ないと……』

だから俺は、為す術もなく重い口を開く。

耳の後ろを流れる血潮の音が耳障りで、月明かりで火照った顔を見られないように、微妙に顔を逸らしながら……。

それでも、俺は言っただ。

赤面物の台詞を、真顔で。

『お前を、探しに行けない』

それを聞いて、不意打ちを受けたみたいに目をまるくして、それからその顔が泣きそうな形にくしゃっとゆがんで、まるで泣き笑いのような顔で、縁は

『うん、不合格!』

それまでの雰囲気をぶち壊すようなことを、言ったのだった。

『な、何でだよ』

俺は釈然としない思いを抱いてそう抗議したが、縁にとってそれは当然の答えだったらしい。

『んー。夢の中っていうのはさ、イメージがそのまま形になる世界なんだよ？』

わたしを見つけるためにまず明かりっていう発想からしてかなり遠回りだし、どうせ光を選ぶにしてももつとこう、太陽、とか、スケールの大きい物を言うべきだと思う』

『いや、太陽なんて出てきたら焼け死んじゃうだろ、みんな』

俺が当然の切り返しをすると、縁は呆れたようにため息をついた。

『そういう常識的な考えが夢では障害になるんだよ。』

熱がない太陽も相手だけを焼き尽くす炎も夢の中なら存在させられるし、その辺りはとにかくイメージ次第。

だったら何でもイメージを広げていって、壮大にやっていかなきゃね』

『……いや、それは、違うんじゃないか？』

その言葉に、お前はスケールの小さい男だ、と言われた気がして俺は少しムキになった。

『例えば、ほら。懐中電灯だって便利だろ。』

そりゃ太陽ほど明るくなくかもしれないけど、余計な場所を照らすこともないし、どんな場所でも、たとえ太陽の光が届かないような物蔭だって、うまく使えば明るくしてくれる。

何でもでつかければいいってもんじゃない。そもそもイメージなんて広げる物じゃない、研ぎ澄ます物なんだよ』

自分でも今一つ理解の出来ない理屈を振りかざして、反駁する。

いつも通り、俺たちの意見は真っ向対立、正面衝突した。

俺たちはしばし、にらみ合って、

『……ふふっ』

『……ははっ』

いつものように、笑い出した。

『やっぱり光一とは、びっくりするくらい合わないね』

『そりゃあこっちの台詞だよ』

縁とは幼なじみで、誰よりも、たぶん両親よりも長い時間を一緒に過ごしているのに、考え方は正反対だったりする。

行動派と思考派というか、感覚派と理論派というか。

俺に言わせれば縁は感覚派というよりも無鉄砲を楽しむ愉快犯だし、縁に言わせれば俺は用心深く考えた時ほどありえない選択肢を選ぶ変な奴らしい。

まあどの言葉が真実かはさておき、とにかく考える前に思い付きで行動する縁と、行動する前にどうしても考えずにいられない俺とでは、何かと意見が対立する。

そして意外とそんなところが、俺と縁が長く一緒にいられる理由なのかもしれない。

それを証明するみたいに、次の縁の声に、先程までの苛立ちは微塵も見えなかった。

『だったらさ。いつか《その時》が来ても、迷ったらダメだよ』

『その、時……？』

俺の問いに、縁は直接は答えることはせず、

『わたしには理解できない考えだけど、その質問に《光》って答え
たそれが、きつと光一の本質なんだよ。』

だから、光一は自分の信念を貫いて』

『ん、ああ……』

まるでさとすような言葉に、曖昧に俺はうなずいた。

バカにされるのは嫌だが、あんな思いつきの言葉を応援されても
困ってしまう。

少し眉根の寄った俺の顔を見て、縁はやわらかく微笑んで、

『そんな困った顔しないで。』

難しく考えるようなことじゃないんだよ。

……光一の信じてることを、わたしは信じてる。

ただそれを、覚えていてほしいだけだから』

そして単純な俺は、もうそれだけで何もかもを信じられるような
気がしたのだった。

そして今。

闇の中に、誰とも知れない『声』が響く。

「世界は暗闇に包まれ、既存の秩序や法則は全て崩壊し、確かな物は一つありません。」

この世界で貴方が初めて見つけた物は何ですか？」

（な……！ 今、の……）

それはあまりにも聞き覚えのあるフレーズで、驚愕がほとんど物理的な衝撃となって俺の頭を直撃する。

もちろん響いてくる『声』は縁とは似ても似つかない。

それでも、縁の言葉が、縁の声が、一年以上もの時間を越えてよみがえってくるようだった。

（そう、なのか……）

何より俺の胸に、ストンと腑に落ちる物があった。
だってそうだろう。

もちろん、どうやって縁がこの事態を予見していたのかは分から

ない。

だが、

（今が『その時』なんだな、縁！）

俺にはそれで構わなかった。

本当に久しぶりに、縁を感じた。

縁の真意どころか『声』の意味も、正体にも見当はつかない。
だが、その声の主が誰であれ、俺の言葉は決まっていた。

「光、だ！」

声なき声で俺が叫んだ瞬間、その意志に呼ばれたように目の前に、
光の筋が生まれる。

だが、弱い。

出て来たのは、周りの闇にあつという間に飲み込まれてしまいそ
うなほど弱く、頼りない光。

（違う。そうじゃないだろ）

そんなものじゃないんだ。

俺が望んだのは。

（そうだ。俺が、俺が望むのは……）

縁のいる所まで、俺を導いてくれる光。

どんな闇にも負けない、悪夢の世界を貫く光明。
全ての暗闇を切り裂いて、真実を照らし出すための剣。

（だから……）

もっと強く、と念じる。

小さくても構わない。ただ、縁のいる場所まで届くほど、鋭く、強く！

（まだ、まだ足りない。もっと、もっとだ！！）

イメージを研ぎ澄ます。

淡い光の束をより合わせて、鋭い閃光を生み出すイメージ。

俺の意志に合わせて、光が収斂する。

密度を増した光が、その光度を上げていく。

（……やっとなんだ、あいつの手掛かりなんだ）

一年前、唐突に俺の前から姿を消した幼なじみ。

あの言葉が縁の言った台詞と同じ物なら、この道はおそらく縁がかつてたどった道で、だったらその先には縁が待っていると、俺は信じる。

だから、

（光を！俺に、縁を見つけ出すための、光を！！）

脳がねじ切れるほどに強く念じる。

迷いなく、ただ愚直に、光だけを望み続ける。

俺が答えて、縁が信じたその光を、この世界に具現化させる。

そして、とうとう、

（出来、た…？）

俺の前に、それは姿を現した。

ちっぽけで細い、吹けば飛ぶほどの矮小な光。
だがその本質は違う。

闇に屈さず、決して折れない確固たる意志の輝きが、その光
には宿っていた。

（これが、俺の……）

俺はその光に魅入られたように手を伸ばす。

だが、俺の手が光に届く前に、闇の中に再び『声』が響く。

「おめでとうございます。」

貴方はユニークスキル『真実の剣』を発現しました。

ユニークスキルは貴方を映す鏡であり、生涯を共にする相棒であり、頼れる武器でもあります。

悪夢の世界ナイトメアを旅する上で、是非とも役立てて下さい」

（ユニーク、スキル…？）

「また、ユニークスキルの発現に成功したため、貴方は『トラベラー』のクラスを獲得、ナイトメアの『探訪者』として認められました。

では、これより新たな探訪者、普賢光一ふげんこういちをナイトメアの世界へと転送します」

（待つて、くれよ！ いきなり何を言ってるのか……）

この『声』には聞きたいことがたくさんある。

けれど、どれだけ制止の言葉を紡ごうとしても、体のない俺は無力で、結局、何も分らないまま、

「では、グッドナイト良い悪夢を！」

俺の意識は闇から引きずり出され、別のどこかへと連れて行かれる。

その、最後の瞬間、

『おかえり、光一』

懐かしい声を聞いたような気がして、俺は

「…え？」

俺は、森の中に立っていた。

3・氷結世界

たぶん『あの日』よりも二ヶ月くらい前。

『わたし、寝るのが怖い。最近、夢の中に他人がいる気がするの』
そう口にした縁の顔色は、月明かりの下でもはっきりと分かるほど青白かった。

『夢の中に他人が出て来るなんて普通だろ？ 俺の夢にもよく縁が出て来るぞ』

だから俺は、わざと冗談めかしてそう告げる。

しかし、もちろんそんなことで縁の気分が晴れることはなかった。
『わたしの夢にだって、いつも光一が出て来るけど、そういうのじゃなくて……』

俺としては、縁の夢に『いつも』俺が出て来る話は興味深かったが、問題は意外に根深いらしい。

『夢だからはっきりとは覚えてないんだけど、わたしの夢の登場人物じゃない、本当の他人がそこにいるの。』

うつん、というより、他人と、たくさんの人と同じ夢を見ている感じ』

さらに沈鬱な表情で縁はそうこぼした。

ストレス、とか、強迫観念、という言葉が真っ先に浮かんだが、俺が口にしたのは別のことだった。

『なら、今晚は俺の部屋で寝るか？』

『…え?』

縁が、珍しく驚いたような顔でこっちを見ていた。
そりゃあ当然だろう。

口にした俺の方まで「…え?」とか言いそうになっただくらいだ。

『あ、いや、深い意味とかなくてな?』

ただ、そんなに不安なんだったら誰かが傍にいた方が何かと都合が……』

本当に俺は何を言ってしまったんだろうか。

俺に限って無意識の内に何か言っなんて、考えもしなかった。

焦って弁解していると、縁はクスツと笑った。

『ありがと。何だか勇氣出た』

『あ、ああ。そうか……』

そのいつも通りの反応が、ありがたいような少し寂しいような。

うん、と可愛らしくうなずいて、迷いのなくなった目でこっちを見る。

『もうちょっと、自分でがんばってみるよ』

『そ、その方がいいかもな』

なぜか口にしたこっちの方が動揺を隠し切れず、言葉が上滑りする。

それを、縁は特に気にした風もなく、

『それじゃ、わたしはもう寝るね』

『あ、ああ……』

今日の会話は終了になる。

俺は動揺を隠そうとすぐ部屋に戻ろうとして、

『あ、待って』

ちよつと焦つたような縁に引き留められる。

振り返つた先にいた縁は、最初とはまた違う感じでうつむいて、

『また、今度。ほんとに光一の部屋で寝させてもらうから』

その言葉に世界中の時間が一瞬だけ止まって、俺は口を間拔けにも半開きにして、驚きの声を

「…え？」

俺は間抜けにも口を半開きにして、驚きの声を上げた。

一瞬前まで何もない暗闇にいたはずの俺は、なぜか一面の木々の群れの中にいた。

いや、それよりも……。

「声が、出せる」

その事実には、心の底から安堵する。

それから、ちゃんと自分の体があるか確かめようと、視線を下に下げて、

「何だ、この服……」

自分が着ている、奇妙な服に気付いた。

いや、奇妙と言うほどにおかしくはない。

THE・ぬののふく、という風情の、RPGの村人とかが着てそうな簡素な服だ。

しかし問題なのは、俺のクローゼットには絶対にこんな服は入っていないかったという事実。

そして、それ以上に奇妙なのが、

「これ、何だ？」

俺の左の腰にぶら下がっている物。

革で出来てるっぽいケースの中に、何か細長い物が収まってるっぽい。

「ええと……」

まさかな、とは思いつつ、ケースから飛び出ている握りっぽい所を掴んで、引き抜いてみる。

キラリと光る、白い刀身が姿を現した。

「マジ、かぁ……」

思わず嘆息する。

まあ実は、見た目から想像がついてはいた。

革のケースが鞘で、中には剣が入っているだろうということとは。

「しかし、これ、剣って言うには……」

短い。

短すぎる。

けれどもナイフだの短剣だのと呼ぶには長い。

「ショートソード、って奴かな？」

俺の中の乏しいゲーム知識がそう言っていた。
間違っているかもしれないが、だとしても問題ないだろう。
それよりもこんな物騒な物を抜き身で持っていたくはない。
俺は用心深く、『ショートソード（仮）』を鞘に戻した。

「で、結局、どういうことだ？」

部屋で寝ていたら、突然真っ暗な世界にいて体が全く動かせなかった。

そこで色々やったら、今度は森の中に飛ばされて、おかしい服と剣を持っている。

「さっぱり分かん」

そもそもここはどこなのか。

『声』は『ナイトメアの世界』に転送しますとか言っていたが、『ナイトメアの世界』という時点で訳が分からない。

ナイトメアと言うくらいなのだから悪夢という意味なんだろうが、だからどうしたというレベルの話だ。

夢という単語で心当たりと言えば、消える前に縁が言っていた『夢の世界でゲームをしていた』という話が思い浮かぶくらいだが、これは夢だとかゲームだとか言うにはリアルすぎた。

そもそも縁が言っていた『ゲーム』の詳しいジャンルは専門的すぎて分からなかったが（確か『VRMMO』とか『デスゲーム』みたいだとか言っていた）、RPGっぽいとも言っていたので、たぶんボードゲームやカードゲームの類ではなくテレビゲームだろう。

だったら最低でもディスプレイとコントローラーが必要なはずだが、こんな森の中にそんな物が置いてあるとは思えない。

縁につながるヒントを期待していたので残念だが、少なくともこの異常事態とはあまり関係がなさそうだった。

「第一こんな森、近所に……って、うわ！」

改めて森を眺めようと振り返ってみて、とんでもない物を見てしまった。

服装の確認に夢中になって気付かなかったようだが、森の後ろ半分は大変なことになっていた。

「こりゃ、確かに……。悪夢の世界、かもな」

思わずそう呟かずにはいられないほど、現実離れた光景が目の前に広がっていた。

氷の森。

そう評するのが適当なほどに、凍りついた森がそこにはあった。俺の周りはまだ霜が降りている程度だが、森の奥に目を凝らすと、木がまるまる一本氷漬けになっていたり、なかなかファンタジーかつファンタスティックな景色が展開されているようだ。

「さて、どうしようかね……」

状況は混乱している。

というより、俺の現状認識が混乱している。

このままここにいっても事態が好転するとは思えない以上、ここか

ら移動するというのが一番やさそうな選択肢なのだが……。

「猛獣とか、いないよな？」

得体の知れない場所には、得体の知れない生き物がいてもおかしくはない。

その時に、武器がこのショートソード一本というのは心もとない。他になにか、武器になりそうな物はないだろうか。

「あれ？」

自分の持ち物を改めて調べ始めて、左手首にやはり見覚えのない腕時計がはめられているのに気付いた。

ちよつと大きめなサイズの、アナログ時計。

時刻を確認すると、12時9分を指していた。

「俺、結局あのまま四時間近くも寝ちゃってたのか……」

なんて奇妙な感慨が込み上げてきたりもするが、そんなことを考えるのもこのおかしな状況から抜け出した後にする方が賢明だろう。

これ以上特に役立ちそうな物を持つてはいないようだ。

俺は覚悟を決め、安全そうな場所か、事情を知っていそうな人を求めて、ここから移動することにした。

しかしそうなると思えなくてはいけないのが、

「どつちに進むべきか」

という問題だ。

前方は、穏やかそうな春の日差しが差し込む森。
後方は、穏やかそうな春の日差しが差し込んでるのに凍りついた森。

まあ安全性を考えるなら、断然前方の普通の森に進むべきだと思うのだが……。

「よし、決めた」

俺は少しだけ考えた後、後方、凍りついた森に向かって歩を進めた。

明らかに不自然なことが起こっている氷の森なら、俺の身に起こったこの異常な事態の答えも分かるかもしれない。
などという後付けの理由をこねくり回してもいいが、俺がこっちを選んだ答えは簡単。

なんてことはない。

単純に未知への恐怖より好奇心が勝ったのだ。

好奇心に殺された猫っていうのは俺みたいな奴だったのかなと思いつながら、俺はぽかぽかとした暖かそうな木々に別れを告げ、結晶化した白いオブジェの方へと歩いていく。

「ぐべっ！」

氷の森に足を進めて五分ほど、俺は早くもこっちのルートを選んだことを後悔していた。

最初の内はよかった。

地面の草には霜が降りていたし、最初にいた場所より気温は低かったが、普通に歩くことが出来た。

だが、奥に進むにつれて森の凍り方はひどくなり、今ではデコボコしたスケートリンクを歩いているような具合で、

「あぶっ！」

俺はたびたび転んだ。

幻想的なこの風景の中で、かつこつかないことこの上ない。

だが不思議と、ほとんど痛みはない。

顔面が地面にぶつかってもスポンジが間にあるような感触がして、ほとんど衝撃を感じないのだ。

「絶対、おかしいよなあ……」

もしかして痛覚が麻痺しているのかとほおをつねってみたのだが、それは普通に痛かった。

一体何が起こっているのやら。

謎が一つ増える。

「というか、この森もやっぱおかしい」

この辺りの木は幹どころか枝葉の先まで完全に氷に覆われているが、こんな広葉樹だらけの見るからに暖かな気候の森が凍りつくはずないし、そこに目をつぶったとしてもここの道は整然としすぎて

いた。

道には木の枝一つ落ちていないのに、そこから一步でも外れようとすると思集した木々が邪魔をして進めなくなる。

まるでゲームに出て来る森のフィールドみたいで、何だか不自然に感じた。

「大体、考えてみれば今が夜の12時なら、こんなに明るいはず、ないし……」

そう考えると、こんなに明るい森の中が、やはりどうにも不気味に映る。

変な生き物に襲われないだろうか、という恐怖がよみがえってきて、俺はちらりと腰のショートソードに目をやった。

そもそも、俺は荒事には向いていない。

喧嘩をしたことなんて数えるほどしかないし、とっさの判断が必要な状況に弱い。

考える前に行動する縁と違って行動する前に考える俺は、切羽詰まった状況になるほど色々と考えてしまって、逆に動けなくなってしまうのだ。

『ピンチになると、脳からアドレナリンとかがどばどば出てさ。何か動かしにはいられないんだよね!』

などと縁は語っていたが、俺は完全に逆だった。

ピンチになるほど頭だけは冷えて、それこそ無意識に善後策を探す。

でも結局選択肢が多すぎて、何か行動を起こす前に時間切れになる。

そんな感じだ。

正直暴走トラックとかが突っ込んできたら、一步も動けずに轢かれる自信がある。

一応縁に言われて対策みたいな物を考えたこともあるが、それだつてうまく行くとは……。

なんて、心の中で愚痴をこぼしながら進んでいた時だった。

「……お？」

奥に、少しだけ開けた場所を見つけた。

氷の森に入り込んでから、初めての道の变化だ。

道が曲がりくねっているため、ここからでは全体像は見えないが、もしかするとそこに何かあるかもしれない。

とりあえずそこまでは頑張ろうと足を進める。

逸る気持ちのままに、また何度か派手に転びながら俺はようやくその場所までたどり着いて、

「！？」

俺は瞬間、息を飲んだ。

そこにはこの世の物とは思えない、幻想的な生き物がいた。

氷の世界に佇むそれは、氷よりも澄み切った肌と、月光を湛えたかのような銀髪を持つ、一人の少女。

彼女はこちらに背を向けているため、その表情をうかがい知ることが出来ない。

だが彼女はその後ろ姿だけで、俺を圧倒する。

その姿はまるで、触れた瞬間砕け散る、氷細工の芸術品。

線の細い妖精じみた体躯に、危うい程に白い肌。

月の光のように妖しく波打つ銀髪と、そこから控えめにのぞく、人の物ではありえない、大きく尖った耳。

「エル、フ…？」

俺の口から、意図せず言葉が漏れる。

「！？」

だが不用意に漏らされたその言葉は、彼女に俺の存在を気付かせた。

彼女は弾かれたように振り返る。

そこで初めて、後ろからでは見えなかった、彼女の顔が俺の前に晒されて……。

「な、に…？」

そして俺は、再び驚きに息を飲むことになる。

「よ、^{よもぎ}四方坂、ナキ…？」

振り返ったエルフの少女は、現実での俺のクラスメイトと全く同じ顔をしていた。

4・テンミニッツアドベンチャー

『あの日』よりも前、いつとも知れないほどありふれた日の記憶。

『お前はすごいよな。ああいうとっさの時、何も考えずに動けるんだから』

『ん、光一は頭でつかちだもんね。いちいち考えてからじゃないと動けないんだっけ』

『こればかりは性分というか、条件反射みたいな物だからなあ』

『じゃあさ。もういっそ、こういう時はこうするって、全部あらかじめ考えておけばいいんじゃない?』

「よ、^{よもぎ}四方坂、ナキ…？」

呆然とこぼした、俺のそんな問いかけに対する返答は、

「ッ！」

「あ？ え、ちょ…っ！」

わき目も振らない『逃亡』だった。

俺の言葉を聞くなり、彼女は即座に俺に背を向け、躊躇いのない動作で地面を蹴り、脱兎のごとく逃げ始めた。

「ちょ、ちょっと待った！」

彼女が俺のクラスメイトの四方坂であれ、そうでないにしろ、とにかく彼女は大事な情報源だ。逃がす訳にはいかない。

俺は慌てて追いかけたのだが、

「だから、少し待つへブ！」

地面が凍っていたのを忘れていた。

俺はまたも無様に転んで地面に頭突きを食らわせていた。

やはりあまり痛くはないが、その間に四方坂には距離を離される。

「くっそ…！」

起き上がって必死に足を踏ん張るが、冷たい地面はそれに応えてくれない。

四方坂はその間にも曲がりくねった道を器用に進み、森の木々に隠れて姿が見えなくなってしまった。

それでも死にも狂いで進んでいく内に、

『スキル発現 魔力機動』

頭の中に変な文字列が浮かび上がり、同時に、

「お、おおっ？」

氷の上での移動が、スムーズになった。

先程までと違い、ちゃんと体の動きをイメージすると氷の上でも滑らずに足がぴたっと止まる。

蹴り足の力が不十分かな、と思うような時も、十分な加速が生まれる。

……なんとなく、地面に足がついていない時も加速していたり、作用反作用的な物を考えるとちょっと不自然なくらい移動している気もしたが、とにかく速度は上がった。

今までとは比べ物にならない速さで森を進む。

それはもう、飛ぶように走る。

時々角を曲がり切れずに木にぶつかりそうになりながらも、俺は何とか速度をキープしつつ道を曲がって、

「いた！」

ようやく四方坂の姿を見つけた。
彼女はやはり木々の少し開けた場所に、女の子座りで呆然とへたり込んでいた。

「何だ、様子が……」

探していた相手を見つけた安堵よりも、違和感の方が勝る。
氷の地面に座り込む彼女の表情は、明らかに尋常ではなかった。
だがその疑問の答えは、すぐに見つかった。

「な……!？」

四方坂が呆然と見上げるその視線の先には、今にも四方坂に飛び掛からんとする、怪物の姿があったのだ。

「冗談、だろ？ あんな、生き物……」

だが、そこには、確かに怪物としか言えない生物が存在していた。
目測だが2メートル近い長身に、びっしりと黒い鱗を生やした、
異形の化け物。

魚人、なんて言葉が、脳裏をちらつく。

そんな怪物が、手にした曲刀を振りかざし、今にも人を襲おうとしている。

あそこに行けば、もしかすると俺も殺されるかもしれない。
そう認識した時、俺の足は恐怖にすくんだ。

順調に進んでいた動きは滞って、全身を冷えた血が回り始める。
頭の芯が冷えて、脳の回転ばかりが速まるイメージ。

これからどうすればいいか考え始めた脳に合わせて、行動までも戸惑って進むのを止めて……。

しかし、そんな硬直は一瞬だった。

さて、問い。

『目の前で女の子が化け物に襲われそうになっています。
あなたはどうしますか？』

こんな質問にどう答えるか、真面目に考えたことはあるだろうか。

俺は、ある。

たぶん何十年生きていようが一度もあるはずがないシチュエーションだと知りつつも、細かい設定まで考えて150パターンについてシミュレーションしてみた俺は間違いなく馬鹿だが、今回ばかりはその馬鹿さ加減が役に立つ。

なぜなら、150パターン全ての答えは同じだった。

つまり、

「全力で、助ける!!」

俺は固まった足を叱咤して、もう一度強く地面を蹴って加速、一瞬だけ躊躇った分の勢いを取り戻すように、さらに走る速度を上げる。

行動する前に考える俺は、とっさの判断が必要な時でも、いや、そういう時こそ余計に考えることを優先してしまう。

だがそれはつまり、事前に方針さえ決めておけば、ここぞという時にいつだって自分の思う通りに行動出来るということでもある。

「う、おおおおおおー！」

大声を上げて、怪物と四方坂の所まで突っ込んでいく。

考えなしにただ叫んでいる訳じゃない。

彼我の距離は10メートル。

この距離を縮めるまでに、怪物の注意を四方坂から逸らす必要があった。

（まだ、速度が上がる…！）

怪物の許に一直線で向かいながら、俺は自分の走る速度に驚いていた。

自転車に乗っている時のような、いや、それ以上の風を体でかき分けながら、飛ぶように走る。

（これ、なら…！）

7メートルの距離を、瞬く間に0にする。

そして、最後の跳躍。

3メートル以上も離れた場所にいる鱗の怪物に向かって、俺は飛

ぶ。

思い切り地面を蹴りつけ、さらに空中で加速する。

そして、その最後の加速をした瞬間、俺の体にあつて俺の後押しをしてくれていた何かが、全て使い果たされたことを知る。

たぶんもう、さっきみたいな速さで移動は出来ない。

一瞬不安がよぎる。

だが、その速度だけは、今もこの体にある。

近くで見るほどに迫力を増す怪物の体がぐんぐんと近付いてくる。遠くに見えたはずのその化け物は、今はもう目前に迫っていた。

(このまま、ぶち当たる!!)

速さとは、力だ。

それは物理学も証明している。

運動エネルギーは速度の二乗×質量で決まる。

速ければ強い。止まっていれば弱い。単純明快!!

「この」

そこで、鱗の化け物がようやくこちらに気付く。

真っ黒な鱗で覆われたその顔面目掛け、俺はショートソードを振りかぶって、

「喰らえ、鱗野郎!!」

思い切り、叩き付けた。

我ながら剣を使うのが初めてだとは思えないほどの、会心の一撃だった。

しかし、

「ぐう！」

返つて来たのは、攻撃したこちらが思わず呻くほどの、どこまでも硬質な手応え。

反動で手首が悲鳴を上げ、剣を取り落としそうになる。それでも、

「ま、だ……っ！」

この一撃が決まらなければ終わる。

こんな怪物と、まともにやり合えるはずがない。

それが分かっているから、俺は……。

スキル発現 オーバードライブ

頭の中に、おかしなメッセージが届く。

だが気にしない。気にならない。気にしている余裕などない。

「これ、でええええええ！」

叫ぶ。振り抜く。押し込んでいく。

既に俺の最大の優位だった、速度と勢いはほとんど殺されている。それでも体に湧き上がった新たな力に全てを賭けて、希望にすが

って俺は剣を振るう。

「ぐっ！」

なのに堅い、堅すぎる手応え。

軋む刃と軋む腕。

悲鳴を上げる体に、しかし壊れても構わないとばかりに力を込めた。

そして、ある瞬間、急に手元が軽くなる。

(通つ、た…?)

そんな錯覚を抱いた俺の視界に、スローモーションのように映る、キラキラときらめく光。

手にしていたショートソードが、砕け散っていた。

(そんな……)

顔から血の気が引く。

鱗の怪物と目が合う。

奴はにんまりと笑った、気がした。

「う、ああああああああああ！！」

それでも、それでも俺は剣を振り抜いた。

もう全てが終わってしまったと分かっている、恐怖が、焦りが、そして何より事ここに至っても諦めない俺の脳が、体を突き動かす。残った刀身を、怪物の鱗に押し付けるように俺は右手に力を込めて、

「あ、れ？」

スルツとすべるように鱗の上を抜けていく刀身。
急速に抜けていく力。
急速に遠のいていく意識。

（なに、が……）

起きたのか分からない。
ただ不意に訪れた圧倒的な脱力感に、抗うことも出来ないまま、俺は地面に吸い込まれるように倒れていく。

「GYAAAAAAAAAAAAA!!」

薄れゆく意識の中、鱗の怪物が断末魔の声を上げ、その体が小さな光の粒子となって天に昇って行くのが見えた。

「お兄ちゃん！　しっかりして！　お兄ちゃん！」

「ん、ん…？」

俺はまた、妹の声で目が覚めた。
見ると、結芽が俺の体にすがりつくようにして、必死に声をかけている。

「あれ、結芽？　何でここに……」

「お兄ちゃん！？　よかった！」

俺が目を覚ますと、妹はぎゅっと俺にしがみついてきた。

「あ、れ……？」

突然の妹の来襲に目を白黒させながら辺りを見回すが、当然ながらそこには凍りついた木も、鱗の怪物もない。
いつも通りの自分の部屋だった。

「一体、何があったんだ？」

俺が尋ねると、結芽はハッとして俺から離れ、後ろめたそうに答えた。

「あ、あの、勝手に部屋に入ってごめんなさい。

え、ええと……お兄ちゃんの部屋から苦しそうな声が聞こえて、部屋の中を見たらお兄ちゃんがうなされてるから起こそうとして、でも、全然起きなくて……」

「ああ、そうか……」

どうやらやっぱり俺は、夢を見ていたらしい。

冷静になってみると、急に体がなくなってしまうたり、いきなり変な場所にいて知り合いに会ったり、怪物と戦ったり、夢だとも考えなければ辻褄が合わない。

そして逆に、さっきのを夢だと考えると、あの理屈に合わない支離滅裂な感じは確かに夢の特徴だなと納得出来る。

第一、女の子を助けるために剣一本で怪物に向かって行ったり、エルフ耳になったクラスメイトを見て『氷細工の芸術品』とか論評してみたり、実際にいたらかなり痛い奴である。

夢の中でもなければ、俺がそんな行動を取るはずがなかった。

微妙な顔をしている俺を見てどう思ったのか、

「ごめん、ごめんね、お兄ちゃん。いやな夢、見たんだよね」

涙ながらに謝罪してくる妹に、俺は、

「……いや」

首を横に振ってみせた。

別に結芽のせいで悪夢を見た訳ではないし、そもそも……。

「良い夢……だったと思う」

「え？」

俺がひどくうなされている所を見ているからだろう。

そう口にすると、妹はひどく驚いた。

だがそれは、俺の本心だった。

はつきりとは覚えていないが、最後の瞬間、四方坂を襲っていた怪物が光になって消えていくのを見た気がする。

だったら俺は、ちゃんと四方坂を助けられたってことだ。ならそれは、良い夢だったと言ってもいいんじゃないだろうか。

「いい夢、だったの？ …… ほんとうに？」

いかにも恐る恐る、という具合に、結芽が聞いてくる。

「ああ。本当に、そう思うよ。」

その言葉に、俺がしっかりと答えてやると、

「そつ、か。いい夢、だったんだ……」

なぜかとても嬉しそうに、妹はうなずいた。

「えへ、えへへ……」

それから急に元気になった結芽は、いきなりそんな風に笑い出した。

正直、ちょっと怖い。

さらにそこから、ドン引きしている俺の右手を両手でぎゅっと握り締めると、

「ね、ねえお兄ちゃん。さっきお姉ちゃんが帰ってきて、わたし、ご飯温めたんだけど……」

「ん？」

「お兄ちゃんも、夕飯まだだったよね？ 一緒に、食べないかな？」
上目遣いに、そんなことをねだってくる。

さっき見たおかしい夢のせいだろうか。

結芽に対するわだかまりが、胸の中から消えていた。

むしろ兄妹なんだから仲が良くて当然、という開き直りの気持ちがあふれてきた。

「ああ。じゃあ、頼むよ」

俺が答えると、

「ほんとっ！？　じゃ、じゃあ、お兄ちゃんの分も温めるから、すぐ来てね！」

ぜったい、逃げちゃだよ？！」

妹は即座に跳び上がり、ドアの向こうに駆け出して行った。

その様子を見て、俺は思わず苦笑してしまう。

「作ってもらってるのは、こっちだって言うのに……」
それでももちろん、悪い気がするはずはない。

（でもそういえば、三人そろって食事をするの、最近はなかったかな？）

なんてことを思いながら、俺はベッドから起き上がった。

流石にあんなに喜んでいる結芽を待たすのは悪いとすぐにドアに向かって歩き出し、その途中、何の気なしに枕元に目を向けた。

「……あれ？」

俺の目に留まったのは、枕元に置かれていた、何の変哲もない目覚まし時計。

ただ、それを見て俺は少しばかり眉をひそめる。

その時計は、しっかりと現在の時刻、『12時4分』を示し

て
い
た。

5・現実へ

『あの日』からおそらく、一ヶ月くらい前の記憶。

一時期は夢のことで不安定だった縁だったが、どうやら最近は逆に夢でゲームをするのが面白いらしく、楽しそうに話すことが多くなっていた。

今日も縁は窓から身を乗り出さんばかりの勢いで、俺に昨夜の夢での話をしていた。

『昨夜はね、すごかったんだよ！

なんと十二人も人が集まって、一緒に巨大なモンスターを倒してね……』

『それは……確かにすごそうだな』

大人数でモンスターに挑んだのも凄いのだろうが、俺はそれより一ダースもの大人数が、横一列に並んで延々とテレビ画面に向かってゲームをする光景を思い浮かべた。

ある意味壮観とは言えるかもしれないが、シュール過ぎる……。

おかしい映像を頭を振って追い出して、俺は縁に尋ねた。

『あ、そういえば。もし夢の中で本当に他人とゲームをやってるなら、現実の世界にもその人たちがいるってことだよな？』

『そうだけど？』

あっさり答える縁。

『だったら、現実で連絡取り合ったりってことはないのか？』

ほら、連絡先交換するのが怖いならさ、例えばネットの掲示板とか使って……』

ああ、という風に縁がうなずいて、ちょっとだけバツの悪そうな顔をした。

『あー、うん。他の人に話を聞くまでは、そういうことしようかなって思ったこともあったんだけど……』

『何か問題があるのか？』

俺が尋ねると、何とも微妙な顔で縁は答えた。

『わたしはこうやって光一に話してるし、全然問題ないんだけど、基本的には』

一夜明けて。

朝は三人の時間が微妙に合わないこともあり、朝食を取る習慣はあまりないのだが、今朝は俺が起きると既に結芽がばっちり朝ご飯を用意していた。

三人そろつての食事を取り終わり、三人の中で一番出発の早い妹を台所から追い出して、ざっと後片付けをする。

手早く洗い物を片付けた俺がリビングに戻ってみると、諒子さんが一人、ソファでぐてつと寝そべっていた。

みぞりりょうこ
未森諒子。

この家の家主で俺と結芽の保護者。

年齢不詳。ショートカットで黒髪。凛々しい顔立ち。……胸が大きい。

大きな病気のせいで高校に通えなかったが、奇跡的に回復。

大検を受けて今は大学に通っているが、人付き合いは苦手。

ただし勉強はものすごく出来るらしい。

俺と結芽以外には家族や親戚と呼べる者はおらず、天涯孤独。

そこそこに膨大だったという両親の遺産を受け継いで、そのお金で俺たちを養っている。

というのが諒子さんの自己申告によるプロフィールだが、確かめたことはない。

というか、物心ついた頃から一緒に住んでいるというのに、年齢すら分からないというのはどうなのだろうか。

今年の諒子さんの誕生日も、結芽と二人で準備してちゃんと誕生会までやったのに、諒子さんは頑として自分の年を教えてはくれなかった。

家でお酒を飲んだりしているし、二十歳は越えているとは思っているのだが。

その二十歳越えの諒子さんがごろんと動く度、だるっだるのＴシャツの胸元が揺れる。

というか絶対ノーブラだろこの人、とか思いながら、俺は諒子さんに声をかけた。

「諒子さん、俺もう行っちゃいますから、そんなところで寝られても起こせませんよ?」

その言葉に、諒子さんは「んー?」と明らかに寝ぼけた感じの声を出してから、ソファから一步も動かずに答えた。

「ああ、大丈夫。午後からはバイトだし、今日は大学をサボってもう少し寝るよ」

「いやそれ、全然大丈夫じゃないですから!!」

基本的には諒子さんは比較的勤勉な大学生だが、家族絡みのイベントがあると必ずそちらを優先した挙句、体力を使いすぎて次の日大学を休みたがる。

俺の剣幕に、

「ふふ、冗談だよ」

と諒子さんは笑ったが、正直俺の見立てでは8:2くらいという所だ。

もちろん8割の方が大学をサボってバイトに行く確率。そして2割が大学をサボってバイトもサボる確率だ。

……既に大学に行かないことは確定していた。

「本当に、寝ないでくださいね」

無駄と知りつつも一応そう声をかけて、その場を離れる。

「行つてらっしゃい光一君。結芽を頼んだよ」

結局ソファから一度も離れないままの諒子さんの声に見送られ、俺は学校へと向かうことにした。

何で諒子さんに結芽のことを頼むなんて言われたのか不思議だったのだが、学校に行く支度を整えて玄関までやってきた途端、その謎は即座に氷解した。

「き、奇遇だね、お兄ちゃん。わたしもちょうど学校に行くところだったんだ」

玄関の前には、先に行つたはずの結芽がちゃっかりと待ち構えていた。

「いや、奇遇つて、お前……」

いくら何でも苦しすぎる言い訳だった。

「それに、時間大丈夫なのか？」

「……あっ！」

俺の問いに、結芽が泣きそうな顔になる。

結芽の通っている中学は俺の通う高校より若干遠いため、俺と時間を合わせると随分とギリギリになってしまふのだ。

結芽はしきりに前髪を、正確に言えば、前髪に留めてある髪留めをいじりながらオロオロとしている。

そうやって髪留めをいじるのは、本当に困った時の結芽の癖だ。
……ちなみに、その髪留めも昔、俺があげたものだったりするんだが。

だがまあこうなっては仕方がない。

俺はため息をつくと、

「駅まで走るぞ、結芽」

そう声をかけて、先に立って走り出した。

「う、うん！ お兄ちゃん！」

それを聞いて、なぜか嬉しそうに俺の横を走り出す結芽。

実際に俺の左隣を並走する結芽は、全身から嬉しいという感情をダダ漏れにしていた。

それを横目に、もう一度こっそりため息をつく。

今度のため息は、自分自身に対してだ。

もう一度、ちらりと横を見る。

遅刻しそうになって走っているというのに、結芽は幸せそうにしていた。

ちよっとうぬぼれた台詞になるが、こんなに素直に兄を慕う妹を遠ざけようだなんて、俺はどうかしていた。

（たぶん、気を回しすぎなんだよな、俺は……）

考えすぎるのが、俺の悪い所だ。

踏み込んでみて初めて分かることだってあるというのに。

（踏み込む、か）

そういえば、このまま学校に行けば、クラスには俺の夢に出て来た少女、四方坂がいる。

（ちょっとだけ、踏み込んでみようか）

俺はそんな密かな決意を固めながら、妹と二人、駅への道を急いだのだった。

俺の所属する2年A組で一番有名な生徒は、間違いなく四方坂ナキだ。

まずもう格好からして他と違う。

病的な寒がりで、真夏でもニット帽にマフラーにロングコートの完全装備。

担任の説明では『特別な病気みたいなもの』らしいということで教師もスルーしているが、病気『みたいなもの』という説明が既に胡散臭さ爆発である。

おまけにしゃべらない。

教師に当てられても、無言で首を振るだけ。体育の授業は必ず見学。

でもテストの成績は良く、いつも学年で10位以内。

しゃべらないのは授業だけでなく、休み時間も同様で、友達やクラスメイトと話している所をほとんど見たことがない。

前に隣の席にいた男子が三ヶ月で聞いた彼女の唯一の肉声が、「寒い」の一言だったというのだから、これはまた相当だ。

なのに美人。

マフラーとニット帽を外さないため、露出している顔のパーツは少ないのだが、それだけでも十分に美人だと分かるレベルの美人。

噂ではその美貌に引かれて告白した男子もいるとかいないとか。それについては、嘘か真か、返事がどうこう言う前に告白自体をスルーしたという逸話まで残っている。

そんな所から、クラス内でのあだ名は『ブリザード』。
あるいはマンガか何かのキャラ名から、『氷結の魔女』なんて呼ばれたりもしているらしい。

で、あるからして、

（そんな人間に話しかけるなんて無理、だよなあ……）
朝、密かに決意を固めたはずの俺は、放課後間近になっても四方坂に声がかけられないでいた。

最後の授業が終わってから、担任が来るまでの自由時間。
俺は勇気を出して、彼女から2メートルほどの距離にまでは近付いてみたのだ。

だが、声をかけるきっかけが掴めない。
というか、今思ったのだが、

『やー、実は昨日の夢に君が出て来てさあ……』

思いつきりナンパの台詞だった。
本当にあったかも分からない夢の話の口実に、女の子を口説こうとしている変な奴だった。

（ま、まあ妙にリアルな夢だったけど、別に俺の見た夢が四方坂と関係あるはずないんだし……）
話しかけたりしなくてもいいや、と自己完結しようとした時だった

た。

(……え?)

今まで彫像のようにじつと正面を見て動かなかった四方坂が、横を、俺の方を向いた。

そして、

「……………なに?」

しゃべった!!

いや、人間なんだからしゃべるのは当たり前だが、四方坂の肉声を聞いたのは初めてだったので、俺はえらくテンションが上がった。しかも、その声が確かに俺に向けられたというのがなぜだか誇らしかった。

もうこうなればと覚悟を決め、話しかける。

「き、昨日、変な夢を見たんだけど、その夢に四方坂が出て来たから、ちよつと気になったんだ」

やっぱり完全にナンパの台詞だったが、気にしない。
じつと四方坂だけを見つめる。

「…ゆ、め?」

小さな言葉と共に、彼女の無表情がほんの少しだけ揺れた。

その反応が嬉しくて、俺はさらに身を乗り出すようにして話を続けて、

「そう！ おかしいんだけどな。」

その夢では四方坂が銀色の髪にとがった耳をしてて、まるでエル
けれど、最後まで言葉を続けることは出来なかった。

パシン！！

という乾いた音が耳元で破裂して、俺は文字通り言葉を失った。

いつの間にか立ち上がった四方坂に、俺が平手打ちをされたのだ
と気付いたのは、さっきまで喧騒に包まれていた教室が、水を打っ
たように静まり返ってからだった。

打たれた頬を押さえることも出来ず、呆然とする俺に、

「あなたがどういっつもりかは、知らない」

静かな迫力を湛え、四方坂が詰め寄ってくる。
その迫力に押されたように、窓ガラスがピシピシと音を立てる。

「でも、それ以上話すつもりなら」

四方坂と俺以外が凍りついたように静止した教室で、一歩、二歩
と後ずさる俺を、彼女は視線だけで追い詰めて、

「あなたを、殺すから」

決定的な一言を放つ。

そのあまりの迫力に、俺はヒュッと息を飲んだ。

俺は最後の気力で、俺が話しかけたはずのクラスメイトの姿を見る。

だがそこにいたのはもう、何をしても無感動な、謎めいた少女なんかではなかった。

あらん限りの呪いを込めて敵をにらみつける、傷つけられた猛獣のごとき存在が、俺の前には立っていたのだった。

6・ナイトメアの歩き方

『あの日』から数えて、二週間ほど前。

『あの、さ』

縁がそう語りかけて来た時、これは『来る』など俺は覚悟を決めた。

いつだって縁は唐突だが、最近は少し、その唐突さの始まりを察知出来るようになってきた。

……ただしそう分かったからと言って、縁が何を言うかは全く見当もつかないのだが。

で、案の定、

『これ、何か分かる？』

俺は、縁が取り出した物を見て、首を傾げた。

『鍵、だよな？』

面白味のない答えを返すが、縁の表情は変わらない。

もちろん、縁もそんな言葉が聞きたかった訳ではないだろう。問題はどこの鍵かということだ。

考える。

どこかで見たことがあるようにも見えたが、鍵のデザインなんていちいち覚えていない。

俺が視線で降参の意を伝えると、縁はあっさりと答えを教えてくれた。

『光一の机の、一番下の引き出しの鍵だよ』

『おいっ！？』

これには流石の俺も声を荒げた。

しかし縁は平気な顔で、

『あそこ、全然使ってなかったでしょ。』

夕方、光一が外に出かけてる時、部屋に入って取ってきちゃった
『取ってきちゃったって……』

そんなあつけからんと言われても困る。

まあ確かに縁の部屋の窓の正面に俺の部屋のベランダがあるため、
忍び込もうと思えば忍び込み放題だ。

作った時これはマズイと思わなかったのか不思議なくらい防犯意
識のない家だが、だからこそそういう悪ふざけはやめて欲しかった。

そう思っただけで非難がましい目で縁を見ると、縁は『あ、ちがうちが
う』とでも言語化出来そうな仕種で手を振った。

『そうじゃなくて、ちゃんとチャイム鳴らして玄関から入ったよ？』

光一の部屋に行きたいので家に入れて下さい、って言ったら普通に
開けてくれた』

『マジかあ……』

防犯意識が甘いのは、家ではなくて家族の方だった。

いや、まあ、縁だったら問題はないだろうけどさ。

『で、何でそんな物持ってきたんだ？』

脱力しながらも、一応それだけは問いかける。

すると、縁はやっぱりマイペースに答えた。

『ちよつと、光一に持っておいて欲しくて、その引き出しに本を入
れてきたの』

『本？』

『正確には、マニュアルかな。《ナイトメアの歩き方》って題名』

『ナイトメア、って何だ？』
やっぱり意味が分からない。

『べつに、まだ分からなくていいよ。』

ただ、この鍵はわたしの部屋においておく。

それでもし、わたしがいなくなったら、思い出して欲しいの。
光一に必要なになる……かもしれないから』

『何言ってるんだよ、お前』

俺はそれを、まるで遺言みたいだと感じて、苛々して……。

「あなたを、殺すから」

なんて言われた時はどうなるかと思っただが、それからすぐに教室に担任がやってきて、俺と四方坂のやり取りはうやむやの内に中断。考えようによってはあれ以上状況が悪化する前に無事に騒動をやり過ごせたと言うことも出来るのだが、やはりあんな言葉を本気で他人から投げかけられるのは初めてだったので、俺はショックを隠し切れなかった。

ちなみに、四方坂の一番近くにあった窓ガラスには、原因不明のヒビが入っていたらしい。

何人かが恐る恐る近付いては確かめてすげーとか言っていたが、俺にはとてもそんな気力はなかった。

結局ホームルームが終わっても俺に四方坂と話す度胸はなく、帰宅部の俺は生気の抜けた足取りで家に帰った。

家に帰っても、俺の頭の中を支配していたのは依然として四方坂のあの強い、なんて言葉では言い表せないほどの鋭い眼差しで、その間俺はずっと上の空だった……らしい。

一方、妹の結芽はどうも昨夜から何かのフィーバータイムにでも突入しているらしく、いつも以上に元気に飛び回り、やたらと俺の世話を焼こうとした。

帰るなり荷物を持つと言ってくれたり、肩をもむとか言い出した。俺の部屋の片づけを申し出て実際にてきぱきとやり始め、夕食は当番でもないのに妹が作ったし、食事中もいちいち俺の皿におかずを取り分けてくれたり、食べさせてあげると言ってきたり、お風

呂に行こうとすると当然のようについてきて背中流すねと言ってく
れて……。

俺はその全てに生返事を返していたが、流石に最後ので我に返っ
てそれだけは断った。

ちよつとだけ妹に対する疑惑が復活した。

普通の兄妹ってこんなものだろうか。良く分からない。

そんなこんなであつという間に11時42分。

俺は自分の部屋のベッドの上で、ぼうつと天井を見上げていた。

そうすると考えてしまうのは、やっぱり昼間のこと。

四方坂の瞳を思い出す。

あれほど憎しみに染まった目を俺は今まで見たことがなかったが、
それだけではなく、四方坂の様子からは俺に対する怯えのような物
も感じられた。

「一体、何がいけなかったんだろうなあ……」

そう、呟いてみる。

十中八九、あの夢の話がトリガーになったことは間違いない。

だが、その夢の話のどこに地雷が潜んでいたのか、それが皆目見
当もつかなかった。

いや、すぐに諦めるのは良くないか。

ちよつと想像してみる。

例えば、こんなのはどうだろう。

実は彼女、代々伝わる退魔師の家系で、夜な夜な異空間に出かけては妖怪を討伐していた。

そんな世界に偶然紛れ込んだのが俺。

しかし彼女のお役目は普通の人間には秘密にしている。

異空間で人間（俺）に出会った彼女は一般人に見つかってはいけないと逃げ出したが、油断して妖怪（あの鱗人間）にやられそうになってしまった。

しかしそれは一般人とってた人間（俺）によって退治され、一般人と思っていた少年（しつこいくらいに俺）は実は同業の退魔師なのだと認識する。

それならバレても問題ないだろうと安心してた所、その少年（もはや補足不要なくらい俺）に学校で異空間の話をされる。

こいつ同業者なら妖怪退治の話はしちゃいけないって分かってるだろと怒り狂って平手打ちを……。

「いや、意味分かんねえ。退魔師とか妖怪って何だよ……」

その辺りまで考えて、俺はその馬鹿げた妄想を一蹴した。

そうなるとわざわざ教室で俺に声をかけた意味が分からないし。あっちの世界で見た四方坂の銀色の髪ととがった耳が説明出来ないし。

後は俺が体験したユニークスキルがどうかという声も関係してこない。

「ほんとに、なんなんだか、なあ……」

昨夜妹に起こされた時は、おかしい夢を見たとは思わなかった。だが、四方坂の反応を見て、ただの夢ではないのではという疑いが生まれてしまった。

なんとなく、もやもやする。

あの夢には、何か俺にとって大事な物が関わっているのではないかという予感めいた感覚が、さらに俺の不安感を煽る。

俺がそんな風に懊悩していた時、

「お兄ちゃん？ ちょっと、入ってもいい？」

ドアが控えめにノックされ、扉越しに妹の声が聞こえた。

……こんな時間に、何の用だろうか。

もし結芽の用事というのが、

「お兄ちゃん。今日、いっしょに寝てもいい？」

とかだったら確実に妹への疑惑レベルをマックスにまで引き上げなければいけないが、なんて馬鹿なことを考えながら俺は、

「いいぞー」

と素直に返事をしていた。

すると、

「お邪魔します」

右手で前髪をいじいじといじくりながら、妹が部屋に入ってきた。

もう中学三年だというのに、水玉模様の水色パジャマが非常に子供っぽい。

ただ、少なくとも枕を抱えていたりはしなかったので、俺はちょっと安心した。

「それで、こんな時間にどうしたんだ？」

前髪を弄るばかりで何も言おうとしない妹に、俺から水を向けてやる。

結芽は何か譲れない物がある時は積極的にガンガン主張するタイプだが、どうでもいい用件の時は逆になかなか言い出さなかったりする。

今はその消極モードのようだ。

「あの、ね。今日、お兄ちゃん、あんまり元気がなかったみたいだけど……」

「え？ あ、ああ」

一瞬否定しようかと思って、すぐにやめた。

流石にあれだけぼうつとしていれば家族は気付くだろう。

「そ、それってさ。お兄ちゃんが最近やってるゲームに関係あるのかな、って」

「ゲーム？」

予想もしなかった妹の言葉に、俺は首を傾げた。

正直、全く心当たりがなかった。

だが結芽は、またひとしきり前髪をいじってから、意を決したように、言う。

「今日、お兄ちゃんの部屋の掃除をしてる時、見つけちゃったんだ」
「な、なに…?!」

そういえば、確かに結芽が俺の部屋を掃除したいと言っのに許可を出したような覚えはある。

だが、見つけちゃったって、何をだ？
まさか、まさかまさかまさか

「オンラインゲームの説明書」
「よしセーフ!!!」

まさかではなかった!!
助かった!!
俺は、俺は助かったんだ!!

「お兄ちゃん…?」
妹が目を丸くしてこっちを見つめているが、とにかくこの喜びを誰かに伝えたい気分です!

ありがとう日本!
ありがとう地球のみんな!

……じゃなくて、
「オンラインゲーム、って、いわゆるネットゲって奴か?
普通のRPGとかじゃなくて?」

少なくとも俺は、そんな物を部屋に持ち込んだ覚えはない。

俺が疑わしげに聞くと、結芽は、

「たぶん……」

と自信なさそうにうなずいた。

しかし、実は結芽は大のゲーム好き。

うちの中では一番のゲーマーで、それこそネットゲにも手を出していると聞いたことがある。

そんな結芽が、ゲームのジャンルを間違えるとは思えない。

それでも半信半疑で結芽を見てみると、

「あ、じゃあお兄ちゃんも確かめてみて」

と、俺の部屋の隅、本がまとめて平積みになっている場所に行くと、マンガくらいのサイズの、一冊の冊子を持って戻って来た。

「これ、なんだけど……」

「な、これ……」

差し出された本を見て、俺は言葉を失った。
なぜなら、そこに書かれていたタイトルが、

『ないともあ の あるきかた 』

だったからだ。

「……………」

なんだろう、この名状し難い感覚。

とても大切な物を手に入れたような、ひどいパチモンを掴まされたような、何とも言い難い感慨が押し寄せた。

「これ、どこにあったんだ？」

こんな残念なセンスの物を買った覚えはない。

少なくとも、俺の目につく所にはなかったはずだ。

「あ、もしかしてお前、勝手に引き出し開けたりとか……………」

俺が疑いの目で見ると、結芽は慌てて首を横に振った。

「わ、わたしだって、掃除でそんなとこまで開けたりしないよ！ベッドの下だって、ちゃんと自重したし……………」

それはそれでコメントに困る。

結芽はちよつとだけ考える素振りを見せ、それから前髪をせわしなくいじりながら答えた。

「ごめんなさい、お兄ちゃん。」

本は一箇所に退けといたから、どこから取って来たのかは覚えてない。

この部屋のどこかなのは間違いないと思うけど……………」

「そっか」

まあ、落ちてた場所が分かったからと言って、何が変わる訳でもない。

それよりも中身確かめてみようかと俺はその説明書を開いて

ペイモン（以下ペ）「ハロー、トラベラーズ！ オレ様はペイモン！ お前ら新米トラベラーにナイトメアの世界のいろはを教える救世主悪魔だぜ！」

アスタナ（以下ア）「はろーとらべらーず！ わたしアスタナちゃん！ ペイモンちゃんとなかよしのプリティ悪魔なのー！」

すぐに閉じた。

「え？ 何だこれ？」

二等身くらいのミニキャラがひたすら掛け合っているだけの文章が見えた気がしたのだが、気のせいだろうか。

もしかして俺が知らないだけで、最近のゲームのマニュアルとい

うのはこういう物なのだろうか。

すると俺の反応を見ていた結芽が、言い難そうに口を挟んだ。

「たぶんそれ、正式なマニュアルの付録じゃないかな？」

ほら、簡易マニュアル、みたいな」

「……ああ」

不本意ながら、納得してしまった。

というかむしろ、マンガで分かるナイトメア、みたいなノリか。

あまり読みたくはないが、俺の昨夜の夢にも出て来た『ナイトメア』という単語はやはり気になる。

俺は覚悟を決めて、『ないとめあ　の　あるきかた』を開いた。

ペイモン（以下ペ）「ハロー、トラベラーズ！　オレ様はペイモン！　オマエら新米トラベラーにナイトメアの世界のいろはを教える救世主悪魔だぜ！」

アスタナ（以下ア）「はろーとらべらーず！　わたしアスタナちゃん！　ペイモンちゃんとなかよしのプリティ悪魔なのー！」

ペ「うわ！　自分でプリティとか、言っつて恥ずかしくねえのかよ！」

ア「ひ、ひつどいよー！　ペイモンちゃんなんてあくまのくせにき

ゆうせいちゅとかいつてるくせにー！」

ペ「きゆうせいちゅじゃねえよ！ 救世主だよ！

……はあ、まあいいや。とにかく、記念すべき初授業で教えるのはこの世界、ナイトメアについてだ」

ア「ナイトメアの世界なのー！」

ペ「まあ行つたことのある奴なら当然気付いていると思うが、オレ様たちのいるこの『ナイトメアは、眠った時にだけ訪れることの出来る夢の世界』だ。

普通の世界と一緒にだと考えてもらっちゃ困るぜ？」

ア「困るぜー？」

ペ「ナイトメアは正にファンタジーの世界。現実ではありえないようなモンスターも出て来るし魔法とかも使える、オマケにスキルとかパラメータまである、まるでゲームみたいな所なんだ」

ア「わー、すごーい！」

ペ「ただ、普通のゲームと違うのは、ナイトメアの世界では現実の世界と同じように自分の意思で体を動かせるし、叩かれたら痛いし斬られたら死ぬってことだ。

しかも『現実世界の体が眠っている間は元の世界に戻ることは出来ない』から、ピンチになったら現実世界に帰る、なんて都合のいいことは出来ない。

けどまあ、所詮は夢の世界。『こつちの世界で死んでも現実世界で死ぬ訳じゃない』から、そこは安心してくれ」

ア「まるで『VRMMOとりっぷ』したみたいな世界だけど、『で
すげーむ』じゃないってことだねー？」

ペ「オマエ、何でバカなのにそんな専門用語知ってるんだ？ まあ、
その通りかな」

ア「やったー！ ペイモンちゃんにほめられたー！」

ペ「いや、あんま褒めてもねえけど……」

ア「てれなくてもいいよ、このつんでれさん！」

ペ「なんか無性にイラツとしたけど話の続きな。

ナイトメアで死んでも現実世界では死ぬ訳じゃないって言ったけ
ど、もちろんペナルティはあるぜ」

ア「『ですぺな』だね？ 『しにもどり』すると経験値が1わりと
んだりするんだね？」

ペ「オマエ絶対ゲーオタだろ！ じゃなくて、ナイトメアでの死亡
はある意味で現実世界での死と同じなんだ」

ア「ええー？ じゃあナイトメアで死んでも、たましいが『ばるは
ら』へといざなわれちゃうのー？！」

ペ「いや、悪魔のくせにその死生観はどうなんだ？

ていうかぜんぜんちげえよ！ 『ナイトメアで死んだら、二度と
ナイトメアの世界にはやって来れない』んだ！」

ア「ナ、ナンダッテー！？」

ペ「つまりナイトメアは、即死〃ゲームオーバーの厳しいゲームだ
ってことなんだ！」

ア「いや、そのりくつはおかしい！」

ペ「何もおかしくねえよ！ いい加減覚えた言葉を適当に使うのや
めろよ！」

ア「ひ、ひしよがやったことです……」

ペ「じゃあオマエの監督不行き届きだから、オマエ責任とってクビ
な！」

ア「う、ううー。ペ、ペイモンちゃんのひとでなしー！ あくまー
！」

ペ「むしろどっちも正解だよー！」

ア「そ、それよりはなしのつづき！ つづき！」

ペ「あ、しまった！ ちゃんと説明しようと思ったのに、余計な話
をしてたせいでもう時間がないじゃねえか！」

ア「ええーやったーざんねんー」

ペ「途中本音がはさまってんぞ！？ はあ、まだアバターとかユニ
ークスキルとかトラベラーについて説明したかったんだが、それは
次回だな」

ア「じかいじかいー！」

ペ「さて、とりあえず、今回の復習だ。『でくくったところが大事な部分なんだが、オマエは覚えてるか』」

ア「もつちろん！」

ペ「じゃあ言ってみろ。間違ってたらギッタンギッタンにしてやるからな！」

ア「よし、いくよー。」

『オレ様はきゆうせいちゅあくまだぜ！』

『まあきづいていると思うが、オレ様をふつーといっしょにしてもらっちゃこまるぜ』

『さて、ふくしゅーだ。ぎったんぎったんにしてや……』

ペ「なんだよその悪意ある抽出！！勝手にオレ様を厨二病に仕立てるんじゃない！正しくはこれだよ！」

『ナイトメアは、眠った時にだけ訪れることの出来る夢の世界』

『現実世界の体が眠っている間は元の世界に戻ることは出来ない』

『こつちの世界で死んでも現実世界で死ぬ訳じゃない』

『ナイトメアで死んだら、二度とナイトメアの世界にはやって来れない』

ア「みんなー、おぼえたかなー？」

ペ「オマエ、これ終わったらギッタンギッタンだからな？」

ア「あう……。はじめてだから、やさしくしてね／＼」

ペ「頬を染めんな、うつとうしい！！　とにかくこれで初回の授業は終わり！」

ア「それじゃ、じかいまで……」

ペ・ア「グツナイ、トラベラーズ！　良い悪夢を！！」

「無駄に、疲れた……」

軽く長編映画を一本見たレベルの疲労感を抱えながら、俺はとりあえず本を閉じた。

それとどうでもいいが、どっちも子供っぽい顔をしているので、どっちがペイモン君でどっちがアスタナちゃんか、顔だけでは正直分からなかった。

たぶんリボンをつけた方がアスタナちゃんなのだろうが、アクセサリや髪型に頼らず、顔の描き分けはちゃんとして欲しい物だ。

いやほんとどうでもいいが。

（しかし……）

疲れる物を読まされた気はするが、その分の成果は充分にあった、気がした。

掛け合い自体は下らなかったが、もし本当に眠った時にだけ行け

るゲームみたいな世界が実在するなら、俺は昨夜、実際にそこに行ったのかもしれない。

荒唐無稽ではあるのだが、以前にも『夢の中でゲームをする』という話をどこかで聞いたような覚えがあるし、昨夜の夢のリアルさは、そんなことでもないと言明がつかないように感じられたのだ。

しかし、そこでぼうっと考え込んでたのがいけなかった。

「読まないなら、わたしにも読ませて！」

俺が読んでいる間、すっかり焦れてしまっていた妹の手が、俺から『ない』とめあ　の　あるきかた　』をさらっていった。

「あ、待てって結芽！　まだそれ読んでる途中……」

このまま本を奪われてはたまらない。

俺は本を取り返そうと、結芽に向かって手を伸ばし

むにゅっ！

代わりに、何だかやわらかい物を掴んでいた。

ていうか、え？ むにゅ？

いつの間にか仰向けになっていた俺が見上げれば、そこには寒々と青い空と凍った森。

そして凍りついたように固まる四方坂ナキと、俺を見下ろす氷点下の瞳。

そしてそして、伸ばされた俺の手は、彼女のささやかなふくらみを……って、

（え？ 何このマンガのお約束みたいな展開……）

そんなことを考えた瞬間、四方坂の無表情だった顔が沸騰し、

「ッー！」

平手打ちの代わりか、後頭部にすごい衝撃を感じて、俺は、

（あ、なるほど、この現実離れた展開。つまりこれが『ファンタジー』って奴か）

妙に達観して、そんなことを考えていたのだった。

7・現状把握

『あの日』から、一ヶ月と半分くらい前。

『なんかね、みんなで街造りをしてるみたいな感じかな？』
俺が夢のことを尋ねると、縁はそう答えた。

『街造り？』

あまり縁のない言葉に、俺は思わずオウム返しに聞き返した。

『そう。何のルールも存在しない未開の世界に、法則という建物を建てて、概念という住人を呼び込んで、望む方向に発展させていくの』

縁はそう言つて、『面白いよ』と笑ったが、俺にはその感覚は到底理解出来なかった。

『わたしは、のんびりできる場所が欲しいなっと思ってるんだけど、今の感じだと違うものになりそう』

『どんなもの？』

『んー。モンスターがいて、魔法があつて、戦うと強くなる。そんな現実離れた、うん、まるで夢みたいな感じかな？』

後頭部を強かに打ちつけたと思ったが、そもそも強い衝撃を受けても見えないスポンジに吸収されるので、大してダメージもなかった。

しかも、今回の四方坂が何かをしたというより、何かの上に寝そべっていた俺が急に動いたために地面に俺の頭が落ちた、と言った方が正確なようだ。

しかし、何かも何も、氷の森に俺の頭を乗せるような場所などあるはずもなく、だとしたらさっきの感触は……。

「……膝枕？」

思わず、思ったことを口に出していた。
思っていたのか思っていなかったのか良く分からない所だ。

「……！！」

それを聞いた四方坂の目が、また一段ときつくなる。
ちよつとした失言くらいで、いちいちそんな人を殺すような目で
見ないで欲しいが。

しかし、すぐに若干目つきをやわらげると、

「……あなたは、あの怪物を倒してすぐ、意識を失って倒れた」

こちらを見下ろしたまま、状況の説明と思しき物を始めてくれた。

「怪物は、あなたに斬られた後、光の粒になって消えた。
残ったのは、あの布と一枚の鱗だけ」

確かに俺の横には、おかしな模様のついた布とあの怪物の物と良
く似ている鱗が残っていた。

さて、続きは、と思って四方坂をじっと見たが、それ以上彼女が
しゃべる様子はなかった。

仕方なく、こちらから水を向ける。

「それで、四方坂は気を失った俺を介抱しててくれたのか？」

俺のその言葉には、四方坂は随分と長い間沈黙していた。

しかし、しばらくの後、観念したように口を開いた。

「……あなたには、ふたつ、借りがある」

「一つ？」

一つはあの鱗の怪物から助けたことだろう。

だが、もう一つは何だ？
俺が、そう考えていると、

「…教室でのことは、私の勘違い。ごめんなさい」

予想もしていなかったことに、そうやって四方坂は、俺に頭を下げた。

（ああ、そうか）

それを聞いて、四方坂がやけに逡巡していた理由に気付いた。
俺は彼女に『四方坂』と呼びかけた。

それに答えるということは、つまり四方坂が、いや、この『四方坂にそっくりな少女』が、自分のことを『四方坂ナキ』だと正式に認めたことになる。

おまけに現実世界での話を持ち出して来たのだから、これは確定だろう。

これでは説明が足りないと思ったのか、四方坂は補足してくれる。

「教室での私は、ここでのことを、ほとんど覚えていなかったから」

（そういえば……）

確か、前に縁も、同じようなことを言っていたような……。

『わたしはこうやって光一に話してるし、全然問題ないんだけど、基本的には夢の世界での出来事って、あんまり覚えてないのが普通みたいなの。』

また夢の世界に戻ってくるとちゃんと思い出すみたいなんだけど、

おかしいよね』

懐かしい声が、フラッシュバックする。

だが、今は感慨にふけるより大事なことがある。

俺は四方坂に確認する。

「それで、俺についててくれて……膝枕までしてくれたのか？」

あれ、大事なことで別に膝枕じゃないよな、と思いつつ、つい口にしてしまった。

四方坂にも、まだそこにこだわるか、というような顔をされた。

「……ただ、命の恩人を凍った地面に置けなかっただけ」

いや、結局してくれてんじゃん膝枕！

とは思ったが、そこは流石に俺も自重した。

というより、真実が明らかになった以上、騒ぎ立てる必要はない
というか。

「……さつさと、それ、しまったら？」

しかしそんなことをしてあげたはずの相手に対しても、四方坂は
態度を軟化させるでもなく、あの魚人もどきみたいな物が落とした
布と鱗を指さした。

「あ、ああ」

その迫力に押され、一応そうつなずいたものの、どこにしまった
らいいのだろうか。

というか、これはしまうべき物なのか？

そんなことを思ってた俺がまごついていると、

「…インベントリ。使えるの、気付いてない？」

四方坂が近付いて、そんなことを言ってきた。
当然、インベントリなんて物は知らない。

「……見てて」

四方坂は落ちていた布を持ち上げると、左腕につけていた腕時計に一度触れ、布に押し付けた。

「なっ！」

すると、腕時計に布が振れた途端、布が吸い込まれるようにして消えた。

そして、さらに四方坂が時計を操作すると、何もない所から消えたはずの布が現れた。

「…あなたも、同じことができるはず」

茫然として言葉もない俺に、彼女は淡々とそう告げた。
半信半疑で自分の腕時計を見る。

一見すると普通の腕時計だが、画面に触れると、

「おわっ！」

文字盤が映っていた小さい画面が四分割され、

『インベントリ』

『ステータス』

『マップ・イベント』

『TIPS・ヘルプ』

の表示が出て来た。

なるほど、四分割前提だからこの大きさだったのか。道理で正しい時計だと思った、ではなくて、

「なんじゃこりゃ！」

俺は叫んだ。

助けを求めるみたいに四方坂を見る。

「…私も、昨日少しいじっただけ。詳しくは知らない」

それより早くしまえという視線の圧力に負けて、俺は受け取った布を腕時計に押し付ける。
すると、

「おおー！」

布は、さっきの四方坂の時のように腕時計に触れるなり消えた。同じように、鱗も腕時計に押し付けて消す。

「インベントリ、押して」

「え？ あ、ああ」

言われるがままに腕時計の『インベントリ』の項目に触れる。今度はウインという小さな起動音と共に、

「こ、れ……」

空中に、ゲームのメニュー画面みたいなウィンドウが現れた。そのウィンドウの一番上には『インベントリ』と書かれており、その下の網目状に仕切られたマスの中に、さっき入れた布と鱗のアイコンが収まっていた。

「アイコンにふれるか、腕時計側で操作をして決定すると、入れた物が取り出せる。」

決定は腕時計の上、キャンセルは下にあるボタン」

驚く俺をやはり冷静に見つめ、そうアドバイスしてくる。良く見ると、腕時計の縁^{ふち}に、押し込めそうな出っ張りがあった。

とりあえず入れたアイテムを出す必要性は感じない。

腕時計の下部の出っ張りを押し込むと、空中に投影されていたウィンドウが消え、腕時計の文字盤の部分に四分割された画面が戻ってきた。

今度は『ステータス』のボタンに触れてみる。

空中に映し出されるウィンドウ。

そこにはHP、MPを初めとするいくつかの能力値と、俺の名前が書いてあった。

「そう、か。本当に、そうなんだな……」

その映像は、なぜか今まで見たどんな不思議な物よりも、俺にはつきりと思い知らせた。

この世界の詳しい仕組み、とか、どうして俺が、とか、何でこん

な世界が存在するのか、とか、そういう細かいことは一切分からない。

だけど、俺は確信した。

この、テレビ越しになら何度も見たようなステータス画面に、確信させられた。

「ここは……ゲームの世界だ」

それを、はつきりと認識した瞬間、

『ハロー、トラベラー。ナイトメアの世界によっこそ』

耳元で、そんな幻聴が聞こえた気がした。

8・試行錯誤と検証と

『あの日』より、一ヶ月とちよつと前。

『わたしね。ゲームつて、いっちばん最初が、実は一番楽しいんじゃないかって思うんだ』

『まあ、そういう考え方もあるかもな』

ちなみに俺は、中盤くらい、やれることの選択肢と自由度が増えた頃、限られたリソースをどう振り分けるか試行錯誤する時が一番好きだったりする。

『まだゲームのシステムとか、どうやったらうまく敵と戦えるのかも良く分からない時にさ。

仲間ときゃいきゃい言いながら、これはこうだ、あれはああだ、つて話し合うのって、すごく楽しいよね？』

縁はそれこそ楽しそうに話題を振ってくるが、

『あー、いや、俺、あんまり他人とゲームしたこととかないからなあ……』

残念ながら、俺にはやっぱり共感出来なかった。

それどころか、

『なんか、ほんと、楽しそうだな』

縁が、俺の知らないことではしゃいでいるのを見ることに、ちよつとした胸の痛みを覚えていた。

そんな俺の心の機微に、縁が気付くはずもなく、

『楽しいよ。うん。でも、ただ一つだけ不満があるとすれば……』
『あるとすれば？』

『もし、そこに……ううん、何でもない』
いつもより長く俺を見つめた後、縁はやっぱり楽しそうに笑ったのだった。

口数があまり多くない四方坂から話を引き出すのは大変だったが、
いくらか重要そうなことが分かった。

まず四方坂のことだが、俺と大体同じような経緯でこの事態に巻き込まれ、しっかりと事情を把握しているのではないということ。
インベントリを使ってみせたり、この事態に動じていなかったり

と、実は事情に通じているのかと思ったが、それはデータウォッチ（俺や四方坂がしているステータスとか開ける腕時計）についていたヘルプ機能を見ていただけで、どうしてこんなことになったかについてはさっぱりらしい。

ちなみにテレビゲームみたいなのが出来るのになぜ驚いていないのかを尋ねると、

「驚きは、したけど。でも、ここが現実と違うのはだいぶ前にわかってたから」
とのこと。

発言がちよつと電波っぽいと言えなくもないし、もしかしてキャラ的にオカルト方面大丈夫な人なんだろうか。

俺がそう考えて話を振ってみると、四方坂は俺のうかがうような視線を気にした風もなく、

「……空」
ただ、上を指さした。

俺もそれにつられて空を見上げる。

……何の変哲もない、青い空が広がっていた。

「明るいのに、太陽がない」

「え？」

慌てて太陽を探す。

確かに、こんなに明るいのに太陽が見つからない。

「本当に、ない……」

何かに遮られて良く見えない、とかでもない。

本当に空に太陽はなかった。

……変哲もないように見えていたのは、単に俺の目が節穴なだけ

だったらしい。

「それと、あの怪物」

「あ、ああ。そりゃ、あんなのがいたのは驚いたが……」

しかし実は軍の生物兵器だった、とかそういう解釈も不可能ではないんじゃないだろうか。

そう俺は思っただが……。

「粒子になって、消えたから」

「な、なるほど……」

四方坂の目の付け所は一味違った。

あの鱗の怪物はインパクトがあつたが、それよりもそれが光になって消滅したことの方が、確かに物理的に考えるとありえないことだ。

どちらかという不思議系かと思っていた四方坂だが、想像以上に理知的だった。

むしろ、俺よりずっと論理的な物の考え方をしている。

その理論派の四方坂からは、もう一つ重要な情報を仕入れることが出来た。

その話を聞く限り、どうもこの世界に俺たちが跳ばされる条件は『眠ること』ではなく、夜中の12時、つまり『午前0時になること』らしい。

少なくとも四方坂は昨日も今日も起きていて、12時になった途端にこっちに跳ばされたそうだ。

今日の俺がこっちに來たのも大体その時間だし、昨日は眠ってい

る時にこっちに來たとはいえ、逆に言えば『眠っている間に12時を迎えた』とも言える。

『ないためあ の あるきかた 』の記述とは矛盾するのが頭の痛い所だが、今の所、こっちの仮説が有力かと考えている。

ついでに、

「前回現実世界に戻った時、時間が経過していなかったこと。それに、12時というキリのいい時間に世界の移動が起こることが問題」

と四方坂は語った。

前者については、まあ説明不要だろう。

例えこの世界が妄想の産物とか単なる白昼夢とかだったとしても、妄想していた時間くらいは経過していなければおかしい訳で、だとするとこれは、俺たちが確実に超自然的な事件に巻き込まれているという証拠になる。

後者については、現代人の盲点を突いた感じの指摘だった。

時計に支配された現代人の感覚からはあまり思いつかないが、日本時間で12時というのはぶっちゃけ日本人以外にとってはなんら特別な時刻ではない。

そうすると12時にこの世界に跳ばされるというのは人の意思が、ついでに言えばたぶん日本人の人の意思が関わってると考えるのが自然なのだそうだ。

うん、四方坂ほんと頭いい！

と、なんで俺がこんなに他人事全開な態度を取っているかと言えば、四方坂の話よりもどうしたって気になることがあるからだ。

いや、四方坂に話を聞いたのは俺なのだから、本当はもっと真面目に聞かないといけないはずなんだが、どうしても集中出来ないのだ。

だって、そうだろう？

そりゃあ確かに俺は、そんなにRPGとかにハマる方ではないし、寝食を忘れてゲームに没頭した経験なんてない。

けれどそれは、普通のゲームの場合の話。

いくら現実の世界ではないかもしれないとはいえ、自分が剣を振るって巨大なモンスターを倒したり、実際に魔法を使うことが出来るかもしれないとなれば話は別だ。

はつきり言ってしまうば、この不可思議な現象も四方坂も縁のことさえも今は横において、とにかく俺はこの『ナイトメア』という名のゲームを遊んでみたくて仕方がなかったのだ。

一応の情報交換が済んだ所で、今度はもう一つの状況確認。

つまり、自分の能力値やアイテム、スキルなんかを確認することにした。

（よし、いよいよだ！）

さっきはステータス画面が開いたこと自体が衝撃で、ステータスの項目もろくに見ていなかった。

それからは四方坂と話をしていた手前、中座して自分のステータスを確認するような暇もなかった。

だが、もう我慢する必要はない。
とうとう解禁である。

俺は興奮に震える指でデータウォッチを操作して、もう一度自分のステータス画面を呼び出した。

【普賢 光一】

トラベラー

LV：5

HP：45

MP：5

DP：5

魔力：7

理力：0

強化：14

耐久：12

俊敏：13

器用：17

理法：3

克己：21

操作：6

信心：1

BP：80

その画面を改めて眺めて、まず俺が思ったことは、

（能力値の意味が分からねえええええ！！）

だった。

耐久とか俊敏とか器用はいい。

説明なんてなくても、なんとなく意味は分かる。

けど、魔力と理力ってどう違うんだとか、克己とか信心とか一体何に関係するんだとか、理法とかDPなんてそもそも言葉の意味が分からないとか不満が色々と噴出してくる。

だけど、そういう不満全てもひっくり返して、

（やばい！ 何かワクワクして、テンション上がってきた！！）

まるで、生まれて初めてRPGをプレイした時のような感動が胸の内に広がっていく。

これが直接自分の能力につながると考えただけで、その数字が何だか特別に思えてくる。

この瞬間だけで言えば、俺の中の優先順位はステータス>縁だっ
たかもしれない。

それぐらい俺は熱中し、この状況にのめり込んでいた。

逸る気持ちを抑え、まず自分の能力の傾向を分析をしてみる。

HP・MP・DPについてはひとまずおいておくとして、比較的
高い能力値が、強化・耐久・器用・俊敏・克己の五つ。

低めなのが魔力・操作の二つで、いっそもう絶望的なのが理力・
理法・信心の三つ、といった所か。

自分の能力をそう分析してみて、

「戦士系、だな」

俺は迷わずそう判断を下した。

名前からして、強化や耐久、器用なんかは物理系の能力っぽい。

一方、数値が低めの魔力・操作、そして明らかに低すぎる理力・
理法・信心はたぶん魔法系だろう。

物理系が高くて魔法系が低い、典型的な戦士タイプ。

いや、耐久が低めで器用が高めなので、一撃の威力よりも急所狙
いや手数で勝負するテクニクタイプかもしれない。

今のクラスは『トラベラー』のようだが、転職が出来るなら目指
すのは剣士か盗賊辺りだろうか。

いや、器用が高いから弓使いなんて選択肢もありかもしれない。

この世界に転職のシステムがあるかも分からないのに、どんどん

妄想ばかりが広がっていく。

あと気になるのは、最後に表示されていたBPという項目だったが、調べている内にこの謎も解けた。

ステータス欄の一番下に『ボーナスポイント振り分け』という項目があったのだ。

BPとはおそらく、ボーナスポイントの略だろう。

ボーナスポイントの振り分けがキャンセル可能なのをきちんと確かめてから、試しにやってみる。

HPやMP、DPなんかは選択出来ないようなので、とりあえず一番上の魔力を選択、決定すると、

「おっ！」

魔力が7から8に上がると同時に、BPが80から79に減った。それと同時に、HPまで45から50に増えている。どうも、魔力というのはHPに関係する能力らしい。

次にその下の理力を上げてみる。

理力が1から2になると、MPが5から7に増えた。

HPに比べて上がり幅はひかえめだが、理力はMPに関係する能力らしい。

それから色々といじる。

とりあえずHPやMPまで変化するのは魔力と理力だけ、謎のパラメータであるDPを増やせる能力値はなかった。

魔力や理力についても詳しく検証する。

魔力を1上げると5ずつHPが上がるようだったが、理力は1上げることにMPが2上がるのと3上がるのを交互に繰り返していた。つまり、MPの上がり幅はHPの半分、2・5だと考えられる。

四方坂に同じことをやってもらうと、HPが7ずつ、MPが3と4ずつ上がると答えてくれた。

今のレベルが7だそうなので、どうやらHPは魔力を1上げるごとにレベル分増加し、MPは理力を1上げるごとにレベルの半分だけ増加するようだと分かった。

あと、四方坂のレベルがさりげなく俺より二つも上だという事実も発覚したが、気にしないことにする。

しかし、魔力と理力がHPとMPに対応していると考えると、能力値の名前や並びから、それがどんな意味を持っているのか、想像が出来るようになった。

俺のあまり豊富ではないゲーム知識を駆使して、このステータス画面の能力値を普通のゲームの能力値に直すと、

魔力	体力
理力	魔力
強化	力
耐久	守り
俊敏	速さ
器用	器用さ
理法	魔法攻撃力
克己	魔法防御力
操作	??
信心	??

こんな感じになるのではないだろうか。

全部あっているとは思わないが、それほど大きく外してもいないような気がした。

しかしそうになると、自分の中で一番すぐれているのが魔法防御力になってしまうので、それはそれで微妙な感じはするが。

とりあえずボーナスポイントを戻し、BPが80になったのを確認してから、次に向かう。

次はお待ちかね、スキルの確認だ。

通常のステータス画面から、『スキル一覧』と『スキル詳細』画面に移動出来るらしい。

もしスキルの中に、魔法とか技とかがあつたら早速使ってみよう。そんなことを思つて胸を弾ませながら、俺は『スキル詳細』の画面を開いた。

ユニークスキル

【真実の剣】

無属性 DP消費：1（消費DPによって射程が変化）

普賢光一の願望が形を成したモノ。

意志の剣を作り出す。

『真実の剣』は一度振るわれる毎にDPを消費する。

この剣が光一の望まぬ物を斬る事はない。

アクティブスキル

【魔力機動】 L V 1

無属性 対象：自分 H P 消費：1

魔力によって移動する技術。

H Pを1ずつ消費することによって、自身の体を動かす。
一度に移動可能な距離および速度は、使用者のS L V・操作の値によって変動する。

【オーバードライブ】 L V 1

無属性 対象：自分 効果時間（5 + S L V）秒

危地にあつて、限界を超えて力を行使する術。

M Pが最大値の75%以上の時にのみ発動可能。

発動すると最大H P・防御力2分の1、使用者への回復・強化効果の無効化、装備武器の摩耗率10倍のペナルティを負うが、思考速度の加速、状態異常・弱体化効果の無効化、スキルによるH P・M Pの消費量10分の1、全スキル効果（100 + S L V × 20）%アップのボーナスを得る。

効果時間終了後、使用者は全てのM Pを失う。

パッシブスキル

【魔力親和性】 L V 3

魔力になじむ体。純粹な魔力の影響を受けやすくなる。

取得ウィルに（S L V × 5）%のボーナス。

また、無属性の攻撃・補助を受けた場合、その効果に（S L V × 1 0）%のボーナス。

【魔力感知】 L V 2

魔力に対する鋭敏な感性。

付近の強い魔力を気配として察知することが出来る。

S L V が上がると精度と効果範囲が向上する。

【勇気ある者】

強大なる敵に立ち向かい、それを打ち破った、勇気ある者に与えられる称号。

自分よりも高レベルの相手から受けるダメージが5%軽減される。

【刀剣】 L V 1

刀剣類を扱う技術。

刀剣による攻撃の際、その威力に（SLV×5）%のボーナス。
このスキルの効果は他の武器系スキルとは重複しない。

「なるほど、ね……」

残念ながら魔法はないようだったが、ユニークスキルの『真実の剣』がちよっと面白そうだし、他にも見覚えのあるスキルがいくつかある。

確か四方坂を追いかけていた時と鱗野郎と戦っていた時、頭の中に『スキル発現』というメッセージが浮かんでいた。

見覚えのある名称の『魔力機動』と『オーバードライブ』はその時に習得したのだろう。

ついでに言うと、最初の戦闘。

突然気を失ってしまったって何事かと思っただが、鱗人間に攻撃している途中で『オーバードライブ』のスキルが発動、武器の摩耗率が上がってショートソードが破損、さらに鱗人間を倒した所で効果が切れて、MPがなくなっただウン、というのが事の真相だと想像がつく。

「一歩間違えれば死んでるな……」

思い返して、冷や汗をかいた。

『オーバードライブ』の効果がもうちよっと早く切れていたら、気を失った俺は鱗人間に殺されていただろう。

しかし、しんみりとしている暇はない。

今は、技の検証が先である。

なぜなら技や武器というのは、安定して使用出来ることに意味がある。

どんなに優れた技であっても、本番で出せなければ何の役にも立たない。

だから別に、好奇心からだだけ使ってみただけではなくて、非常時のための訓練としてあふれんばかりの必然性をもってここで使用するのだ、と無駄に自己弁護して、俺は『真実の剣』を使ってみることにした。

「しかし、スキルなんてどうやって使えばいいんだ？」

思わず首を傾げてしまう。

前に二回、俺はスキルを使ったはずだが、その時は無我夢中で何も考えていなかった。

だが逆に言えば、特に道具を使ったり技名を叫ばなくてもスキルが発動することはそれで証明されているとも言える。

とにかくやれることを一つずつ試していけばいいだろう。
とりあえず俺は、念じてみることにした。

（現れる！ 真実の剣！！）

……しかし、何も起こらなかった。

いや、まだだ。

まだ諦めるには早い！

「真実の剣!!」

今度は叫んでみた。

しかし、やっぱり何も起こらない。

待て待て、落ち着け。

まだ焦る時間じゃない。

前にスキルを発動した時、俺は無我夢中だった。

『魔力機動』を発動した時は早く四方坂に追いつかなければ思っていたし、『オーバードライブ』を発動した時は絶対にこの魚人を倒してやると思っていた。

つまり、目的意識だ。

強い目的意識を持つて具体的に何かを望んだ時、スキルは発動するのかもしれない。

……うん、そうだ。

きつとそうだ。たぶん、おそらく、絶対、いやもう間違いなくそうに違いない。

「よし!!」

自分に気合を入れると、俺は目の前にあった、ちょっと大きめの凍った木の前に立った。

そして、俺の手に剣が生まれ、それがその木を断ち切る場面をイメージする。

いける、気がした。

心を落ち着かせるため、一度深い息をして、心を平静に。
そして、俺はカッと目を見開き、

「真実の剣、とぉー!!」

手に剣を持っている体^{てい}で、右手を真横に振るった。
その不可視の剣は鮮やかに翻り、木を上下に両断するすばらしい
コースをたどって……。

「……………」

まあ、当たり前ではあるのだが……。

結果、木は小揺るぎもしなかった。

うん、まあ、こんなこともあるだろう。

今日はちよつと調子が出なかっただけで、明日になったら手から
もうすんごいのが出て、木こりとか目じゃないぐらい鮮やかな切り
株とか作れるかもしれない。いやほんと！

そんな風に俺が自分で自分を慰めていると、後ろでカサッと氷を
踏みしめる小さな音が聞こえ、

「ハッ!？」

俺は恐ろしいことに気付いてしまった。
今ここにいたのは、決して俺一人ではない。

だがまさか、そんなことはないだろうと思いながらも、最悪の予感に俺は恐る恐る振り返る。
すると、

「……ごめんなさい。邪魔するつもりじゃ、なかったけど」

そこには、なぜか申し訳なさそうな顔でこちらを見ている四方坂の姿が！

(ぎゃあああああ!!!)

心の中で、絶叫した。

(見られた見られた見られたああああ!!!)

叫んで叫んで叫び倒した。

これじゃもう生きていけないおうちかえるー、とか言いたくなるくらいには錯乱した。

お風呂上りに鏡の前で、ちょっとほんとにこっ魔が差して、

『多重影 身の術!』

とか言ってるのを諒子さんに見られた時くらいの恥辱だった。

だが、それでも男とは見栄を張るもの。

「ああ。ちよつと、スキルの確認をしていたんだ。
肝心な時に使えないと、困るからな」

精一杯にハードボイルドな虚勢を張って、その場をしのぐ！

「うん。……本当にごめんなさい」

そしたらなんかまた謝られた。

（何でもまた謝るんだよおおおお！！ 余計傷つくだろおおおお
！！！！）

と内心では再び絶叫しつつ、

「いや、構わないさ。それより、何か用かい？」

もうハードボイルドとか超えて、何がなんだか良く分からないキ
ャラで対応する。

四方坂はそれを聞き、ちよつと嫌そうに顔をしかめて（地味に傷
ついた）、

「……そろそろ、時間」

今度は門限を気にするお嬢様みたいなことを言い出した。
俺も釣られて時計を見る。

「え？」

だが、文字盤に表示された時刻を見て別の意味で驚く。
恥ずかしさも同時に吹っ飛んだ。

「12時、2分…？」

12時ちょうどに俺がこっちの世界に来たとすると、それからまだ2分しか経っていない計算になる。

もしかして時間の流れがおかしくなっているのかと俺は思ったが、

「ちがう。よく見て」

四方坂に言われて、もう一度視線を戻す。

しかし、何度見ても12時2分の表示は変わらず……いや！
表示こそ変わりはしなかったが、それ以上に重要なことに気付いた。

この時計、確かに良く見ると『秒針が逆向きに回っている』。

「多分、制限時間。昨日はそれが0になった時、元の世界に戻った」

つまり、これは、12時2分ではなく、残り時間が2分ということか。

だったら最初の日、12時9分だと思っていたのも、残り9分で元の世界に戻るという意味だったのか？

俺の頭が、めまぐるしく働く。

「昨日は、最初は10分。今日は20分だった」

果たして時間が10分ずつ増えているのは意味があるのか。いや、それよりも、また俺はこの世界に来ることになるのか？

そんなことを考えている内に、残り時間が1分を切る。

俺は、時計から顔を上げ、四方坂を見た。

銀色の髪、とがった耳。

そして、その全てを霞ませるほどの美貌を持つ、俺のクラスメイト。

学校で話をしたことなんて数えるほどしかないし、この世界でだってまだ30分も、いや、ほんの数分しか話をしていない。なのに、なぜだろう。

四方坂とは、随分と長い時間を一緒に過ごしていたような錯覚があった。

そして、だから、なのだろうか。

俺は自然と、四方坂に向かってこう言っていた。

「もし、明日もここで会えたなら、俺はもっと四方坂と話がしたい」
「!？」

四方坂が、息を飲む気配。

なんだか初めて四方坂をやり込めたような気がした。

「.....」
「.....」

四方坂は、何も言わない。
俺も、何も言わない。

そのまま、無言の時間が過ぎていく。
時計は見えていないが、もう三十秒以上が過ぎただろう。
もういつ元の世界への転移が始まってもおかしくはない。

駄目だったか。

俺が諦めかけた、その時、

「学校で……」
「え？」

澄んだ声が、確かに俺の耳を打つ。

「学校で、ここでの私の話、しないでくれるなら……」

彼女らしい、分かり難い肯定の言葉。
だが、そう言ってこちらを見た彼女の顔は、ほんのわずかだが笑っていた。

その、一瞬。

俺たちの心は確かに通じ合ったような気がした。

呆けていたのは、たぶん数秒。

「っ！」

思い出して、時計を見る。
残り5秒。

マズイ！

時間がない！

逆回りの秒針が、無情にもタイムアップを報せてくる。

駄目だ！

このままじゃ駄目だ！

どうしてもまだ、四方坂に言わなきゃいけないことが、伝えなきゃいけないことが、残っているのに……。

「四方坂！」

俺は、全力で叫んだ。

俺の突然の大声に、無表情な瞳を少しだけ大きくさせる四方坂に向かって、俺は、

「さっきのスキル練習、忘れて」

「 くださいー!!」

「う、うん。そんなに言うなら……」。

「どうか、もともとそれ、お兄ちゃんのだし……」

「……え？」

気が付くと、妹に向かって全力で頭を下げていた。

突然の俺の剣幕に驚いた妹が、こっちに向かって本を差し出してくる。

現実世界に、戻っていた。

「はああああ……」

一気に、脱力する。

数時間分くらいの疲労が、一気に押し寄せたようだった。

なのに時計を見ると、

「12時、ちょうどか……」

本当に、あれから全く時間が経っていない。

もはや超常現象確定である。

それにしても……。

「やっぱり、20分じゃ全然、足りないよなあ……」

「えっ？ なになに？」

怪訝そうな声を上げる結芽に何でもないと返しながら、向こうでの出来事を思い返していく。

今日はなんだか楽しかったせいで、時間が過ぎるのを早く感じた。もう少し長くあの世界にいられたらいいなと、そう思ってしまった。

そんな風に、たぶん間の抜けた顔をしながら、向こうの世界のことを考えていると、

「お兄ちゃん。何か、あったの？」

いつもの髪留めを触りながら、妹が聞いてきて、

「ちよつと、ゲームがさ。やっぱり面白いかな、って」

それに俺は、嘘でも本当でもない答えを返した。

それから……。

「だったら、だったらね！」

妙に熱の入った勢いで、妹が身を乗り出してくる。

全身で俺にぶつかってくるみたいに、俺の瞳を正面から見つめて、

「結芽もいっしょにやったら、迷惑かな？」

その言葉があまりに切実で切なげで、俺は一瞬、息を飲んだ。だから俺は、妹を傷つけないよう、慎重に慎重に言葉を探す。

「迷惑じゃ、ない。俺も、結芽と一緒に出来たら、楽しいと思うけど……」

俺が話すに従って、結芽の顔がぱあっと明るくなるのを、申し訳

なく思いながら、

「無理、だと思う。これはちょっと、特別なゲーム、だから」

それでも俺は、はっきりと不可能を告げた。

「そつ、かあ…」

輝いていた結芽の顔が、うつむいて見えなくなる。
だが少なくとも、次に顔を上げた時、

「でも、アドバイスくらいなら、いいよね？」

お兄ちゃん、ゲームあんまり知らないから、それ読んだってきつ
と分からないよ？」

妹の顔は、いたずらっぽい笑みに彩られていた。

それが本心からの物なのか、無理に作った物なのかは分からない。
でも俺は、それに心の底から安心して、

「ああ、当然、お願いするよ！」

妹に負けないくらいの、精一杯の笑顔で、そう言ったのだった。

たぶん、この日、この瞬間。

『ナイトメア』は、本当の意味で俺のゲームになった。

『ユニークスキルについて』（前書き）

ここから『ないとめあ の あるきかた 』が本編の間に挿入されます

『ないとめあ の あるきかた 』は、無理に読まなくても本編を理解できるように配慮するつもりですが、複雑なゲーム的要素についてはこれを読まないで理解が難しい場面が出てくるかもしれませんのでご了承ください

こちらにも本編とリンクさせ、本編と関連した情報を開示していくつもりですので、掲載順に読んで頂ければ一番無理なく楽しめるかと思えます

『ユニークスキルについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！ 地獄から現れた超新星、ペイモンだぜい！！」

ア「はろー、とらべらーず！ じごくからあらわれたちよーしんせいあいどる、アスタナちゃんだよー」

ペ「今回オマエらボンクラトラベラー共に教えてやるのは、トラベラー最初の試練、選別の儀式についてだ！」

ア「あれー？ あいどるのくだり、『するー』されちゃったよー？」

ペ「初めてこの世界に来た時、何だか変なことを言われなかったか？

『世界は暗闇に包まれ』とか、そんなのだ。

その『質問によってユニークスキルを決める』儀式、それが選別の儀式なんだ」

ア「なんだー。おもったよりかんたんそうだねー」

ペ「そうだな。まあ別に難しいことは何もないぜ。単純な心理テストみたいなもんだ。

ただ、その結果によってユニークスキルが決まるっただけでな」

ア「へー、ゆにーくすきるなんてちよろいねー！

じゃあ役にたちそーなことをてきとーにいいばいいんだね？」

ペ「あのなあ。大抵の奴は何も知らずにいきなり真っ暗なところに引っ張り込まれて、急に質問されるんだぜ？

それにこの質問の時、本人の想いの強さも計られるから、考えて出した答えなんてほとんど何の役にも立たねえんだ」

ア「えー？　じゃあみんな何をいうのー？」

ペ「どうも今までの傾向からすると、『質問の答えは自分の夢や欲しい物、あるいはコンプレックスやトラウマと関係する』場合が多いみたいだな」

ア「こんぷれつくす？　あ、わかったー！　つまり、『ろりこん』だったら『ようじょ』とか言い出すんだね？　さいあくー！」

ペ「微妙にあつてるけど違えよ！　……それに、同じコンプレックスを持ってても、ポジ型とネガ型じゃあ全然違うもんが出て来るしな」

ア「『ぽじがた』と『ねががた』？　うわーん！　だくてんがおおすぎていいにくいよー！」

ペ「トラベラーたちが考え出したユニークの分類だよ。

『暗闇の世界で見つけた物』って言われた時に、ポジ型、つまりポジティブな人間ならこれからその世界で役に立ちそうな物を、ネガ型、つまりネガティブな人間なら自分の恐れる物を、それぞれ選ぶ傾向にあるんだ」

ア「ぐたいてきにはー？」

ペ「例えば同じ水にトラウマを持つてる奴がいたとしても、ポジ型なら浮き輪とか水を克服するアイテムを、ネガ型なら魔法の津波とか水が襲ってくるような能力を、それぞれユニークスキルで獲得す

る可能性が高いってことだよ」

ア「え？ それじゃあ『ねががた』の方が強そうだけど？」

ペ「そうだな。意外に思うかもしれないが、ナイトメアの世界は人の意志が物を言うから、強いトラウマとか鬱屈した想いがあつた方が強かったりするんだよ。

んで、そういう奴は大抵ネガ型になるからな」

ア「うわー、現実世界とはぎゃくだねー」

ペ「とはいえ、ポジ型にだっていい所はあるぜ。

基本的に『ユニークスキルは、力が強く使用回数や制御に難があるネガ型と、力は弱いが高回数が多くて応用が利くポジ型に分かれる』って言われてる」

ア「いつちよーいったんだねー！」

ペ「そーだなー。まあオマエらも選別の時には腹くくって、変に飾らずに自分の思った通りの答えを選べばいいさ」

ア「ペイモンちゃんペイモンちゃん。えらぶんじゃない。もーえらんだんだよー？」

ペ「あ、そーいやそうか。オマエらはもうトラベラーだもんな。

ユニークスキルなんてとくに持ってるか」

ア「あれー？ そーいえば、なんとなくでつかってるけど、『とらべらー』ってほんとはなんなのー？」

ペ「はあ？ オマエそんなことも知らずにハロー、トラベラーズとか言ってたのかよ！」

ア「うう……。でもアスタナ、パイモンちゃんとちがってあんまり頭よくないし……」

ペ「しつかたねえなあ！ じゃあ説明するぞ？

眠った時、何かの拍子にナイトメアの世界に紛れ込んだ人間、こいつは『探訪者』あるいは『トラベラー』と呼ばれるんだ」

ア「え？ じゃあ、ナイトメアにきた人はぜんいん、とらべらーなのー？」

ペ「いい質問だな。実はこの世界にやってきた瞬間は確かに全員トラベラーだが、『正式にこの世界のトラベラーとして認められるには、選別の儀式をクリアする必要がある』んだ」

ア「あれ？ せんべつのぎしき、って……」

ペ「そう、つまり質問に対して強い想いを示して、ユニークスキルを手に入れられるかどうか、それがトラベラーになれるかどうかの条件なんだ」

ア「も、もしなれなかったらどうなっちゃうのー？」

ペ「トラベラーっていうのはつまり旅行者、この世界にやってきて帰っていく者ってことだ。

そうじゃなくなるってことは、つまり……」

ア「っ、つまり……？」

ペ「自分の意思を奪われ、ナイトメアの世界の操り人形になって、一生ナイトメアの世界に囚われ続けるらしいぜー！」

ア「キャーーーーー！！！」

ペ「……ま、そうは言ってもそもそもナイトメアの世界に行くような奴は、夢の世界に適性がある奴がほとんどだ。

そうそうユニークスキルが手に入らないなんてことないんだけだな」

ア「で、でもこわいねー。となりにすんでた人がいきなりいなくなったら、それは『せんべつのぎしき』に失敗したからだったりしてー」

ペ「あっはは、そうかもしれないな！ んじゃ、今回の復習だ！」

『質問によってユニークスキルを決める』

『質問の答えは自分の夢や欲しい物、あるいはコンプレックスやトラウマと関係する』

『ユニークスキルは、力が強く使用回数や制御に難があるネガ型と、力は弱い回数が多くて応用が利くポジ型に分かれる』

『正式にこの世界のトラベラーとして認められるには、選別の儀式をクリアする必要がある』

ア「こんかい、まとめがびみょーだね」

ペ「オマエ……！ これ考えるのも結構大変なんだぞ」

ア「と、とにかくこんかいはこれで終わりだね！」

ペ「ちっ、仕方ねえなあ……」

ア「それじゃあまた、じかいまで……」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！ 良い悪夢を！！！」

ペ「あ、アバターの説明すんの忘れた……」

9・二人のうそつき

たぶん『Xデー』よりも、二週間ほど前の記憶。

『なあ縁。今時の女の子の、一般論的な考え方を聞きたいんだけどさ』

『んー、うん、いいけどー』

あたかも普通の会話の延長という感じで、出来るだけ何気ない感じで聞く。

縁はすっかり脱力した感じで、俺の話をそんなに真剣には聞いていない。

……チャンスだ。

『今欲しい物というか、もらって嬉しい物って何だ？』

俺がさりげなさを装ってそう尋ねると、縁はもう一度、「んー」と力の抜けきった声を出すと、

『そういえば、あと二週間でわたしの誕生日だったっけ。

プレゼントなら、別に何でもいいよ』

いともあっさりと、俺の思惑を看破してきた。

動揺する俺を、縁は呆れた目で見て、

『光一、こういうの下手すぎ。』

少なくとも女の子なら、誰でも何かあるって気付いちゃうと思う『そっかな？』

ちよっと悔しいので、俺はそっけない返事を返す。

すると、縁は含み笑い。

『ま、光一と話をする女の子なんて、わたしとみりんくらいなもん
だと思っけどね』

『……いい加減そのあだ名やめてやれよ。きつと東雲さん、陰で泣
いてるぞ』

共通の友人を引き合いに出して、意地悪く、くつくと笑う。

『それより、プレゼントだよ。何がいいんだ？』

『え？……甘い物、かな？』

『何で疑問形だよ。ていうか、それはプレゼントじゃないだろ』

俺がそう言っていると、縁はなぜか無駄に表情を作って

『あのね、光一。甘い物が嫌いな女の子なんて、いないよ』

妙に説得力のある言葉を言い放った。

しかし流石に、誕生日プレゼントに食べ物渡すほど俺だって甲
斐性なしじゃない。

『分かったよ。自分で考えてみるから』

俺は半ば意地になってそう言い切って、それを見た縁は、
『楽しみにしてるからね！』

と、本当に楽しそうに笑って……。

「お兄ちゃん、朝だよ？」

「…ん」

聞き覚えのある声に呼ばれて、俺は目を覚ました。

この声に起こされるのも何度目だろうか。
そんなことを考えながら目を開くと、そこにはもう完全に制服に着替え、学校に行く支度を整えた妹がいた。

「おはよう、お兄ちゃん」

「…ああ。おはよう、結芽」

その顔からは、昨夜の疲れなんて微塵も感じられない。
昨夜は、というか今朝は、俺に付き合っただけでほとんど夜明けくらいまでマニュアルとにらめっこをしていたはずなのに、妹はいつもと変わらない様子だった。

目は開けていてもいまだ半分寝ているような俺とはえらい違いだ。

「あー、それと、昨日は、ありがとう」

一応昨夜の礼を言っておく。

実際、ゲーム知識豊富な妹の解説と助言は、かなり役に立った。特にヘイト管理やらタゲ取りやらバフやらデバフやらポップ、リポップやらという専門用語は、このゲーマーな妹がいなければあんなにスムーズに理解出来ていなかっただろう。

「いいよ。わたしも楽しかったもん。

それで今日は？ またやるの？」

机の上に置いた『ないとめあ の あるきかた 』の方に目をやりながら言う妹に、俺は首を振ってみせた。

「いや、今日はやめとく。

……実はあの本、貸したい相手がいるから」
俺がそう言うなり、

「それってやっぱり天壤……ん、ううん、何でもない！」

結芽は一人で何かを言いかけたかと思うと、すぐに部屋の外に出て行ってしまった。

「あれって絶対、天壤先輩って言おうとしてたよな……」

思い返しながら考える。

確かに結芽に天壤先輩が気になっているとは言ったが、だからといってそんな相手にいきなりゲームの説明書とか貸してどうするか。

……まあ実際に貸す相手は全然違うので、どうでもいいのだが。

そんなことを考えながら教室に着いた俺は、本当のターゲットを確認する。

いた。

今日も教室の端の席で、ニット帽にマフラーという不審者レベルの重装備で自分の体を抱えるようにして縮こまっている。

賑やかな教室の中で、彼女の周りだけが凪いだように静かというか、ぶつちやけて言えばあからさまに浮いていた。

（四方坂、あんなに美人で頭もいいのにな……）

向こうの世界での四方坂を見た俺としては、クラスで浮いている彼女が齒がゆく思えたりもするが、もしかすると過ぎたる美貌や才能なんて物は、現代社会を生きていく上では足かせなのかもしれない。

けれど今日の俺は、そういう障害を飛び越して、何とか四方坂と話が出来るとなるつもりだった。

そう、今回の目標は、現実世界の四方坂と和解して、『ない

とめあ の あるきかた 』を渡すこと。

四方坂には学校で夢の話をするなどと言われたが、話しかけるなとは言われていない。

もしかすると言外にそう言っていたのかもしれないが、ここはあえて無視させてもらう。

せつかく夢の中ではほんの少しだが打ち解けてきたのに、現実世界に戻ったら他人以下だなんて、そんなに寂しいことはない。

ここは何とか誠意を見せて誤解を解き、夢の世界と同じ、いや、それ以上の関係を築く。

それが、俺の今日の目標だった。

もちろん無策で何とかなるほど、四方坂は甘い相手だと思っ
てはいない。

だからそのために、特別に秘策も用意した。

昨夜、時間をかけてマニュアルを読み込み、妹も俺もすっかり煮詰まった頃だ。

四方坂との関係修復のヒントを掴もうと、俺は妹の協力を仰ぐことにした。

「なあ結芽。今時の女の子の、一般論的な考え方を聞きたいんだけどさ」

「んー、うんー」

俺の言葉に、脊椎反射的に返事をする結芽。

本当に分かっているのかは疑問だが、あんまり真面目に聞かれて色々勘ぐられても困る。

あたかも兄妹の言葉のキャッチボールという感じで、出来るだけ何気ない感じで聞く。

「今欲しい物というか、もらって嬉しい物って何だ？」

「お兄ちゃんの愛かな」

「……………」

ノータイムで返ってきた言葉の大暴投に、俺はしばし言葉を失った。

やっぱり俺の妹はちょっとおかしいんじゃないだろうか。

だがここで折れたら何の収穫もなしで終わってしまう。

俺は食い下がった。

「も、もうちょっと具体的な物で言うത്？」

「じゃあ飴ー」

一気に即物的になった！

飴玉だったら容易に購入も可能だ。

しかし、一般的な女子という物は、本当にそんな物もらって喜ぶものなのだろうか。

俺が妹の感性を疑っていると、それに気付いたのか、結芽はやっぱりトロンとした目をしたまま、それでも力強く言い切った。

「あのね、お兄ちゃん。糖分が嫌いな女子なんて、いないよ！」

やけに説得力のある言葉を頂きました！

というか、甘い物じゃなくて糖分ときた。

じゃあもう砂糖舐めてればいいんじゃないかね、と思わなくもないが、そんな台詞はそれこそ女心が分からないというものだろう。

「だけど、そんなのでいいのか？」

飴なんて、そんな子供っぽい……」

と言いかけた俺の言葉は、

「お兄ちゃん！ 考えてもみて？」

特に仲が良くもない男子にいきなりアクセサリーとか有名店のケーキとか渡されたらどう思う？

絶対ドン引きだよ？」

「あ、ああ。それは、そうかな……？」

嵐のような結芽の言葉にかき消された。

別にアクセサリーやケーキを贈るなんて一言も言っていないのだが、なんとなく押されてうなずいてしまう。

さらに、結芽は胸を張って言った。

「どんな女の子でも、飴をもらったら絶対機嫌よくなるよ。

飴を何個か目の前に置いて、『プレゼントだよ』って言ってあげれば、今まであんまり話が出来なかった人とも仲良くお話できるかもね？」

結局その言葉が決め手になって、俺は飴玉作戦を実行に移すこと

に決めた。

俺は「ちょっと休憩する」と言って部屋を出て、その足でこっそりと家を抜け出し、近くのコンビニで飴を一袋買ってきた。

最近主流になっている一個ずつが密閉されているタイプではなく、カラフルなフィルムに包まれている、いかにもキャンディ的なタイプの物を選んだ。

しかも、妹の趣味に日々影響されているのか、包み紙が鮮やかな水玉模様の奴を取って来てしまった。

しかし、これなら女の子も大喜び……だろうか？

いかにも安物っぽい色合いで、これは全然ダメなような気がするのだが。

結局俺が飴を買ってきたことは妹にもバレて、

「お兄ちゃん、んー！」

なぜかキス待ち顔で迫ってくる妹の口に飴玉を突っ込んで、

「うん、あまーい！……こへならまひがないね」

聞き取りづらい妹の言葉を解読する傍ら、俺はそっと、買ってきた飴玉の内の数個を鞆の中に忍ばせた。

（これで明日は、何とかなるかな）

ひとまずそう考えて、俺は妹と『ないともあ　　の　　あるきかた』を読む作業に戻ったのだが……。

しかし、改めて考えると、こんな子供騙しが四方坂に通用するのだろうか。

あの時はほとんど徹夜状態で頭が働いていなかったし、結芽の勢いに押されてあたかも名案のように思えたが、仮にも年頃の女子高生が飴玉もらったくらいで喜ぶか？

というか、例え同じお菓子類を渡すとしても、せめてクッキーかチョコの方が良かったのではないだろうか。

俺の中に、今さらながらに飴玉作戦への疑念が湧く。

(……いや)

だが、俺は首を振って雑念を追い出した。

やはりここは、結芽の言うことを信じてみよう。

いくら中学生とはいえ、あれでも女の子だ。

翻って俺はというと、この一年は少しマシになったものの、生まれてからこの方、恋人どころか同年代の女子と満足に会話をした記憶もない。

そんな俺の判断よりも、妹の意見の方が絶対に正しいはずだ。

俺は意を決し、本と飴玉を手に、教室をまっすぐ横切って、四方坂の許へ向かう。

そして、

「四方坂！ この前は悪かった。お詫びのし……おわあ！」

緊張で手が滑って、机の上に飴玉がこぼれる。
ボトボトと机の上を転がる飴玉。

（しまった！　せめて何か袋にでも入れてくるべきだった！）

そんなことを思うが後の祭り、もはやアフターフェスティバルだった。
った。

ころころ転がる飴玉を見て、四方坂の目が鋭さと冷たさを増す。

「……これは？」

肌に突き刺さるような声で尋ねてくる。

いや、もしかしてこれ、怒ってるんじゃない……。

そう思ったが、一縷の希望にすがり、俺は答えた。

「ええと、プレゼント……？」

何で疑問形なんだよ、と自分にツッコみながら、四方坂の反応を
うかがう

「……ふざけてるの？」

その声のあまりの冷たさに、俺は思わず身震いしそうになった。
実際、体感温度で三度くらい、周囲の気温が下がったような気が
した。

うん、こうなれば女心とか関係なく俺にだって分かる。
もしかしなくてもこれ、怒ってる！

（ちつくしょう！ 結芽の大嘔吐き！！）

心の中でこの場にはいない妹に悪態をつきながら、どうしようもなくパニックった俺は、

「と、とにかくこれ、読んでくれ！！」

まるでラブレターを渡すみたいな台詞と共に『ないとめあ あるきかた』を四方坂に押し付けると、一目散に自分の席に戻った。

そのまま机に突っ伏して、全ての情報をシャットアウト。なんとなく周りの視線がこちらに集まっている気配を感じたが、見ざる聞かざる言わざるを自分に課して、ホームルームが始まるのを待つ姿勢。

ただ、そんな体勢でも、隣の席の滝川が、

「……………ないわー」

と呟いたのだけは、ばっちり聞こえてしまっていた。

言っとくけどな、滝川。

……………全くもって、同感だよ！！

「……ただいま」

それからの一日、学校で何をしていたのか、正直良く覚えていない。

ただ俺は貝だ、俺は貝だと自分に言い聞かせて一日を乗り切った。

「お、お兄ちゃん!？」

玄関を抜けると、憔悴しきった俺の姿を見て、結芽が驚きの声を上げる。

そういえばこいつの助言のせいであんなことになったんだな、と思わなくもなかったが、何も言わなかった。

常識で考えれば、いきなり良く知らないクラスメイトから飴玉をもらって喜ぶ女子高生がいるはずがなかった。

それを無視して安易な解決法に飛びついた俺が間違っていたのだ。むしろ、今時飴玉一つで喜ぶこの妹の純真さを俺はもっと大切にすべきなんだろう。

そんなことを思いながら、兄として温かい目を結芽に向けると、

「じ、ごめんねお兄ちゃん！」

ちょっとした悪ふざけのつもりだったのに、まさか、そんなに落ち込むとは思わなくて……」

なぜか結芽は俺に謝ってきた。

俺の混乱にも気付かず、結芽は一人で焦って言葉を続ける。

「で、でも、お兄ちゃんもいけないんだよ？」

好きな人のそんな基本的なこと、ちゃんと調べておかなかったんだから」

「基本的な、こと？」

そして、俺との認識のズレに気付かないまま、結芽はとうとう後戻り出来ない言葉を吐いた。

「だって、天壤先輩が甘い物大嫌いだっていうの、すごく有名なのに……！」

そこで、血の巡りの悪い俺の頭も、ようやく事の真相に気付いた。つまり、あれだ。

（俺は結芽に、はめられた、のか……）

そしてそれが、最後の一押しだった。もともと死に体だった俺は、その一言にトドメをさされ、

「お、お兄ちゃん？ お兄ちゃん！！」

……死んだ。

まあもちろん死にはしなかったが、結芽と諒子さんに随分と労われ、今日はもう早く寝るようになるとかなり早い時間に部屋に戻された。

その気遣いはありがたかったが、ありがた迷惑という言葉もある。

俺は一人、時計をにらみながら煩悶していた。

もし今日もナイトメアの世界に跳ばされるのなら、当然四方坂とも顔を合わせることになる。

そして夢の世界の四方坂は、現実世界でのことを全て記憶しているのだ。

「うわああ。どうしたものか……」

なんて言ってみた所で、事態が改善する訳でもなく。

せめて気持ちだけは引き締めようと、俺は時計を前に正座して、身じろぎもせずにその時を待った。

そして迎えた、午前0時。

時計の針が頂点を指した瞬間、俺は四方坂と向かい合うように氷の森に立っていて……。

俺の姿を認めた四方坂は、その綺麗な顔にちよつとだけ困ったような色をにじませて、

「……………ばか」

と言った。

『能力値について』

ペ「ハロー、トラベラーズ！ 今日も絶好調！ 魔界の超鬼軍曹
と、ペイモンだぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！ みんなのマスカット、アスタナちゃん
だよー！」

ペ「ブドウになっちゃってるよ！」

ア「??？」

ペ「いや、悪かった。オマエがそれでいいならいいんだ。果物に
って幸せはあるさ」

ア「んー？ 変なペイモンちゃん」

ペ「さて、気を取り直して、今日オマエらに教えてやるのは、ナイ
トメアの世界でのオマエらの肉体についてだ！」

ア「えー？ げんじつみたいにくごいたりできるんじゃないのー？」

ペ「確かにそうなんだが、ナイトメアでは現実世界の体とはちよっ
とだけ違う体『アバター』を動かすことになる」

ア「それってなにがちがうのー？」

ペ「一番分かりやすいところでは、『アバターが傷付いても現実の
体に影響はない』ことだな。」

ただそのせいで、『アバターに宿っている記憶は現実世界に持っていけない』って言われてる」

ア「でも、げんじつのきおくは『あばたー』にもっていけるんだよね、ふしぎー」

ペ「その辺りのメカニズムは実はあまり解明されていないんだ。

ただ、一部の魔力操作に優れた人は夢の世界の記憶を現実でも保持している場合もあるから、魔力と何か関係があるとは言われてるな。

アバターを完全に魔力で形作ることが出来れば、最終的にはアバターと現実の体が一つになる、なんて説もある」

ア「へー。ぜんぜんきょーみないやー」

ペ「じゃあ何で聞いたんだよー!!」

ア「ふいんきー。それより、『あばたー』のすごいところおしえてー?」

ペ「雰囲気、な? ……もう一つ、『アバター』の姿は本人の自己認識や願望、コンプレックスに左右される』んだ」

ア「あれ? ゆにーくすきるとにてる?」

ペ「そうだな。まあこれもユニークスキルと大体同じだ。

背の低いことがコンプレックスな奴がいたら、アバターは本人の願望が作用して本人よりも背が高くなることもあるし、劣等感から実際以上に強調されて本人よりさらに背が低くなることもある」

ア「うわ、ひっさーん」

ペ「変わった所では猫耳を生やした奴とか、エルフとか竜人になった奴、性別を変えちゃった奴とかもいたな。

とはいえ、相当自己認識が歪んでないと、あんまり自分とかけ離れた姿にはならない」

ア「でも、ここにくる人ってだいたいゆがんでそうだよなー？」

ペ「オマエたまにさらつと毒吐くよな。

まあ色々言ったが、そんなのはオマケに過ぎない。

ア「バターの一番すごい所は、世界にあふれる魔力『ヒュプノス・パワー』を使って、自分を強化できるところなんだ！」

ア「ひゅ、ひゅふのふ、はわー？」

ペ「ヒュプノス・パワー、略してHPだ！　これがないとトラベラーどころか、この世界でやっていけないってくらい大事な要素だぜ？」

ア「んー？　でも、すごくつよい人だったら『おのれのみひとつ』できょうてきもばったばったとおしちゃうんじゃないの？」

ペ「チッ、これだから素人は。あのなあ。もしお前と体の大きさ以外全部同じで、身長が5倍の奴がいたとしたら、そいつの体重はお前の何倍くらいだと思う？」

ア「えっ？　うーんと、うーんと、4倍くらい？」

ペ「なんで減ってるんだよ！！」

ア「だ、だって、アスタナさいきん『だいえつと』してるし……」

ペ「そういう問題じゃねえよ！……はあ。答えは175倍だ」

ア「ええー！　ペイモンちゃんそれ計算まちがいだよー！！」

ペ「間違つてねえ！　いいか？　さっきの条件だと質量は体積に比例するから、身長が5倍なら体積は5の3乗で175倍になるんだよ！」

ア「うん！　アスタナにはぜったいわからないってわかったよ」

ペ「とにかくそうなるんだよ！　で、お前は体重が100倍以上ある相手と戦ったらどうなる？」

ア「そんなのとたたかったら、アスタナふみつぶされておせんべいみたいになっちゃうよー！」

ペ「そ。つまり、でっかい奴っていうのはそれだけで滅茶苦茶強いってことだよ。」

そしてこのナイトメアの世界には、そういう怪物がごろごろいる」

ア「で、でも、『まんが』とかでは……」

ペ「そりゃーフィクションだからだよ。生身のまま自分の技だけで怪物を倒すような漫画やゲームはたくさんあるけどな。」

でも、現実にはそんなことはありえない。人間はどんなに鍛えたって10メートルもジャンプしたり出来ないし、10トンの怪物を

持ち上げたりもできない。

けど、それを可能にするのがヒュプノス・パワー、この世界に満ちる魔力なんだ！」

ア「そっかわかった！　つまり『ごつごつしゅぎ』だねー！」

ペ「……もうそれでいいや。

とにかくヒュプノス・パワー、つまり『HPは、アバターの攻撃力を強くしたり、攻撃から身を守ってくれたり、素早く動く手助けをしてくれたりする』んだ」

ア「で、でもでも、『まりよく』とか、つかうのむずかしそう……」

ペ「ところがどっこい！　なんと魔力による強化は全自動なんだ！　しかも、『どんな能力が強化されてるかは、ステータス画面を見れば一目瞭然』だぜ？」

ア「すっごーい！　じゃあアスタナもさっそく見てみるのー！」

ペ「『ステータスを見るには、データウォッチを起動して、ステータスのボタンを押せばいい』んだけど、大丈夫か？」

ア「あつ、『すてーたす』がでたー。あ、あれ……？」

ペ「どうした？」

ア「アスタナ、『のうりよくち』のいみがわからないよー」

ペ「はあ。しつかなーなー。今回だけだぞ？」

能力値の詳しい解説は、これだー！」

魔力 蓄えられる魔力量の限界。最大HPに影響。
理力 蓄えられる理力量の限界。最大MPに影響。
強化 攻撃を強くする力。物理攻撃力に影響。
耐久 攻撃に耐える力。物理防御力に影響。
俊敏 素早く動く能力。移動速度・反応速度に影響。
器用 スキルを扱う技術。スキルの成功率・成長速度に影響。
理法 理術に対する理解。理術属性スキルの威力・習得に影響。
克己 己を律する心。理術・状態異常への抵抗に影響。
操作 魔力を操作する技術。HP/MPの変換効率、無属性スキルの威力に影響。
信心 世界を受け入れる心。HPの自動回復速度、アイテムドロップ率に影響。

ペ「もちろんこれは全部HPを利用して強化しているから、強い攻撃を放つたり食らったり、速く移動してもHPは減っていくし、当然使いすぎて『HPが0になると全能力値も一時的に0になる』から気をつけるよ」

ア「ペイモンちゃん、ペイモンちゃん」

ペ「おっと、言い忘れてたが『アバターの初期能力値は本人の性格や性質に左右される』ぜ？」

これも詳しくは分らないが、年代的には10代半ばの奴らが一番初期値が高く、その中でも『意志が強いと物理系、想像力が豊かだと魔法系の能力値が高いことが多い』らしいな。

まあ初期能力値についてはばらつきがあるとしたか言えねえなあ……

……」

ア「ねーねー。ねーってば！」

ペ「もつと詳しい話を知りたい奴は、『ステータス強化について』を読んで……なんだよ、アスタナ」

ア「あのね、いみとかのまえに、かいてある『のうりよくち』の感じがよめないの」

ペ「……ダメだこりゃ」

ア「おあとがよろしいようで」

ペ「というところで、今回の復習だ。かなり量が多いから、しつかり覚えるよな！」

『アバターが傷付いても現実の体に影響はない』

『アバターに宿っている記憶は現実世界に持つていけない』

『アバターの姿は本人の自己認識や願望、コンプレックスに左右される』

『HPは、アバターの攻撃力を強くしたり、攻撃から身を守ってくれたり、素早く動く手助けをしてくれたりする』

『どんな能力が強化されてるかは、ステータス画面を見れば一目瞭然』

『ステータスを見るには、データウォッチを起動して、ステータスのボタンを押せばいい』

『アバターの初期能力値は本人の性格や性質に左右される』

『意志が強いと物理系、想像力が豊かだと魔法系の能力値が高いことが多い』

ア「それじゃ、きょーはおわりだね」

ペ「オマエはこれから漢字の書き取りな！」

ア「ひーん！　うう、とにかく、じかいまで……」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！　良い悪夢を……！」

10・ゲームスタート!!

今までで、一番、『あの日』に、近い、記憶。きっと、三日、前。

ノイズ交じりの光景、

『恐れてたことが、現実になっちゃったよ』

その中でも縁は、何だか今にも泣きだしそうに見えた。

『
』

だから俺はたぶん何かを、縁を安心させようと何かを言ったのだと思う。

けれど、それは縁には届かなかった。

『今からじゃ、無理だよ。』

それに、光一は夢の世界には向いてない』

反発するように、俺が何かを言う。

縁は、首を横に振る。

『そういうことじゃないよ。』

夢に向いてないからこそ、せめて意志を強く持つて』

また、俺が何か言う。

縁はうなずく。

『トラベラーに、なって。
そしたら、もしかしたら、いつかは……』

これがゲームだというのなら、自衛のためにも事態を解決するた
めにも、そろそろ動く必要がある。

そんな結論に達した俺と四方坂は、いよいよ本格的にナイトメア
の攻略を開始することにした。

データウォッチを見ると、なんと残り時間は6時間あった。

10分、20分ときて、なぜここでいきなり時間がこんなに増え
たのかは不明だが、今から攻略していくことを考えるとむしろ都合

がいい。

とりあえずは凍った森を抜け、通常のフィールドへの帰還を目指す。

当座の指針として、一面の森の中で唯一見える目印、森の切れ目から時折覗ける巨木に向かって進んでいくことにした。

そして凍りついた地面に苦戦をしながら歩くこと五分ほど、凍りついた木々のエリアをようやく抜けた頃、俺は前方に、小さな生き物を見つけた。

「四方坂、あれ」

そう四方坂に声をかけると、やはり気付いていたらしい四方坂が、ずっと目を細めた。

この世界に来て初めての、いや、魚人について二番目の人間以外の生き物。

ただし、あの魚人のように真つ黒な鱗をびっしりと生やしているとか、そういう恐ろしい生き物ではない。

見た目はただのウサギ。

ただし、耳がやたらととんがっていて、ちょっと物騒なイメージはある。

「『識別』した。ブレイドラビット。レベルは3」

観察をしていると、四方坂からそう声がかかる。

『識別』は四方坂の所持スキルの中にあった一つで、相手の能力が読み取れるらしい。

こっちのレベルが5と7だということを考えれば、レベル3のこのウサギは雑魚だと判断していいだろう。

……まあ、見た目からしてウサギだし、どう見ても強敵とは思えない。

攻略開始してからの初戦の相手としては、たぶん申し分ないだろう。

しかし、実は不安材料がない訳ではない。

俺はちらりと自分の右手を、そこに握られた自分の武器を見る。

あの鱗人間との戦闘でショートソードを壊してしまったため、今の俺の武器はそこら辺で拾ったただの木の枝。

四方坂に予備の武器でもあれば貸してもらおうと思っていたが、当然そんな都合のよい物はなく、メインの武器もそもそもロッドだった。

普通に地面に落ちているような物が戦いに使えるかという疑問もあったが、『鑑定』スキルを持っているという四方坂に見てもらった所、

【木の枝】

種別：棒

攻撃力：2

77 / 80

と出たらしいので、たぶん武器として使えなくもないだろう。
攻撃力は期待出来ないが、素手で戦うよりはマシなはずだ。
それに、もしかするとこの木の枝だって使っている内にレベルアップして、いつかはどんな剣にも負けない強い武器になるかもしれない。

……まあ、流石にありえない話だとは思うが。

ちなみに『鑑定』も『識別』と同じスキルの一種で、鑑定はアイテムを、識別はモンスターを、それぞれ詳しく調べられるらしい。
非常に便利だ。

確か『トラベラーの必須スキル』だとペイモン君も言っていた。

横目で四方坂をうかがうと、向こうも俺の方を見ていた。
分かっている。

いつまでもここで考え込んでいる訳にもいかない。

幸い相手は一匹。

まだこちらには気付いていない。

「四方坂。それじゃ、決めた通りに」

そう四方坂に囁いて、俺は右手の木の枝を強く握る。

もう一度、目標のブレイドラビットが俺に気付いていないことを確認してから、

「行く!!」

小声でそう宣言をして、飛び出していく。

道中、四方坂とは大雑把にだが戦闘についての打ち合わせをした。

四方坂は俺とは違い、能力値のタイプは魔法（本当はこの世界では理術というらしいが）寄りで、いくつかの攻撃魔法を習得しているらしい。

せっかくなので魔法を見せてもらおうかとも思ったが、ちょっとした事情というかトラウマから断念した。

だって、四方坂に限ってまさかないと思うが、だからこそ四方坂が魔法スキルの確認で、

「ファイアーボール、とぉー！」

とか言い出したら、俺はきつと立ち直れない。たぶん羞恥のあまり、恥ずか死とかしてしまうに違いない。

とにかく、敵に遭遇したら俺が左から回り込み、四方坂がその後ろから攻撃魔法を撃つ、というスタンスで戦うということを、大雑把ながら決めておいた。

なぜ左から攻めるようにしたかと言うと、俺たちはどちらも右利き。

素人考えではあるが、俺が左側に寄っていた方が後ろの四方坂は魔法を撃ちやすいだろうし、俺としても敵が右側にいた方が武器が振りやすいだろう。

その辺りを考えての配置である。

しかし逆に言えば、それ以外のことについてはほとんど決めていない。

アドリブが苦手な俺としては不安ではあるのだが、パートナーどころか自分がどこまで戦えるかも分からない現状、あまり色々と決めずとも邪魔になるだけだろうという判断からだ。

それが吉と出ると凶と出るかは、この戦闘で分かるだろう。

今はこの、ナイトメアにやってきてから二度目の戦闘が無事に終わるように全力を尽くすだけだ。

「援護は頼んだぞ、四方坂」

口の中でそう呟きながら、ブレイドラビットに向かって駆けていく。

連携という課題がある以上、制御の難しい『魔力機動』は使わず、自分の足で地面を蹴る。

足元でシャリシャリと霜を踏んづけるような感触がするが、足場は悪くない。

俺はあまり広くない道を、出来るだけ左側に寄るように気を付けながら走り抜け、ブレイドラビットに忍び寄った。

ブレイドラビットまで、目測で十歩ほど。

相手はまだ俺たちに背を向けていて、こちらに気付いている様子はない。

これは見つからずに攻撃出来るか、と思った瞬間、

「ッ!!」

野生の勘の鋭さか、そいつは機敏に振り返った。

そして、

「なっ!」

ブレイドラビットは接近する俺に気付くと、すぐさま敵意をむき出しにして俺をにらみつけ、まるで威嚇するように両耳をこちらに向けた。

その直後、俺はブレイドラビットの名の由来を知る。
立てた両耳が、鋭利な刃物になっていた。

(どうする? こんな木の枝で、あんなのに対抗出来るのか?)

残り五歩。

足を止めないまま、束の間、逡巡する。

だが、

(いや、行く!)

迷いはあったが、振り切って進む。

これから先、もっと厳しい選択を迫られる場面がたくさんあるだろう。

いつも考えすぎて何も決められない俺だからこそ、迷いを振り切って決断することが必要だった。

(『魔力機動』がある以上、どんな状態でだって方向転換出来る。
相手が刃を向けてきても、かいくぐって一撃入れる!)

ブレイドラビットまで残り三步。

俺がそんな捨て身とも言える覚悟を決めた瞬間、

ヒュン！

高い音を立てて、俺の右側を閃光が駆け抜けた。

（四方坂の魔法の矢！！）

全速で走る俺を遥かに凌ぐ速度で飛んだ魔法の矢は、ブレイドラビットの耳に着弾。

凄まじい威力を見せて、刃ごと耳を吹き飛ばした。

（ナイスアシスト！ これなら行け……ええ？！）

しかも、四方坂が放った魔法の矢は一発だけではなかった。

二の矢、三の矢、四の矢と、まさに矢継早な勢いで魔法の矢が次々とブレイドラビットに殺到、必殺の威力を持った魔法の矢が、ウサギの小さな体を蹂躪する。

目を丸くする俺の前で、結局10本ほどの魔法の矢が魔物の体を貫いていき……。

ブレイドラビットは瞬く間に光の粒に変換され、空気に溶けていく。

後には、ドロップアイテムだろうか、ウサギの尻尾と思われるものもこの毛の塊が残るだけ。

こうして、俺たちの二度目の戦闘は、俺たちの圧倒的勝利によって幕を閉じたのだった。

……というか、あれ？ 俺の出番は？

『ウィルについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！ 住所は地獄の一丁目、救世主悪魔の
ペイモンだぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！ みんなのマスキット、アスタナちゃ
んだよー！」

ペ「銃になっちゃってるよ！」

ア「アスタナ、きけんなおんな？」

ペ「暴発の危険は常にあるな！」

ア「やん！ そんなほめられたらアスタナ、とけちゃうよお／＼／」

ペ「これっぽっちも褒めてないし、オマエにそんな機能ねーから！
！」

ア「それできょーの『ぎだい』は？」

ペ「意外と切り替え早いオマエ！

今日の授業は、ナイトメアにのみ存在する特殊な物質、ウィルに
ついてだ」

ア「た、たいくーん？」

ペ「知らねえけど間違いなく違えよ！ なんだよタイクーンって！
いいか、夢の世界ってのは、見ている本人の意思やら想像やらに

影響されてその通りに変わるだろ？

ウィルってのはそういうもんを数値化した物なんだ」

ア「で、でも、ナイトメアにいるみんながかってにせかいをかえちやったら、せかいが『めちやくちゃ』になっちゃうよ？」

ペ「そうだな。だから逆に言えば、ナイトメアの生き物は、このウィルの分しか世界を変えることはできない。

だからウィルってものは言い換えれば、世界にワガママを言っ自分の思い通りの未来を作るためのエネルギーだとも言えるな」

ア「うー。ちょっとアスタナにはむずかしいよー！ ゲームでたとえと？」

ペ「経験値とお金を合わせたようなもの、だな」

ア「わー！ いっしゅんでわかつちゃったー！

ペイモンちゃんも『しちめんどくさいりくつ』ばかりこねくりまわしてないで、いまみたいにもっとましなこといえばいいのにー！」

ペ「ああん？」

ア「な、なんでもないよ、ペイモンちゃん！ それで、ウィルってどうやっててにいれるのー？」

ペ「『ウィルを入手するには、モンスターを倒したりイベントを達成する』のが一般的かな。

その他にも、『食事をしたり、誰かと取引することでもウィルを手に入れられる』ことはある」

ア「ええ！ たべるだけでウィルがてにはいるなら、アスタナごはんたくさんたべるー！」

ペ「また太るぞ」

ア「うわーん！ ペイモンちゃんのひとでなしー！ あくまー！」

ペ「そのネタはもうやったる！」

それに、食事や取引よりも、モンスターやイベントでウィルを手に入れた方が実はお得なんだ」

ア「おとくなの！？」

ペ「ああ、実はナイトメアでは、『モンスターやイベントで獲得したウィルの量が、レベルを決める』んだ。

今までのウィルの獲得量が1000を超えたらレベル3、2000を超えたらレベル4、みたいな感じだな。

だから、たとえウィルを一回も使わなくても、モンスターを倒してたくさんウィルを獲得すれば、それだけで高レベルになれるんだぜ」

ア「それはおとくだねー！」

あ、でもじゃあ『もんすたー』とか『いべんと』をなんとかしないと、『れべる』はあがらないの？」

ペ「それも違うんだ。実は逆に、モンスターやイベントから全くウィルを手に入れられなくても、ウィルを使うことでもレベルは上げることができる」

ア「え？ え？ な、なんかアスタナ、あたまがこんがるがつてきたよ……」

ペ「いやオマエ、言葉までこんがらがつてるぞ！？」

『ウィルを使うと、1ウィルにつき2ポイント、獲得ウィルの値を上げることができる』んだよ！」

ア「え、ええつと？」

ペ「例えばオマエがモンスターを倒して、100ウィルを手に入れたとするだろ？」

この時点でのオマエの獲得ウィルは100だ」

ア「う、うん。アスタナにもその『けーさん』ならわかるよー！」

ペ「や、まだなんも計算はしてないけど……」。

とにかく！ そこで手に入れた100ウィルをさらに獲得ウィルを上げるのに使つと、なんと獲得ウィルを300にすることができるとんだ！」

ア「すごいー！ おとくだねー！」

ペ「お得、なのか？」

というかなんかオマエ、ぜんっぜん分かってないような気がするけど、大丈夫か？」

ア「だいじょぶだいじょぶ、イける、イける！」

それで、ほかのウィルのつかいみちはー？」

ペ「他には『ウィルを消費することでスキルを習得したり、習得し

たスキルのレベルを上げることができる』のが重要だな！

ただ、これで覚えられるスキルはその時点で閃く可能性があるスキルだけだし、スキルのレベルも使用すればいずれは上がっていくから、どうしてもウィルを使わないといけない訳じゃない」

ア「つまり、ウィルは『せいちょう』をはやくしてくれるだけってこと？」

ペ「アスタナにはいいこと言うじゃんか！ その通りだ！」

ア「やん！ そんなほめられたらアスタナ、ふやけちゃうよー／／」

ペ「オマエにはそんな機能もないし、照れ方の意味が分かんねーよ！！」

ア「ウィルでできることって、それだけー？」

ペ「いや、さつきも経験値とお金を合わせたようなものって言うただろ？」

『ウィルはアイテムを買うのに使ったり、イベントやダンジョンの仕掛けに使ったり、とにかく色々な場面で必要になる』。

全部使いちゃいたい気持ちは分かるけど、賢いトラベラーなら一部は必ず残しておくことを推奨するぜ！」

ア「そっかー。だいじにつかわないといけないんだー。

あ！ でもウィルをはらってりょうりをかって、りょうりをたべてウィルをてにいれれば……はっ、『えいきゅうきかん』！！」

ペ「あ、いや、アスタナ！？」

ア「ちょっと『えいきゅうきかん』してくるのー！　じっはんー！
！」

ペ「あ、ちよっ……って、もう行っちゃった」

ペ「ウィルが上がるようなアイテムは特別な食材アイテムだから、
市場に出回ることにはめったにないし、あってもとても高額で、食
事で獲得できるウィルの量なんかじゃとても足りないんだが……もう、
聞いてないよな」

ペ「……………」

ペ「……………」

ペ「……………」

ペ「やっぱりもどってこないか。仕方ない。今日はここで終わるか。
さて、気を取り直してこれが今回の復習内容だ！　しっかり頭に
いれとけよな！ー！」

『ウィルを入手するには、モンスターを倒したりイベントを達成す
る』

『食事をしたり、誰かと取引することでもウィルを手に入れられる』
『モンスターやイベントで獲得したウィルの量が、レベルを決める』

『ウィルを使うと、1ウィルにつき2ポイント、獲得ウィルの値を
上げることができる』

『ウィルを消費することでスキルを習得したり、習得したスキルの

レベルを上げることができる』

『ウィルはアイテムを貰うのに使ったり、イベントやダンジョンの仕掛けに使ったり、とにかく色々な場面で必要になる』

ペ「ちゃんと覚えられたか？ それじゃ……」

ペ「グッナイ、トラベラーズ。良い悪夢を」

ペ「……うーん、やっぱりひとりじゃ締まらねえなあ」

11・オーバードライブ

たぶん、『あの日』よりも三週間ほど前。

『そういえば、夢の中の縁って、一体どんな感じなんだ？』

『どうしたの、いきなり』

縁のお株を奪う俺の唐突な質問に、縁がきよとした顔で答えた。

『いや、そういえば色々夢の中の話聞いたのに、直接夢の中でお前の話を聞いたことがないような気がするな』

『そうだった？』

どうやら自覚はないようだが……。

『そうなんだよ。仲間がどうしたとか、こういう冒険をしたとか、そういう話は良く聞くけどさ。』

実際のところ、縁がどういうキャラを動かしてるのか、詳しくは聞いてなかっただろ？』

『そっか。やっぱり光一、わたしのこと気になるんだ』

『…馬鹿なこと言ってる』

ここで動揺を押し隠せた俺を、誰か褒めてくれてもいいと思う。

それでも縁は見透かしたように含み笑いをして、ようやく俺の質問に答えてくれた。

『わたしはね。魔法使いタイプ』

『魔法使い、かあ……』

箒に乗って空を駆ける縁の姿を夢想する。

目を細め、気持ちよさそうに風を切って空を飛ぶ縁。

高い空の上から俺に向かって手を振って、至近距離から鮮やかなインメルマントーン！

……あ、パンツ見えた。

『あ！　今なんか、変なこと考えてる顔してた！！』

『根も葉もない言いがかりはやめてもらおうか！』

というか、箒に乗るのは魔女だ。

たぶん、ちよつと違う。

『魔法使いは魔法使いでも、接近戦もできる魔法使いだからね』

『へえ？』

縁はちよつとおどけて言った。

『空を駆ければ縦横無尽、魔法の槍は巨人をも貫き、魔法の盾は竜の吐息すら防ぐ。』

『そんな魔法使いに、わたしはなりたい』

『ただの願望じゃないか……』

俺はちよつとだけ呆れた。

だがきつと、夢のことをこうやって明るく話せるようになったのは、いいことなんだろう。

『まだ、ただの願望。でも、あと一か月もあれば実現してるって自信もあるよ。』

『そしたら光一にも、見せてあげたいけど……』

『……そんな機会があったらな』

湧き上がった一抹の寂しさを押し隠し、まるで興味がないように、俺は答える。

ただ、もしもそんなゲームがあったなら……。

俺も、縁と一緒に魔法使いをやるっていうのも、面白いかな。

なんてことを、俺は思っていた。

あっという間に終わってしまった戦闘にしばらく呆然と立ち尽くしてから、俺は我に返って振り返った。

「四方坂。助かったけど、今のはちょっとやりすぎだ」
いや、本音を言っと、ちょっとどころではない。
完全完璧にやりすぎだ。

こんなに派手なオーバーキルは初めて見た。

全部で十発くらい撃っていたが、たぶん三発目くらいでもうあのウサギは倒せていただろう。

一応夢の世界ということであらうリアルさが若干抑えられているのか、魔法の当たった場所で血や肉片が飛び散って……なんてことはなかったが、それでも生き物の体が次々と吹っ飛んでいくのはあまり心臓には良くない。

そして、もつと実際的な問題。

「それに、あんなに魔法を撃ってMPは大丈夫か？」

それはMP消費だ。

例え、さっきの魔法の矢がMP消費1の魔法だったとしても、10発撃てば消費は10になる。

LV5で物理系の俺はHPが45、MPが5だった。

MPに関係する理力の値が0だった俺のMPは参考にならないにしても、基本的にMPの伸びは、数值的にHPの半分くらいらしい。そうすると、LV7で魔法系の四方坂は、MP30くらいだろうか。

さっきの魔法の矢がMP消費1なら最大MPの3分の1、消費が2だったらもう半分以上を使い尽くし、3だったらもうMP残量0、なんてこともあり得てしまう。

しかし、俺の心配は杞憂だった。

「大丈夫。あと、160回は撃てる」

しれっとそう言つてのける四方坂。

……160ときた。

これはつまり、最低でも四方坂のMPは170以上あるということとを意味する訳で……。

あれ？ ということは、HPが45しかない俺って……。

考え込んでいる途中で目の前に影が差した気がして、ハッと目を上げると、

「…どうか、したの？」

急に黙り込んだ俺を、訝しげに四方坂が見ていた。

「い、いや、なんでもない。……それより、このアイテム、どうしようか」

俺は慌ててごまかして、ブレイドラビットのドロップアイテムらしいウサギの尻尾を取り上げた。

……まあ、ここは順当にいつて、倒した四方坂の物だろう。

ただ、毎回毎回どちらが倒したとか言っただけ言い合いになるような事態は避けたい。

ドロップアイテムについては何か明確なルールを決めておきたい所だが……。

そんな風に迷う俺に、

「パーティ設定、して、パーティボックスにいれればいい」

四方坂が、そんな提案をしてきて、俺は少なからず驚いた。

パーティボックスというのは、パーティを組んだ者がドロップアイテムなんかを分配する時に使う機能で、パーティ全員がアイテムの分配に同意した時、あるいは何かの事情でパーティが解散する時、そこに入っているアイテムがランダムでパーティ内の誰かに配布されるシステムだ。

それを使うのは問題ない。

もし四方坂が言わなければ、こちらが提案していたかもしれないほどだ。

しかし、俺が引つかかったのは、四方坂からその話が出て来たことだ。

「四方坂、パーティボックスなんて良く知ってたな」

パーティボックスは、『ないとめあ　の　あるきかた』の真ん中辺り、『パーティについて』に書かれていたから俺は知っているが、四方坂も知っているとは思わなかった。

もしかすると、データウォッチのヘルプに書いてあったのだろうか。

俺がそんな風に納得しかけていると、

「…ペイモンちゃんが、そう言ってたから」

四方坂が、意外な告白をした。
俺は目を丸くする。

「え？　もしかして、俺が渡したあの本、読んだのか？」

その俺の質問には、四方坂はこくんと小さいうなずきで答えた。

「そ、うなのか……」

それこそ、意外だった。

当然この夢世界には持って来れないあの本を読んだというなら、それは現実世界の、この世界の何を何も覚えていない四方坂が読んだということだ。

俺のことを怒っていたようだし、そんな俺から渡された本なんて、目を通すはずもないと思っていたのに。

さらに言えば、ペイモンを『ちゃん』付けで呼んでしまうほどのあの解説悪魔に親しみを感じているのも意外過ぎだった。

「ん……」

四方坂はそれ以上取り合わず、素早くデータウォッチを操作。
データウォッチを通じて、俺にパーティ編成の要請をしてくる。

すぐにOKのボタンを押そうとして、しかし途中で動きを止めた。

（パーティ、か）

パーティの役割は、当然パーティボックスが利用出来ることだけではない。

この世界での経験値やお金に当たる『ウィル』の分配や、アイテムの共有、一部ステータスの開示など、様々な効果を持つ。

万が一悪用されれば、どんな被害に遭うか分からない。

「なあ、四方坂。俺と……」

俺とパーティを組んでしまっていていいのか、なんて聞こうとして、踏みとどまる。

四方坂が、そんな当然のことを考えていないはずがない。

なのに俺にパーティ結成の申し入れをしてくれたのだから、その意を汲むべきだろう。

「じゃ、じゃあ、組むぞ」

それでも一応そう宣言して、俺は初めて感じる興奮と緊張を覚えながらもボタンを押す。

すぐに無機質なメッセージが表示され、あっけなくパーティ編成は終了する。

データウォッチを見ると、パーティメンバーに、四方坂が加わっている。

なんだろう。ちょっと嬉しい。

初めて携帯に友達のアドレスを登録した時みたいな感動が、胸の辺りにこみ上げてきた。

考えてみれば、四方坂とも随分親しくなったものだ。

最初は見ただけで逃げ出されたのに、何しろ今ではパーティメンバーなのだから。

「よし、それじゃ四方坂……」

俺がご機嫌な気分で、四方坂に出発を告げようとした所、

「…それ、やめて」

絶対零度の声音が、俺の鼓膜を撃ち抜いた。

「え、つと？」

何を言えがいいのか分からず体が固まった。

ヤバイ。

もしかして俺、四方坂と仲良くなれたとか調子に乗って、変な笑いかしてたか？

縁いわく、俺は邪念がすぐに顔に出るタイプらしい。

四方坂はそういうのに鋭そうだから、もしかすると見抜かれたのかもしれない。

破滅の予感に、ドッと汗が噴き出してくる。

「四方坂って呼ぶの、やめて。その名前、嫌い、だから」

続いた言葉は、そんなものだった。

考えを見抜かれた訳じゃないのか？

いや、でも、四方坂って呼べないなら、一体……。

「……ナキ」

「え？」

驚いて小さく声を漏らす俺に、四方坂はあいかわらず虫けらでも見るような目を向け、

「こっちの方が、気に入ってるから」

それだけを言い捨てると、勝手に歩き出してしまった。
残された俺は、呆然とするしかない。

「あ、れ？　これって、どういうことなんだ？」

下の名前を呼ばせてくれるなんて、普通に考えたら仲のいい証拠で、本当だったら有頂天になって浮かれてもいいくらいのことだと思っただが。

四方坂の俺を見る目は、どう考えても友好的なそれではなかった。

はたして四方坂との仲は縮まったのか、はたまた怒らせてしまったのか、俺には判断不能だった。

「四方さ……ナキ。MPは？」

「大丈夫。あと、93発」

慣れないながらも四方坂……いや、『ナキ』を名前で呼び始めて1時間ほど。

また名前を呼び間違えてしまつて、俺はナキに見えないようにため息をついた。

1時間経つても慣れない俺も俺だが、たまにすっかり四方坂と呼

んでしまっただけで、人とか殺しそうな目でこっちをにらみつけてくるのは如何なものだろうか。

どうやら本当に四方坂と呼ばれるのは嫌いらしいのは分かったが、ちよつとは手加減して欲しい。

しかし俺と四方……ナキとの仲とは裏腹に、探索自体は非常にうまくいっていた。

というか、実際敵を見つけても、

「ナキ！ グリーンウルフ、1」

「わかった。……マジックアロー！」

とまあ、これで終わりのことがほとんどなのである。

敵が一匹であれば、相手の気付いていない間に四方坂……ナキが、マジックアローを発射。

向こうが気付いた時には魔法の矢×3を浴びて即死。

敵が二匹以上であれば一応俺も接近するが、今まで一度も敵を攻撃したりされたりしたことはない。

相手が俺に気を取られている隙に、後ろから魔法の矢が飛んできて全滅させてしまうからだ。

一応囹としての役目は果たしていると言えるが、正直ナキ一人でも魔法の矢の命中率が少し下がるだけで、十分対処が可能な気がする。

また、この森には最初に見たブレイドラビットの他に、グリーンウルフという緑色のオオカミがいたが、戦う分にはブレイドラビットとあまり変わりはない。

強いて言うならブレイドラビットよりは動きが速いので、たまに魔法の矢が4本必要になるという程度か。

今の所、俺たちが最初に遭遇した魚人にはまだ出遭っていない。これだけ見つからないとなると、もしかするとあいつは、あの凍った森限定のモンスターだったのかもしれない。

魚人と氷というのはあまり縁がなさそうに思えるが、氷も融ければ水なんだから、関係ないとも言えないだろう。

などと考えている間に、また前方に魔物の気配。

「ナキ、前方ブレイドラビット、1」

「わかった。……マジックアロー！」

魔法の矢が飛び、あっという間に魔物が空に溶ける。

これを、一体何度繰り返しただろうか。

160撃てるはずの魔法の矢が残り90くらいだから、20回程度といった所か。

ドロップアイテムを回収するついでにちらりと自分のステータスを覗くと、そろそろレベルが上がりそうだった。

パーティメンバーが倒した分のポイントは、他のメンバーにも分配される。

何もしていないのにもうすぐレベルアップというのは、流石に申し訳なかった。

（やっぱり、このままってのも良くないよな）

特に何の感慨もなく先に進もうとするナキを、俺は引き留めた。

「ナキ。ちょっと、話がある」

「なに？」

少しだけ、機嫌が良さそうにナキは振り向いた。
間違わずに名前を呼んだからだろうか。

その楽しそうな顔を壊すかもしれない提案に気が引けたが、俺は意を決して切り出した。

「パーティのことなんだが、ちょっと考え直さないか？」

「…どういう、こと？」

案の定、ナキの顔は急に不機嫌そうになった。

いや、ちよつと変化があつたように見えるだけで、ナキの顔はあ
いかわらずの無表情と言えるから、それは俺の思い込みなのかもしれ
ないが。

とにかく、全部言ってしまう。

「俺は全然敵を倒してないんだし、このまま俺にもウィルが入るの
は不公平だろ？」

だから、パーティは解除しないか？

そうしないと、四方坂の分のウィルが減って……」

「それは、困る」

俺の言葉の途中で、四方坂が口を挟んだ。

経験値だのお金だのに淡泊そうに見えたが、どうやらそうでもな
いらしい。

反応を見せてくれたことに安堵と、ほんの少しだけの寂しさを感じ
ながら、俺は話を進める。

「そ、そうだろ？ だから、一度パーティ設定を解除して……」

「だから、困る」

「…え？」

しかし、その話を再び遮られて、俺は混乱した。
ナキは責めるように俺を見て、言った。

「パーティが解除されて、あなたの……………コーイチのレベル
があがらなくなるのは、困る」

「あ……………」

バーン、と胸を撃ち抜かれたような気分だった。

あいかわらず愛想がない言い方だったし、『あなたの』と『コー
イチの』の間にドエライ間があったが、そんなことはどうでもいい。

その台詞に俺は心打たれたし、ナキに初めて名前を呼んでもらっ
て、ナキのことを、なんというか、仲間なんだとはつきりと実感し
た。

馬鹿なことを言った、と思うと同時に、もっと頑張らないと、と
も思った。

「……………いこう？」

見ると、考え込んでいる俺を置き去りに、ナキは前に進んでいた。
それでも振り返って、俺を待っていてくれる。

「ああ。行こう」

そう言って、俺はナキに向かって、足を踏み出した。

小さな決意を、胸に秘めながら。

俺の決意を見せるその機会は、意外とすぐにやってきた。

「ナキ！ 前方、ブレイドラビット2！」

「わかった。タイミングを見て撃つ」

ナキの返答に、俺はうなずき返しながら、ブレイドラビットに向かって駆けていく。

（よし、ここからだ……）

今までは、ただ敵の注意を引いているだけだった。
だが、今回は違う。

このまま、ナキにばかり負担をかける訳にはいかない。

1匹目のブレイドラビットまで残り7歩くらいまで近付いた瞬間、俺は身の内に宿る力を解放する。

スキル発動『オーバードライブ』。

瞬間、五感が拡大する。

いや、この感覚は五感ではなくて『魔力感知』だろうか。

束の間の全能感。

感覚と思考が増大、加速して、ブレイドラビットがどう動こうとしているのか、手に取るように分かる。

それどころか、背後で四方坂が放った魔法の軌跡すら、肌で感じ取ることが出来た。

ナキの放った魔法は三つ。

その軌跡から考えて、その全てが俺の目の前にいるブレイドラビットに命中するだろう。

だから、そいつは狙わない。

俺はすぐに『魔力機動』を発動。

通常の『魔力機動』の2・2倍の高速で、三本の魔法の矢の間をすり抜ける。

「……っ!？」

背後から聞こえた、驚きに息を飲む音を心地良く感じながら、俺は魔法の矢を受ける一匹目のブレイドラビットの横を通り過ぎ、

「やっ!！」

短い気合の声と共に、まだこちらを目で追えてもいない二匹目のブレイドラビットの顔面に向かって、手にした木の枝を思い切り叩き付ける。

肉を叩く鈍い感触を手の平に感じながら、俺は『魔力機動』でさらに加速、駄目押しの力を加えて、枝を振り抜く。
渾身の手応えと共にブレイドラビットの体がひしゃげ、次の瞬間光の粒子へと変わる。

（よし！）

探索を開始してから初めて、俺の力で魔物を倒した。
同時にデータウォッチが光って、レベルアップを告げる。
ちらりと左を見ると、1匹目のブレイドラビットは、既に魔法の矢を浴びて消滅する所だった。

それを見届けると同時に、ぐん、と体が重くなる。

『オーバードライブ』の効果時間終了だ。

MPが0になっているはずなので、MPを補充しない限りもうこのスキルは使用は出来ない。

しかも、たった一度、敵を攻撃しただけでもう時間切れである。
自己強化スキルの中でも、恐らくダントツのMP効率の悪さを誇るだろう。

だが、同時に確信もした。

この『オーバードライブ』。確実にレアスキルだ。

効果時間はLV1だとたったの6秒間。

しかし、そのたった6秒の間だけで不利な戦況を覆せるだけの力を、このスキルは充分に備えている。

効果時間中の『魔力機動』はすごい速度だったし、『オーバードライブ』に能力値アップの効果はないはずだが、あの時の木の枝の

一撃はスピードとあいまってかなりの威力を……ん？

「あ……」

俺は自分の手元を見て、思わず声を上げた。

俺には鑑定スキルなんてないが、これは見れば分かる。

【木の枝】

種別：棒

攻撃力：2

0 / 80

つまり、見るからに、耐久値0。

だからまあ、なんというか……。

俺が武器として使っていた木の枝は、ぼつきりと真っ二つに折れていた。

実に短い間の付き合いだった。

武器の摩耗率10倍という、『オーバードライブ』の意外なデメリットを忘れていた。

やれやれ、やっぱり木の枝なんかじゃ武器にならない。新しい得物を探さなきゃな、と思った所で、

「ん？ なん、だ…？」

俺は……自分の背後に迫る、冷気に気付いた。
嫌な予感に駆られながらも、俺は恐る恐る振り返る。

「四方、あ、いや、ナ、キ……？」

後ろを向いて、ゾツとした。

ナキがこつちをにらんでいる。

しかも、その眼光の鋭さはいつもの比ではない。

いつかの教室、あなたを殺すと言われた時と同じくらい、いや、それ以上の強さで俺はにらみつけられていた。

周囲の空気が、凍る。

俺の周りだけが、氷の森以上の冷え込みを見せる。

途轍もない迫力に押し潰され、身動き一つかなわない。

「……」
「……」
「あ、の？」

「……」
「……」
「な、ナキ？」

「……」
「……」
「さっきのは、その」

「……」
「……」
「っ」

「……」
「……」

「……………」

言葉が続かない。

冷たい、けれど燃えるような怒りを感じさせる瞳で彼女は俺をたつぷり十秒間は見つめ、俺があまりのいたたまれなさに顔を伏せようとした時、ようやく彼女は口を開き、一言だけ、言った。

「…危険なこと、しないで」

当然俺に、逆らうなんて選択肢はなく、

「すみませんでした…」

深々と、頭を下げたのだった。

世の中色々、ままならない……。

『スキルについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！ 解説こそ我が生き甲斐！ ペイモン様だぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！ みんなのアスコット、アスタナちゃんだよー！」

ペ「あー、ネクタイの一種だっけか？ だんだん苦しくなってきたなー」

ア「ネクタイだけにね！」

ペ「別にうまくねえから！！」

ア「こんど、みんなの首をしめにゆきますー！」

ペ「行かんでいい！ ……という所で、今日のお題は『スキルについて』だ！」

ア「あ、スキルならわかるよー。ゲームとかによくでてくる『わざ』だよねー」

ペ「お、めずらしく正解だぜ！

ただ、ナイトメアの『スキルは、その使い方からユニーク・アクティブ・パッシブに分けられる』んだ」

ア「ふふん。『あくていぶ』と『ぱっしぶ』ならアスタナしてるもんねー！

『あくていぶ』はひつさつわざとかまほーとか、そーゆーじぶん
でつかうもので、『ぱっしぶ』はぼうぎよりよくがあがるとかてき
が鳥だと『くりていかる』がでやすくなるとか、じどーでつかわれ
るものでしょ？」

ペ「オマエ、ほんとゲーム関係には詳しいなあ。

そうだな。特定の剣筋をなぞることによって武器攻撃に威力や速
度ボーナスがつく武技、特定の呪文を詠唱することによって様々な
現象を起こす理術、なんかがアクティブスキル。

攻撃や防御とか、特定の行動に補正がついたりするのがパッシブ
スキルには多いかな」

ア「えっへっへ！ アスタナさいきょーせつふじょー、だよ！」

ペ「ま、もう少しきちんと定義をすると、『アクティブはHP・M
Pなどを消費して、その時だけ効果を発揮するスキル、パッシブは
意識して使おうとしなくても、ずっと効果を発揮するスキル』って
とこかな」

ア「ん？ あれー？ そういえば『あくていぶ』と『ぱっしぶ』は
わかつたけど、『ゆにーく』は？」

ペ「ああ、こいつはちよつと特殊だな。

『ユニークスキルは人によって違うから、アクティブスキルのよ
うな物もあれば、パッシブスキルのようなものもある』。

ただし、普通のスキルと決定的に違うのは、『ユニークスキルは
ユニーク専用の能力値であるDPを使う』って所だな」

ア「ほかのスキルではDPはつかわないのー？」

ペ「ああ。D Pは完全にユニークスキル専用で、H PやM Pでユニークスキルを使うことはできないし、逆にD Pを使って他のスキルを使うこともできない。」

そのおかげでH PやM Pに余裕がない時でもユニークスキルはガンガン使っていけるが、『D Pを使いすぎて0になると、気絶してしまう』から注意が必要だな」

ア「ふーん。『ゆにーく』じゃない『あくていぶ』スキルはH PやM Pをつかうんだよね？」

それはつかいすぎるとどうなるの？」

ペ「前にも言ったが、H Pは0になると全能力値が一時的に0になる。」

M Pはなくなっても理術が使えなくなるだけで特にデメリットはないな」

ア「う、うーん？ と、ところでなんだけど、そもそも、『りじゅつ』ってなに？」

ペ「そこからかよ！ ……はあ。とりあえず、前にしたH Pの説明を覚えてるか？」

ア「ひゅふのふ・はわーだよね！！ アスタナ、ちゃんとおぼえてたよ！」

ペ「うん、ヒュプノス・パワー、な？」

ぶつちやけると、スキルっていうのもこの世界にあふれる魔力って不思議パワーを使った超常現象みたいなモンなんだが、特性の問題で、ヒュプノス・パワーは物理攻撃と物質強化以外には使いにくいんだ」

ア「ええー？　じゃあ、このせかいには火のまほーとか水のまほーはないの？」

ペ「いいや。たしかにヒュプノス・パワー、HPじゃあ火や水は作りにくい。

だったら火や水を作りやすいように、魔力を作り変えてしまえばいいって考えた奴がいたんだ。

そしてその、『火や水に変化させやすく精製した魔力を理力、マジック・パワーって呼んでる』んだよ。これが、いわゆるMPだな」

ア「おぉー！」

ペ「そしてその『理力を使って火や水を起こすスキルを、一般的に理術と呼ぶ』んだ」

ア「『りじゅつ』ってそーゆーものだったんだねー」

ペ「だから、スキルの属性によって消費する物や必要な能力値が違うんだ。

具体的には、

『魔力をそのまま使う無属性のスキルには操作の能力が重要で、HPを消費する。

魔力を物理現象に変える物理系スキルには強化の能力が重要で、HPを消費する。

理力を使って火や水を生み出す理術系スキルには理術の能力が重要で、MPを消費する』。

って感じかな」

ア「なってるほどー！　じゅうぶんのいち、くらいわかったよー！」

ペ「全然じゃねえか！　……ま、色々言っただけど例外もあってさ。

例えば理力だって魔力には違いがないから、MPを消費する無属性スキルとかもあったりするんだが、こういう例外は大抵効率が悪いんだ」

ア「？　どーゆーことー？」

ペ「操作の能力値が高ければ少しずつ効率は上がるんだが、基本的に、『MPを1精製するためには、HPが3必要』なんだ」

ア「つまり、MPはHPの三倍の『かち』があるってことー？」

ペ「そんなとこだな。なのにMPを普通に無属性で使っても効果はHPの時とほとんど変わらないから、もったいないことになるんだ」

ア「もったいないおぼけがでちゃうよー！」

ペ「それと、ナイトメアでは自然界にいくらでも存在していて、いつでも体に取り込める『HPと違って、MPは自然回復しない』から注意が必要だぜ。

MPが足りないと思ったら理力精製だ。

『理力精製をすると、1秒間につき1HPをMPに変換できる』。初期状態だと、3HPで1MPができるから、3秒で1MPが回復できることになるな」

ア「えー！？　そんなにおそかったらこまるんじゃないの？」

ペ「ああ。だから、理力精製の速度は速めることができるぜ。

ただし、『精製速度を2倍にすること、消費HPが4倍になっていく』から注意しろよ」

ア「つまり、MPをはやくつくろうとしたら、HPをたくさんむだにしちゃうってこと？」

ペ「そうだな。普段3HPで1MP作れる奴なら、速度倍の時は6HP。4倍なら12HP。8倍なら24HPを、1MPに変えることになるな」

ア「わーん！ そんなにむだにしちゃったら、こんどはHPがたりなくなっちゃうよー！」

ペ「ま、『HPが最大の時には余ったHPで自動的にMPを精製する』から、十分に休息を取ればMPも全快するけどな。

あ、ちなみにMPからHPを作ることできるが、1MPで1HPしか作れないから注意な」

ア「うう。アスタナ、『けいさん』しすぎておなかいなくなってきたよ……」

ペ「や、オマエ計算してねえし、そういう時は頭が痛くなるんじゃないのか？」

ア「すうじをいっぱいいきいてたから、『すとれす』で……」

ペ「オマエどんだけ数字に弱いんだよ！

まあしょうがない。なら、今日はもう終わりにするか。

これが今回の復習な」

『スキルは、その使い方からユニーク・アクティブ・パッシブに分けられる』

『アクティブはHP・MPなどを消費して、その時だけ効果を発揮するスキル、パッシブは意識して使おうとしなくても、ずっと効果を発揮するスキル』

『ユニークスキルは人によって違うから、アクティブスキルのような物もあれば、パッシブスキルのようなものもある』

『ユニークスキルはユニーク専用の能力値であるDPを使う』

『火や水に変化させやすく精製した魔力を理力、マジック・パワーと呼んでる』

『理力を使って火や水を起こすスキルを、一般的に理術と呼ぶ』

『魔力をそのまま使う無属性のスキルには操作の能力が重要で、HPを消費する。』

『魔力を物理現象に変える物理系スキルには強化の能力が重要で、HPを消費する。』

『理力を使って火や水を生み出す理術系スキルには理術の能力が重要で、MPを消費する』

『HPと違って、MPは自然回復しない』

『理力精製をすると、1秒間につき1HPをMPに変換できる』。

『精製速度を2倍にすることに、消費HPが4倍になっていく』

ア「うう。まとめきいてたら、アスタナ、またおなかいたくなってきた……」

ペ「おまつー!? さ、さあ、とりあえず終わるぞー!」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！ 良い悪夢を！」

ペ「まだ話すこと残ってるんだが、この続きは『スキル習得について』で詳しく話すことにするか！」

ア「やー！ もうスキルはこりこりだよー！！」

12・レベルアップ

たぶん、『あの日』から四週間ほど前。

『うー。頭いたい……』

珍しく、俺の前で縁が弱音を吐いていた。

『風邪か？ 今日はずっとゆっくり休んで……』

『う？ 違う違う。ちよっとゲームの設定がね。色々とめんどろすぎて、覚えられないだけ』

『また夢の話かよ……』

一ヶ月くらい前から、縁との二人きりに会話では必ずと言っていいほどのこの縁の変な夢の話が出るようになった。

夢の中でゲームをしている、なんて正直信じられないのだが、話のディテールが凝っている上にちよっと縁の発想では出て来ないような言葉や考え方がたまに出て来るので、完全に疑うことも出来ない。

最近ではとりあえず真偽については判断保留にして、縁の話聞くようにしている。

色々複雑な思いもなくはないが、楽しそうに話す縁を見るのは、うん、まあやっぱり嫌いじゃない。

『バージョンアップって呼ばれてるんだけどね。』

夢の中でゲームをやりながらゲームを作ってるようなものだから、夢を見てる他の人たちの思い付きで、どんなゲームの仕様とか設定が変わっちゃうの！』

『そりゃ、あんまり聞いたことないな』

ゲームのルールをプレイヤーが決められたら、自分に有利な仕様

ばっかり作ってしまいそうだ。

『まあ、悪いことばかりじゃないよ。
ゲームが始まった最初の頃なんて、HPが減ると怪我する仕様だったからね。』

HPが半分とかになれば容赦なく腕とか足がちぎれ飛ぶし、瀕死になると内臓がはみだしたり血を吐いたり、とにかくもうHPが減っちゃったら戦えるもんじゃなかったよ』

『うわぁ……』

それは確かに、阿鼻叫喚の地獄絵図だろう。

画面越しの光景とはいえ、自分のキャラの手足がちぎれる光景なんて見たくないし、手足がちぎれてたらそりゃあ戦闘力も落ちる。リアリティを追及しすぎたゲームの問題点が浮き彫りになった形だ。

『そこから『HPは体力じゃなくて体を守るバリアのエネルギー』みたいな設定になって、HPが0になるまであんまり怪我とかしなくなっただのは嬉しいよ。』

だけど、『そうなるとHPもMPもどっちも魔力ってことになる！』『じゃあMPは魔法用に性質を変えられた魔力って設定にしようぜ！』『よし、ならリアリティを追及して、MPはチャージ制にしようか！』『みたいな感じでどんどん設定を複雑にしてくから、覚えるこっちは大変なんだよね！』

縁が怒気も露わにまくしたてた。

いつもどこか余裕を残して、何だか思わせぶりなことばかり言う縁がこの態度である。

どうやら相当腹に据えかねる物があるらしい。

『そういう大規模な設定の変更や追加とかがあるとナイトメアのverが変わるんだけど、数十回の更新を終えて、ようやくほんの三日前に正式安定版とか銘打ったver1.0になって、これでしばらくバージョンアップはないかなって思ってたなら、今、もうver1.4だよ？』

ひどすぎると思わない?!』

『ええと、ひどすぎる……かな?』

俺は共感は出来ず、かといって否定も出来ず、曖昧にごまかした。

しかしverとは、何だか本当のゲームのような雰囲気だ。

夢の世界にverとかつけるなよ、とは思うが、まあきつとそういうのが好きな奴らが集まったということなんだろう。

『たとえば言うなら、本編は30分で終わるのに付属の設定資料集が三冊もある同人ゲームをやってるような気分だよ!』

『流石にないだろ、そんな業の深い物!』

『……じゃあ、本編が一話進むごとにゲームの説明書を一項目ずつ挟み込んでくる素人小説を読んでもるような気分!』

『もつとねえよ!』

そんな物、もはや物語を読ませてるんだかゲームの説明書を読ませてるんだか分からない。

もしそんな物と同じなら、確かに怒って当然だ、と俺が初めての共感を覚えた直後、なぜか縁の顔がふにやりと歪む。

『でも……そういうのを覚えるのが、けっこう楽しかったりするんだよねー』

『なんだよ、それ……』

結局、不満も含めて楽しんでいるだけなのだ、こいつは。

俺は心の底から呆れながらも、俺にだってあまり見せないその無防備な笑顔を横目に、こっそりと頬を緩めたのだった。

四方坂……もといナキとは、苦勞はしたが一応の意思疎通が出来た。

俺の考えからすると、使うとMPの減っていく魔法は温存し、雑魚戦では出来るだけ近距離攻撃で敵を倒すのが最善だと思っていたのだが、ナキの考えは違ったらしい。

相手が雑魚とはいえ、接近戦ではどんな危険があるか分からない。だからMPがある内はリスクの少ない魔法攻撃を積極的に使って進

むべきだ、というのがナキの言い分だった。

ちよつと過保護だとは思うが、その考え方はまあ分からなくはない。

しかし、そんな時に勝手に俺が動いた。

しかもナキの目から見ると、俺は自分から魔法の矢に飛び込んで行ったように見えたらしい。

危険を避けるために頑張って魔法を使っていたのに、その目の前で自殺まがいの特攻をかけられたとなれば、それはナキも怒るだろう。

雑魚戦で近接攻撃をしないというナキの方針はどうかと思うが、だからといってナキに一言の相談もなく敵に突っ込んだのは、どう考えても俺が悪かったとしか言えない。

話し合いつてやっぱり大切なんだなと思いながら、俺は改めて、ナキと今後の戦闘の方針を話し合った。

とりあえず、接近戦の経験も積まないとざという時に逆に危ないという理由から、敵が2体以上の時はナキに魔法を使ってもらって、1対1の時は俺が接近戦を行う、という所で落ち着いた。

ちなみにだが、壊れた木の枝の代わりは鑑定技能を持つナキに見繕ってもらった。

【硬い枝】

種別：棒

攻撃力：4

81 / 84

すげえ！！　なんといきなり攻撃力が2倍に！！

……いや、分かってるから何も言わないで欲しい。

とりあえずまともな武器、特に『刀剣』スキルが使える剣系統の武器の入手は急務だが、店も何もない森の中ではそれも望み薄だ。仕方なく、この新しい相棒で早速敵と戦ってみることにした。

標的は、単独で出て来たブレイドラビット。

相手が一匹だと確認すると、

「…任せる」

と言ってナキは持っていた杖を下ろした。

心置きなく戦闘に集中する。

やはり、発見されずに相手に先制攻撃するのは無理らしいので、用心深く近付く。

そろそろこっちの枝が届くかなという距離にまで近付いた所で、

「おわっ！？」

ブレイドラビットがいきなり凄まじい跳躍力で飛び上がって刃になった耳を振るった。

反射的に避けようとしたが躲し切れず、腹をかする。

「くっ！」

生身の時にやられていたら怪我をしたかもしれないが、幸いHPが攻撃を肩代わりしてくれた。

「うっ!」

ここで反撃しようとした俺が攻撃に移ろうとした直後、

哀れなウサギはどこから飛来した無数の魔法の矢に貫かれ、ハチの巣になった。

「ナキ!？」

明らかに魔法の矢の発生源は、俺の背後にいたエルフ娘だった。

「……私が手を出さないとは、言わなかった」

いや、言ってたから！！
任せるって思いつ切り言ってたから！！

とは思ってたが、ここで怒鳴り散らしたりするのも大人げない。
とりあえず、ステータスのチェック。

H P	31 / 45
M P	5 / 5
D P	5 / 5

見ると、やはりH Pがいくらか減っていた。
戦う前は全快状態だったはずなので、さっきの攻撃で14ダメージを受けたということだ。

戦闘中は『魔力機動』でも少しずつH Pを使うだろうし、実質3回攻撃を喰らえばアウトか。

……結構厳しい。

俺が一人で、ブレイドラビット二匹に同時に襲い掛かれたりしていたら、実際危なかったかもしれない。

密かにナキの存在に感謝しつつ、次はうまくやると決意を固める。

その次のチャンスもすぐに来た。

二匹のブレイドラビット。

一匹はナキの魔法によって危なげなく倒してもらい、いよいよベンジマツチの開始だ。

相手に近付けばジャンプして攻撃してくることは分かったので、後の先を取る。

同じ行動を取ってくれるか心配だったが、一定距離まで近付くとブレイドラビットが前と同じように飛びかかってきてくれた。

（ここだ！）

『魔力機動』を使い、俺は一瞬で真横に移動。刃の耳を避けつつ、さらに直角に曲がるように直進。ブレイドラビットの斜め後ろに回る。

『魔力機動』のいい所は、予備動作が全く必要ないことと、最初からトップスピードが出せることだ。

おかげで実際のスピードよりも速く動いたように相手は感じるだろう。

攻撃のために頭を下げていたこともあって、完全に俺の姿を見失ったブレイドラビットの後頭部を、木の枝ではたく。

一回殴っただけじゃ倒せなかったので、体勢を崩した敵を、続けて二度、三度とぶん殴る。

四発目を繰り出そうとした所で、ブレイドラビットは光の粒子に変わって消えた。

（まあ、こんなもんか……）

決して鮮やかとは言い難い勝ち方だったが、一応俺の勝利だった。それを見てとって、ナキが俺に歩み寄ってくる。

その顔は、あいかわらずの無表情で、

「…もつとうまく戦って。心臓に悪い」

勝つてなお文句を言われる俺の立場ってどうなんだろう。

それからも敵が2体の場合はナキが魔法攻撃、1体になったら俺が接近戦、という具合に片付けていく。

そしてさらに数体の魔物を倒した時、俺はようやく思い出した。すっかり忘れていたが、『オーバードライブ』で敵に突っ込んだ時、レベルアップしていたのだ。

俺はナキに休憩を頼み、慌てて自分のステータス画面を確認した。レベルアップによる能力値の変化を見ると、こんな感じである。

【普賢 光一】

トラベラー

LV: 5 6

HP: 4 5 5 2

MP: 5

DP: 5 6

魔力: 7

理力: 0

強化: 1 4

耐久: 1 2

俊敏: 1 3

器用: 1 7

理法: 3

克己：21

操作：6

信心：1

BP：80 100

HPが魔力の数値である7だけ上がり、理力が0なせいでMPは変化なし。DPはどうやらレベルと完全に連動して1ずつ上がるようだ。

そして他の能力値をチェックしてみて、トラベラーのクラスはB以外の能力が全く上がらないというのが確定した。

カスタマイズ性が高いと言っべきなのかもしれないが、正直一気にこんなにポイントを渡されても困ってしまう。

能力値を腐らせておくのはもったいないとは思っただが、ポイントの振り直しが出来ない以上、あまり下手な使い方は出来ない。

特に、これからの転職や戦闘スタイルまで見越した能力値の割り振りを考えると、ゲームにあまり慣れていない俺には荷が勝ちすぎる。

そういえば『ないとめあ の あるきかた 』には、トラベラーからは早く転職するべきだとか書いてあった気がするが、それはなぜだっただろうか。

こんなことなら『ないとめあ の あるきかた 』の『クラスについて』に書いてあった各職業の特徴をよく読んでおくんだっと思ったが、それこそ後の祭りだ。

とはいえ、初期値のままでは流石にこれからの探索に支障が出るかもしれない。

まあ今の所は魔法系の能力は使い道がなく、素早さも『魔力機動』があるから当面は必要ない。

モンスター狩りの効率を上げるため、強化に30だけ振って、14から44まで上げた。

流石に能力値が3倍にもなると効果が出るのか、これにより、ブレイドラビットもグリーンウルフも一撃で倒せるようになった。

今なら、最初に出て来た魚人だって『オーバードライブ』なしで一撃かもしれない。

俺の攻撃力を上げたことで戦闘の効率を上げた俺たちは、途中何度か休憩をはさみながらも、黙々と巨木の根元を目指して進んで行く。

幸い出て来る敵はブレイドラビットとグリーンウルフのみで、2匹以上の群れとも遭遇しなかったので、戦闘は楽勝だった。

たまに蛇行したり行き止まりに突き当たって戻ったり休憩したりしながらも順調に進み続け、目的地と定めていた巨木の近くまでたどり着いたのは、最初に歩き始めてから2時間くらいが経った頃だっただろうか。

いい加減パターン化した戦闘と会話のない道中に疲れ始めていた時、遠くに見えていたはずの巨木が存外近くにあることに気付いた。

最後の道程を小走りで駆け抜け、一気に開けた場所に出た。

とうとう巨木本体が見えて、心の中で快哉を上げる。

つつい木根の根元まで走り寄ろうとした俺を止めたのは、ナキの

鋭い制止だった。

「…まって」

俺はナキの緊張を訝しみながらも巨木の根元に目をやって、ナキと同じように目を細めた。

「ひと…?」

そこには俺たちと同年代と思われる数人の少年少女が、こちらを値踏みするような目で見ながら待ち構えていた。

『クラスについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！ 悪夢の世界の赤ペン先生、ペイモン様だ！」

ア「はろー、とれべらーず！ みんなのパスカット！ アスタナちゃんだよー！」

ペ「もはや意味分かんねえし！ カットしちゃダメだし！」

ア「きょーは『くらす』について教えてくれるんだよねー！」

ペ「ま、まあな！ オレ様にかかれば、クラスの説明なんてちょちよいのちよいだぜ！」

ア「わーい、たのもしー！ それで、『くらす』ってなんなのー？ 『せいばー』とか『きやすたー』とか『ばーさーかー』とかのとー？」

ペ「まあ間違つてると言い難いが、オマエのイメージは間違つてると断言できる！」

クラスっていうのは、いわゆるゲームで言う職業のことだ。

自分に合ったクラスを見つけることが、このナイトメアを生き抜くコツの一つだな」

ア「『くらす』がかわるとなにかかわるのー？」

ペ「クラスを選ぶ上で重要な要素は三つあってな。

『成長値とクラススキル、それから継承率の違いがクラスの性能

の差』だって言われてる」

ア「せつつめい！　せつつめい！」

ペ「一番分かりやすいのは成長値だな。

『成長値っていうのは、その職業でレベルが上がった時に上がる能力値のこと』だ」

ア「『しよくぎょう』によって『のうりよくち』のあがりかたがちがうのー？」

ペ「その通りだぜ！

例えば、これが物理系の基本職、戦士の成長値だ」

【戦士・成長値】

魔力	：3
理力	：1
強化	：3
耐久	：3
俊敏	：2
器用	：2
理法	：1
克己	：2
操作	：1
信心	：1
BP	：1
総合	：20

ア「？ 『まりよく』とか『きょうか』はまえにおしえてもらったけど、『BP』とか『総合（かんじがよめない）』ってなにー？」

ペ「BPっていうのはボーナスポイント。魔力でも強化でも、自分の好きなところに割り振れるポイントだ。

総合っていうのは、BPを含めた成長値の合計だな。

これが高いクラスほど上級職だって言われてるな」

ア「あ、『そーごーりよく』ってやつだね。アスタナわかるよー！」

ペ「次はこっちを見てくれ」

【魔法使い・成長値】

魔力	：1
理力	：3
強化	：1
耐久	：1
俊敏	：1
器用	：2
理法	：3
克己	：2
操作	：2
信心	：3
BP	：1
総合	：20

ア「あれー？ 『BP』と『総合』はおなじなのに、ほかがぜんぜんちがうよー！」

ペ「こんな風に、それぞれのクラスには成長値に特徴があるから、自分のスタイルにあった職業を選ばないとうまく活躍できないんだ」

ア「『のーきんやろー』が『まほーつかい』になってもしょーがないもんねー！」

ペ「オマエ……。そ、それにクラススキルって奴もある。

この『クラススキル』はその職業になっている間だけ使える特別なスキル』なんだ。

例えば戦士のクラススキルは、戦士のレベルに応じて攻撃力と防御力を上げるパッシブスキルだな」

ア「じゃー『せんし』になっただけでこうげきりよくとぼうぎりよくが上がるんだね、これはおとくだよー！」

ペ「まーここまでは普通のゲームと同じだな。

ただ、最後の継承率っていうのはちよつと複雑だからちゃんと理解しろよ」

ア「ふっふーん！ アスタナにりかいできないものなんてないよ！」

ペ「数えきれないほどあつたけどなー！」

はぁ。とりあえず、知っておかなくちゃいけないことは、『レベル』っていうのはクラスごとの物だから、新しいクラスに転職すると、レベルが戻る』ってことかな」

ア「なるほどー。『つよくてにゅーくらす』だねー！」

ペ「いや、それがそうとも限らないんだ。

なにしろ、『クラスを変えてレベルが戻ると、能力値も基本能力値まで戻ってしまう』からな！」

ア「え、ええー！　じゃあいままでほかの『くらす』で上げた『のうりよくち』はぜんぶ『むだ』になっちゃうのー！？」

ペ「いや、もちろん元のクラスに転職し直せば前のレベルと能力値が戻ってくるし、他のクラスに転職しても必ずしも全てが無駄になる訳じゃない。

つまり、そこで出て来るのが継承率なんだ。

なんと、『転職する時に継承率の割合だけ、そのクラスで鍛えた能力値を基本能力値にプラスできる』んだよ」

ア「ど、どゆことー！？」

ペ「じゃあもつと正確に説明するぜ。

本来ならそのクラス以外では使えない、そのクラスになってから増えた能力値をクラス増加値って呼ぶんだが、転職する時は継承率の割合だけ、クラス増加値を基本能力値に変換できるんだ」

ア「？？　ま、ますますわかんなくなつたよう……」

ペ「だから、例えば戦士でがんばってレベル上げて、強化を50上げたとするよな。

この時の強化のクラス増加値は50。

戦士の継承率は20%だから、この場合50の20%、つまり1

0だけが基本能力値にプラスされるってことになる」

ア「も、もっとわかりやすく！」

ペ「だから、継承率の分だけ元のクラスでの能力値を次のクラスに持つて行けるってことだよ！」

ア「な、なるほどー。ふ、ふいんきはわかった」

ペ「これだけ説明して雰囲気だけかよ！」

はぁ。とにかく、『即戦力が欲しいなら成長値が、確実に成長したいなら継承率が、それぞれ重要』なんだ」

ア「ふ、ふーん。『けいしょーりつ』ってだいたいどれくらいなのー？」

ペ「戦士とか魔法使いとかの基本職は一律で20%だな。

上級職はまちまちで、下は5%から上は100%まで色々あるぞ。……おっと忘れてた。基本職は一律20%と言ったが、一番の基本クラスであるトラベラーの継承率は、なんと0%なんだ」

ア「そ、それって、とらべらーでいくられべる上げしても、『てんしょく』したら『のうりよくち』がほんとーにぜんぶ『むだ』になっちゃうってことー？」

ペ「そういうことになるな。」

トラベラーは成長が自由だから使いやすいが、他のクラスを見つけたら絶対にすぐ転職した方がいいぜ！」

ア「うわー。じゃーとらべらーのまま『こつれべる』とかになった

ら『さいあく』だねー!」

ペ「やめろって、もし高レベルトラベラーが読んでたらどうするんだよ!

トラベラーなんて、上位クラスがあるかも分からない隠れ地雷職なんだぞ!」

ア「あれ? 『じょういくらす』ってなに?」

ペ「あ、そついや言っただけだったか。

実は、継承できなかったクラス増加値は無駄になるのが普通だが、唯一例外があるんだ。

それが、その職業の上位クラスに転職することだ」

ア「ええと……そつすると、どうなるの?」

ペ「例えば『剣士』の上が『剣豪』、『僧侶』の上が『司祭』といったように、クラスにはそれぞれのクラスをパワーアップさせたようなクラスが存在することがあって、それを上位クラスって呼ぶんだが、『上位クラスは対応する下位クラスのクラス増加値やクラススキルをそのまま使える』んだ」

ア「じゃ、じゃあ『けんし』でつよくなったあと『けんごう』になれば、『つよくてにゅーくらす』ができるってことー?」

ペ「その通り! だから、特別な理由がない限り、中盤以降は上位クラスを見つけたら転職、ってスタイルが流行っているみたいだな」

ア「ふーん。あ、そうだ! 『しょくぎょう』をてにいれたり、『てんしょく』したりってどうやるの?」

ペ「『能力値一定以上とか、レベル一定以上とか、クラスごとに設定された条件を満たすと自然とクラスは獲得できる』ぜ。

そうやってクラスを獲得したら、『ステータス画面から転職が可能』だ。

ただし、『一度転職をするとそれから12時間はクラスを変えられない』から、それだけ注意だな」

ア「じゃあいちどの『ぼーけん』で『しょくぎょう』がかえられるのは、だいたいいいちどきりってことだね」

ペ「逆に一度は変えられる訳だから、最初はMP消費の多い魔法使用で探索して、MPが切れたら戦士で肉弾戦、なんてこともできないことはないな。

その辺りはオマエらで適当に工夫しろよな」

ア「あ、もしかしてそろそろ『まき』にはいつてる？」

ペ「オマエ、何でそういう微妙な言葉だけはよく知ってるんだ？
とにかく、今回の復習はこんな感じだ！」

『成長値とクラススキル、それから継承率の違いがクラスの性能の差』

『クラススキルはその職業になっっている間だけ使える特別なスキル』
『レベルっていうのはクラスごとの物だから、新しいクラスに転職すると、レベルが戻る』

『クラスを変えてレベルが戻ると、能力値も基本能力値まで戻ってしまう』

『転職する時に継承率の割合だけ、そのクラスで鍛えた能力値を基

本能力値にプラスできる』

『即戦力が欲しいなら成長値が、確実に成長したいなら継承率が、それぞれ重要』

『上位クラスは対応する下位クラスのクラス増加値やクラススキルをそのまま使える』

『能力値一定以上とか、レベルが一定以上とか、クラスごとに設定された条件を満たすと自然とクラスは獲得できる』

『ステータス画面から転職が可能』

『一度転職をするとそれから12時間はクラスを変えられない』

ペ「ま、クラス選びつてのはこういうゲームの醍醐味って奴だし、それはこの世界でも変わんねえ。

しっかり悩んで、自分に合ったクラスを見つけるんだな」

ア「と、いうわけで、またじかいまで……」

ペ・ア「グッナイ、トラベラーズ！ 良い悪夢を！！」

13・旅の仲間

『あの日』よりも三週間くらい前の夜。

『そういえば、前にリーダーやってるって言ってたよな』

『うーん、まあ別にそういう役職がある訳じゃないんだけどね』

そう言っただけは深夜の月を眺めて、まるで月明かりが眩しいみたいに眼を細めて話を始めた。

『チームの仲間はみんなわたしにはもったいないくらいいい人たちだから、リーダーの仕事なんて全然ないし。』

それに……うん、大体みんな、わたしより真剣っていうか、向こうの世界で生きてる人たちが多いから、逆に一番冷静なわたしが、ストッパーになってるって所はあるのかな？』

『向こうの世界で生きてるって？』

俺の言葉に、縁はちよつとだけ悲しそうに口角を上げた。

『……なんというか、わたしはね。』

朝起きて光一と会って、帰ってきたんだなって思うし、こうやって光一と話していると、やっぱりこっちがわたしの世界、というか、自分の家に戻ってきたような気がするんだ。

でも、仲間の中には夢を見ている時にそんな風に思う人もいるみたい』

『夢の世界が、本当の世界だ、って？』

それは一体どういう感覚なんだろうか……。

『本当っていう言い方が正しいのかは分からないけど……。』

夢の世界の方が、生きてるって感じがするんじゃないかな？
ある意味で、命のやり取りしてる訳だしさ』

『命のやり取りって……』

そんなの所詮、ディスプレイ越しのことじゃないのか？

『だから、わたしにはみんなの気持ち、本当の意味では分からないのになって思う時もあるよ。』

でもだからこそ、わたしは仲間のために精一杯がんばりたいと思ってる』

『……そう、だな』

部外者でしかない俺には、そう言うしかなかった。

『とにかく、ね！』

暗い雰囲気嫌ったのか、縁はわざとはしゃいだような声を出した。

『仲間っていうのは一番大事なものだと思う！ だから光一も出来た仲間大切にすること！』

それと、わたしをそれ以上に大切にすること！』

『なんか、すごい場所に落ち着いたな……』

俺は頑張って呆れの表情を作りつつ、内心は縁の言葉に救われたような気持ちを感じていた。

大樹の根元にいる少年たちを観察する。
人数は、男三人に女二人、合計で五人。
見た所、顔立ちは日本人的に見えるが、男の一人が赤い髪、女の一人が金髪になっている。

武器は構えていないが、持っていない訳ではないようだ。
腰につけていたり、背中に背負っていたり、さりげなく左手に持っていたり、それぞれが何か武器らしき物を身に着けている。
こちらを見る視線は、若干不躰な感はあるが、あっても険悪ではなかった。
警戒の色は見えるが、どちらかというと興味が勝っているような……。

と、その微妙なにらみ合いは、赤髪の少年の素っ頓狂な叫び声によつて唐突に終わりを告げた。

「おー！ すっげすっげえ！！」

エルフじゃん！！ おれ初めて見たよ！！」
無遠慮な台詞にちらりと横を見る。

ナキは、特に気にした様子はないようだ。

俺が胸を撫で下ろしていると、
「馬鹿ね。髪が銀色だからハイエルフでしょ？」

第一この世界ではどんな姿だって自由なんだから、関係ないわよ」
眼鏡をかけた少女が、赤髪の少年の言葉を軽くあしらう。

「バツカ、オマエ……生エルフだぞ、生エルフ！
これぞファンタジー、って感じじゃねえか！
もつと感動とかないのかよ！」

「一緒にしないで！ 馬鹿はあなたでしょう？！
全く、エルフよりモンスターの方がよっぽどファンタジーじゃない」

俺たちをそっちのけで口論を始める二人。
喧嘩するのは構わないが、本人を目の前にして言うような台詞ではないだろう。

「……ナキ、大丈夫か？」

俺は心配になって小声でナキに話しかけるが、
「……隙、見せないで」

ナキは全く揺るぎもせず、ただ前を見ていた。

「分かった」

俺よりずっと冷静だ。この様子なら問題ないだろう。
心置きなく俺は前に向き直った。

そこで頃合と見たのか、黒髪の柔和な顔立ちをした少年が一步前に出た。

「ああ、すみません、驚かせてしまったみたいですね。

……ええと、君たちは僕らと同様、現実世界からこの世界に迷い込んでしまった『トラベラー』ということではないんですよね？」

どうやら彼が一番まともに話が出来そうだ。

ちなみにあと二人、一度も口を開いていないやる気のなさそうな少年と金髪の少女がいたが、少年の方はどこか斜に構えた様子でこ

ちらを観察しているだけだし、少女は前に出た少年の陰からこちらを見て、警戒心も露わにうーっと唸っている。

よく見ると、少女が左手に持っているのは弓だ。あれは完全に戦闘態勢だろう。

……絶対に話は出来そうにない。

さて、トラベラーという言葉を使っているということは、彼らも俺たちと同じ状況なのだろう。

ここはどうするべきか。

俺がもう一度、ちらりと横を見ると、

「……まかせる」

ナキが前を向いたまま俺にゴーサインを出した。

交渉に応じるという意味合いも込めて、一歩前に出る。

「ああ。ということはそつちも？」

俺の相槌に、やわらかい雰囲気少年は、嬉しそうにうなずいた。
「はい。ここにいる五人全員が、日本から飛ばされた『トラベラー』なんです。」

それぞれお互いに面識はなかったですし、森の別々の場所に飛ばされていたみたいなんですけど、みんなこの大きな木を目印に歩いてきて、こうして合流することが出来たんです」

「……なるほど」

俺たちもそうだったが、あの進むべき指針が何もない森の中では、この巨木を目印にして進んでくるしか選択肢がない。

そうになると、俺たちのように森の中に飛ばされた人間は全てここに集まってくるというのは当然の帰結だ。

「じゃああなたたちは、ここで俺たちみたいな奴らを待ってたってことか？」

「あ、はい。色々調べてみたんですが、パーティの設定可能人数が最大8人みたいなんです。」

だから5人では少し心許ないですし、他にも僕らと同じような境遇の方がいたらと思って、ここで待ってました」

そこで、皆さんが来てくれて良かったです、と彼はさわやかな笑顔を見せた。

しかしそんな彼の笑顔をぶち壊すくらい鮮やかに、赤髪の少年が口を出した。

「なあソーヤ！」

こっただけ集まったんだから、そろそろいいだろ？

さっさと村に戻ろうぜ？」

ソーヤと呼ばれた少年の笑顔が、ひきつって固まった。いつそ尊敬出来るくらいの空気の読みなさだった。

しかし、彼の爽やかか力も負けてはいない。

「……と、いう訳なんですが、どうでしょう。」

この近くに村があるんです。

色々と情報収集も出来ますし、一緒に行きませんか？」
さらりと会話に組み込んだ。

「この場所を張ってなくていいのか？」

「ええ。7人もいれば、十分でしょう。」

それに、村の場所も分かりにくいという訳ではありませんから、ここに辿り着いた人なら自然と見つけると思います」

「なるほどね」

少し安心した。

それなら、誰がいなくても、ここに来た人が途方に暮れるってことにもならなそうだ。

「でも、その前に自己紹介ですね。

どうでしょう？ 自己紹介がてら、互いのステータスを見せ合う
というのは」

「そうだな。いいんじゃないか？」

別に見られて困るような物もない。

俺は気楽にうなずいた。

実際妥当な所だろう。

ステータス画面は開示設定にすれば他人にも見せることが出来る。
そして、それを見せれば名前なんかも載っているから、偽名を名
乗ったりなんてことも出来なくなる。

何よりパーティを組むなら相手の能力値までは自由に閲覧出来る
ようになるのだから、秘匿する意味もない。

「おつ！ いいねいいね！ おれのステータス見るか？」

「まあ、仲間になるっていうなら……仕方ないわね」

「へえ。楽しみだな」

「奏也様がそう言うなら……」

向こうの人たちも、一部不満そうな人もいるようだが、一応全員
が賛意を示した。

当然俺もOK。

しかし、

「…なら、私は抜ける」

一人、俺の隣にいた気難しい奴を忘れていた。

「お、おい、ナキ？」

俺が慌てて制止しようとするが、もう遅い。

「…さよなら」

ナキは躊躇いもせず踵を返して、森に戻ってしまった。

「何？ 何なのよ……」

「さっすがハイエルフ。プライドだけー」

呆然とする少年たち。

呆然とする俺。

って、呆けている場合じゃない。

「悪い！　すぐ連れ戻してくるから！」

俺は慌ててナキの後を追った。

また追いかけっこが始まるかと思ったが、案に相違して、ナキはすぐ近くで俺を待っていた。

「…おそい」

しかも、怒られた。
すごい理不尽だ。

俺が近付くと、逃げ出したことに対して何の弁解もせず、何の説
明もなしで、

「…みて」

ナキは自分のステータス画面を開いた。

【四方坂 ナキ】

魔女

L V : 7

H P : 4 9 3

M P : 3 5 8

D P : 7 3 2 9

魔力 : 6 9

理力 : 1 0 1

強化 : 1 4

耐久 : 1 2

俊敏 : 2 3

器用 : 2 6

理法 : 8 1

克己 : 5 1

操作 : 4 6

信心 : 6

B P : 6

ナキのステータスを見て、俺はしばし言葉を失った。
……なんというか、あれ？
もしかして俺って、ものすごく弱い？

「……そっちな」

愕然としている所にそう促されて、俺は特に考えることなくステータス画面を開いた。

【普賢 光一】

トラベラー

LV：6

HP：52

MP：5

DP：6

魔力：7

理力：0

強化：44

耐久：12

俊敏：13

器用：17

理法：3

克己：21

操作：6

信心：1

BP：70

「…ダメ。減点1」

そしたらいきなりダメ出しをされた。

やっぱり俺、そんなに弱いのか？

というかいつから減点方式の採点が始まったんだ？

俺が力なく顔をあげると、ナキは見て分かるほど険しい顔をしていた。

「…ステータスは、軽々しく他人に見せてはいけない」

お前が見せろって言ったのか！

と反射的にツツコミを入れそうになったが、堪えた。

ナキは心構えのことを言っているんだろう。

ただしそれ以上の説明を加えることなく、ナキは俺のステータス画面をじっと見ていた。

そんなはずはないのだが、ステータス画面を通して心の奥底まで覗かれている気がして、なんとなく居心地が悪くなる。

やがて、ナキは画面から顔を外してこちらを見て、

「あなたは意志が強く、どちらかというと外向的な性格で、オカルト全般に強い忌避感を持っている。

想像力に乏しく、頭の回転も特段速いとは言えないが、いざとい

う時は自分を律することができる」

占いみたいなことを言ってくる。

というか、地味に今までで一番の長台詞じゃないだろうか。

「もしかしてそれ、能力値から分かったことか？」

「…半分は適当。いっしょに歩いていれば、それなりにはわかる」

まあ、そんなものか。

確か初期能力値は性格に左右されると『ないとめあ　　の　　ある
きかた　』に書いてあった。

そこを逆に辿れば、初期能力値から性格だって想像出来るはずだ。

一応推測すると、魔法系より物理系が強かったために意志が強く、
外向的。

魔法系が弱いんだから当然想像力は貧困で、オカルト全般に強い
忌避感つてのはたぶんそれに加えて信心が1な所を考慮したんだろ
う。

頭の回転は俊敏で、自分を律するというのは克己が頭一つ抜けて
高いせいか。

当たっているような、当たっていないような。

とりあえず血液型占いよりは信用出来そうかな、という程度だ。

ちなみにその線で行くと、ナキは、

『凄まじいオカルト大好きっ娘で非常に内向的な性格でありながら
オカルト全般に強い忌避感を持っていて、頭の回転は速めでいざと

いう時でなくても自分を律することができる』

という感じだろうか？

……意味が分からない。完全に人格破綻者だ。

「……能力値で性格が確実にわかる訳じゃない。

でも、DPが高すぎる人間と、信心が低すぎる人間には、注意して」

そんな俺に釘を刺すように、ナキはそんなことを言う。

そして、信心が低すぎるのは俺もあてはまるんだが……。

あ、でもDPが低いから大丈夫なのか？

とにかく、初期ステータスで性格とかも分かるから他人に見せるな、とナキは言いたかったのだろうか。

しかし今回は仕方ないだろう。

パーティを組めるのはやっぱり魅力だ。

そんな風に俺が思っていると、

「……でも、今回は、しかたない。仲間が必要」

ナキが全く同じことを口にした。

以心伝心だ。

いや、ちよつと違うか。

「……でも、私は見せないし、見ない」

「それって、さっきと言ってることが違わないか？」

俺はたまらずにくちばしを挟んだ。

仲間が必要なんじゃないかったのか？

するとナキは、例の居心地が悪くなる視線で俺を見た。

「…多分、私の理術は、ひとより強い。信用できるまで、隠しておきたい」

「そうなのか？」

俺が特別弱いのかと思ってた。

俺の答えに、ナキの瞳の温度がさらに下がった。

「トラベラーの初期レベルは1、能力値の平均は1.2程度。本にあった」

「そ、そうだったか？」

俺は全然覚えていない。

中盤からかなりぼんやりしてたからなあ……。

なんて思っていたら、

「…あの本、どこで見つけたの？」

話がいきなり飛んだ。

「え？ あ、ああ。『ないとめあ の あるきかた 』のことか？ あれは、妹が俺の部屋で見つけたって言ってた。

あんな物を買った覚えなんてなかったんだが、知らない内に、だな……」

予想もしない所を攻められて、俺は動揺しながら答えた。

なんと説明したものか。自分でも把握していないので判断に困る。

俺のしどろもどろな説明を聞いて何を思ったか、

「…あれは、私が貸したもの」

「は？」

「…そういうことにして」

勝手にそんなことを言っつて、元いた場所の方へ歩き出してしまっつ。

話の展開が早すぎてついていけない。

何度でも言おう。

まったくもって、意味が分からない。

すると、いつまでもついて来ない俺を訝しげに見つめて、

「…もどらないの？」

なんて聞いてくる。

そりゃもちろん戻る。

戻るんだが、

「その前に、一ついいか？」

その前に言っておくことがあった。

「…なに？」

あいかわらず感情を感じさせない声で、でもとりあえず歩みは止めてくれる。

ちよつと恥ずかしい台詞だが、こういうことはちゃんと伝えておかないといけない。

俺は照れくさい気持ちを表情に出さないようにしながら、口を開いた。

「ナキは俺がステータスを見せた時、減点1つて言ったが、それは違うんじゃないか？」

見せちゃいけないのは信用出来ない相手にであって、ナキは……」

「……やめて」

だが、ナキはそんな俺の言葉を不愉快そうに遮った。

「……減点10。あなたには何も伝わってない」

ケタが跳ね上がった！！

なんてはしゃいでる場合ではなかった。

呆れや不快を超えて、敵意すらこもった目でナキは俺を見る。

そして、

「……私を一番、信用しないで」

そんな言葉を言い捨てて、ナキは今度こそ振り返りもせず、大樹の方へ歩いていってしまった。

残された俺は、こうつぶやくしかない。

「まったくもって、意味が分からない」

一人でもこんなに苦労しているのに、たくさんの仲間なんかと一緒にやっていけるのだろうか。

そんなことを思いながらも、俺はナキを追いかけた。

ナキと合流し、巨木の下に戻ると、ナキ以外の6人で自己紹介をすることになった。

「じゃあまず僕から行きますね」

一番手は、今までずっと俺と話していた少年だった。
よどみなくデータウォッチを操作して、ステータス画面を出した。

【三島 奏也】

吟遊詩人

LV：3

HP：70

MP：36

DP：132

魔力：20

理力：21

強化：14

耐久：18

俊敏：17

器用：29

理法：15

克己：9

操作：30

信心：5

BP：2

物理系とも魔法系ともつかない、器用と操作が高いという、珍しい感じの能力値だった。

信心と克己が低いのがちょっと気にかかる。

DPは……判断材料が俺とナキしいので、高いのか低いのか分からない。

「見て分かるでしょうけど、一応。

みしま そひや三島奏也、高校二年生、吟遊詩人なんてクラスをやってます。

ユニークスキルは演奏系で、モンスターの動きを止める曲が弾けます。

他のスキルも演奏関係が多くて戦闘にはあんまり役には立ちませんが、補助スキルなら任せて下さい」

そう締めくくり、礼儀正しく頭を下げる。

「じゃ、次はもちろんおれだよな！」

そう言って前に出たのは、赤い髪の少年だ。

自慢げに自分のデータウォッチをいじると、ステータス画面を開いた。

【穂村 陽介】

剣士

LV : 2

HP : 38

MP : 16

DP : 42

魔力 : 14

理力 : 11

強化 : 19

耐久 : 11

俊敏 : 18

器用 : 12

理法 : 8

克己 : 4

操作 : 5

信心 : 19

BP : 1

さつきの奏也に比べると、能力値は若干低めか。

ただ、明らかな物理系で、戦闘系の能力はそれなりの値を誇っている。

「おれの名前は穂村陽介^{ほむらようすけ}！

新東京第一高校の二年生。

見ての通り剣士でユニークスキルは『炎の剣』！」

「いかにもありきたりなスキルね」

「ちよっ！ てめえ……ああ、とにかく、バリバリの前衛キャラ！

剣つてのはやっぱり男のロマンだよな！」

途中、眼鏡の少女からの横槍が入ったが、それで彼の自己紹介は終わった。

「ならばわたしが行くわね」

今度は赤髪の少年、穂村に何度も茶々を入れていた眼鏡の少女がステータス画面を開く。

【七瀬　こずえ】

槍戦士

LV：4

HP：174

MP：54

DP：204

魔力：41

理力：27

強化：32

耐久：32

俊敏：25

器用：19

理法：26

克己：30

操作：16

信心：32

どちらかというと物理系寄りの能力値のようだが、総合的に全ての能力値が高い。

さっきの二人と比べると頭二つくらい抜けている印象か。
合計値なら、あるいはナキにも匹敵するかもしれない。

「七瀬ななせこずえ。高校二年生。

得意武器は槍。接近戦主体のクラスだけど、理術スキルも一応使えるわ」

「威力は弱いけどなー！」

「うるさいわね、馬鹿はちょっと黙ってなさい！」

あんまり協調性のない行動は好きじゃないからそこにいるハイエルフの子みたいなのは気に入らないけど、まあこんな世界だしね。
能天気にもみんなで協力、とか言えないのは心情的には理解は出来るわ。

まあ、よろしく」

内容の八割は文句ではあるが、ナキに言及したのは彼女が初めてだ。

俺はちよつとだけ、彼女に好感を持った。

四人目、金髪の少女は、まとめ役の少年、奏也にうながされて渋々といった様子で前に出て来た。

不慣れな様子で操作されたデータウォッチによって、ステータス画面が空に投影される。

弓使い

LV：1

HP：28

MP：18

DP：22

魔力：18

理力：13

強化：18

耐久：4

俊敏：12

器用：16

理法：11

克己：2

操作：1

信心：19

BP：0

レベルが1のせいか、かなり弱い。

特に耐久の4は脅威の低さだ。

初めて俺と対等の力の奴を見た気がした。

「つきがけりっ月掛立。高校一年。

トラベラーから転職したばっかだからレベルは低いけど、奏也様に楯突いたら弓でやつつけてやるから！」

何とも分かりやすい言葉で彼女は自己紹介を終える。

最後は、

「あ？ まだ残ってんの、オレだけ？」

今まであまりしゃべらなかった、もう一人の黒髪の少年がステータス画面を呼び出した。

【四ツ木 明人】

スカウト

LV：3

HP：55

MP：15

DP：110

魔力：15

理力：7

強化：61

耐久：15

俊敏：44

器用：35

理法：6

克己：13

操作：6

信心：4

BP：2

意外と言ったかなんとというか、偏りはあるがかなりの強さだった。

能力値の傾向は若干俺と似ているが、ポイントの高さにはかなりの差がある。

特に、ボーナスポイントを使った俺よりも強化が強いつてのはどういうことだろう。

そして、DPが高めで信心が低い。

こいつは要警戒か？

そんな俺の視線にも気付かず、自己紹介を始める。

「オレは四ツ木明人。^{よつぎ あきと}

この世界って、なかなか面白いよな。

今は何が出来るかお試し中だけど、色々分かったらオマエらにも教えてやるよ」

口を開かなければ分からなかったが、どうやらかなり傲岸不遜な性格らしい。

ただまあ、邪気がない感じであまり憎めないのが救いか。

これで相手側5人全員の紹介が終わった。

正直あまり人の名前を覚えるのは得意ではないので覚えきれた気はしないが、付き合いが長くなれば自然と覚えていくだろう。

「それじゃ、次はこっちの紹介か。

あ、まず向こうにいるのは、四方坂ナキ。^{よもぎ なき}

俺と同じ高校の二年生、というか、実はクラスメイトなんだ」

まずは、少し離れた所で悠然とたたずんでいるナキを紹介する。自分から名乗るような性格でもないから、これくらいは言っただけでもいいだろう。

へえー、とか、クラスメイトなんだ、なんて相槌に適当にうなず

き返しながら、データウォッチを操作する。

さつきナキに見せたばかりだが、もう一度ステータス画面を開く。

【普賢 光一】

トラベラー

LV：6

HP：52

MP：5

DP：6

魔力：7

理力：0

強化：44

耐久：12

俊敏：13

器用：17

理法：3

克己：21

操作：6

信心：1

BP：70

「普賢^{ふげんこういち}光一、高校二年生。

職業はまだトラベラー。

強化だけ高いのはボーナスポイント振ったからで、本当は14し

「かなかった」

ステータス画面を開きながら、俺はそんな風に名乗った。

ちよつと少なめの能力値であるが、そう恥じるほどの値でもないはずだ。

俺はそう思っていたのだが、俺のステータスを見た5人はちよつとしよっぱい顔をしていた。

中でも赤髪……確か穂村、が、俺に寄って来るといきなり肩を組んできた。

「なあ、お前さ。ユニークスキル、しよばいだろ？」

「はあ？」

しかも、内容もかなり唐突かつ失礼だった。

「いや、だつてさ。お前のスキル、DP消費いくつだ？」

「1、だったと思うが……」

それ以上使うと射程が変化、だったはずだ。

俺の返答を聞くと、

「あー！ お前、終わったな！」

穂村が大げさな身振りで天を仰いだ。

流石にちよつと不愉快になる。

そんな気配を微塵も察知せずに、穂村は自慢げに説明した。

「ユニークスキルつてのは、DP消費が高いほど強いんだよ。

DPはユニークスキルのエネルギー源だからな。

そりゃあ多いほど強いってのは分かるだろ？」

「なるほど……」

ここは怒る場面かもしれないが、納得出来てしまった。

そこで例によって、眼鏡の少女……ああそう、七瀬が横

槍を入れてくる。

「あんたのD P、この中じゃ二番目に低いけどね」

「う、うるせーな！ おれの炎の剣は低燃費なんだよ！」

「さっきと言ってること違うじゃない。」

ああ、普賢君、だっけ？ こいつの言うことは気にしなくてもいいから」

一応その程度の常識はあるのか、七瀬の方がそうフォローをしてくれた。

「ただ……」

と思ったのが一転、七瀬は眼鏡を光らせる。

「トラベラーのまま、レベル6まで上げちゃったのはもったいないわね。」

データウォッチのヘルプでトラベラーの継承率見たけど、0%よ、0%！

あ、ちなみに継承率っていうのは転職した時に持越し出来る能力値の割合なんだけど、分かるわよね？

とにかくそういうことだから、レベルが2に上がった時点で早く転職すべきだったわね」

助けてくれたと思ったら、出て来たのは結局苦言だった。

それにしても、トラベラーは継承率0%か、そういえばすっかり忘れていた。

釣られたのか、困ったような顔をして奏也も口を開く。

「能力値を見ましたけど……特に低いという訳でもないのに、微妙にクラス獲得条件を外れてますね」

「え、クラスの獲得条件なんて分かるのか？」

俺が聞くと、奏也と七瀬は親切に色々と教えてくれた。

何でもユニークスキルを決める時にクラス条件を満たしていれば、トラベラー以外からでもスタート出来ること。

一度クラスを獲得すると、データウォッチで調べること、そのクラスの獲得条件、成長値、継承率、クラススキルなんかが分かること。

継承率なんかの用語の説明も、データウォッチのヘルプを見れば載っているということも教えられた。

なまじ説明書なんかを持っていたせいで気付かなかった盲点という奴か。

俺が説明をしきりにうなずいて聞いていると、七瀬は、
「だから、トラベラーなんかでレベル6まで上げるとか、ありえないワケ！ 分かる？！」
と言つて締めくくつた。

そうは言つても……。

「俺、スタートした時既にレベル5だったんだよな。

あつちにいるナキの方も、レベル7だったし」

上げたレベルなんて1だけで、それもあまり苦労してレベル上げをした意識はない。

「何それ！？」

レベル5とか7からスタートなんて、そんなの聞いたことないわよ！

ここにいる他のみんなだって、全員レベル1スタートのはずよ？」
七瀬の言葉に、その場にいた全員がうなづく。

そういえば、ナキからもそんなことを聞いた気がする。

……じゃあ、どうということなんだ？

「ええと……」

助けを求めてナキを見るが、全く反応してくれなかった。

もしかすると、さっきナキのレベルをさらっと言ってしまったのを怒っているのだろうか。

少なくとも、助けしてくれる気はないようだ。

「もしかすると、普賢君と四方坂さんは特別なのかもしれませんね」

場をとりなすように奏也が言う。

特別……そうなんだろうか？

俺は首をひねる他ない。

「それより……」

そして微妙な空気になりかけた場を収めようと動いたのは、やはり奏也だった。

「これから、よろしくお願いします」

絶妙な間の取り方で、俺に手を差し出した。

「ああ、こちらこそよろしく！」

俺もためらいなく、その手を取った。

すると、

「じゃ、おれもっ！」

その手に穂村の手が重ねられて、

「仕方ないわね、わたしも」

さらに七瀬が、

「そ、奏也様に続きます！」

金髪少女の月掛が、

「オマエらこーゆーの好きだよな」

口の悪い四ツ木までがその手を重ねる。

みんな来ちゃいましたね、とばかりに目が合った奏也がにこっと笑う。

だが、まだだ。

「……ナキ！」

俺は手を重ねたまま、振り向いて彼女の名を呼んだ。

ナキはしばらく俺を見ていたが、やがていかにも面倒だというようにこちらに歩き出して、

「……はい」

指を一本だけ、俺の手にくっつけた。

「ちよつと、あんたねえ！　こんな時くらい空気を読んで……」

それを見た七瀬が肩を怒らせて叫びそうになるが、

「よ、よし！　これで全員だな……！」

俺が大声をあげて、とりあえずうやむやにする。

しかしそのせいで、なぜか俺が何かコメントするような雰囲気になっちゃった。

こんな時に頼れそうな奏也に視線を送るが、奏也はにこにここと笑うだけ。

俺は仕方なく、覚悟を決めた。

「と、とにかく、これも何かの縁だ。

この7人で力を合わせて、この世界を生き抜いていこう！

え、ええつと……えいえい、おー！」

苦し紛れの掛け声だったが、

「……えいえい、おー」「……」

一応みんな続いてくれて、一安心。

もちろん声はバラバラで、それをきっかけにまた穂村と七瀬が喧嘩を始めたが、それはまあいい。

俺以外のメンバーが6人いるはずだったのに、声が5人分しかないのはナキが裏切って無言を通したからだ、それもまあいい。

今はただ、この状況を素直に喜べばいいはずだ。

だって、そうだろう？

ここにいるのはまだ、お互いのことなんか何も知らない、ただここで行き会っただけの寄せ集めのメンバーだけど……。

もしかすると俺にも、『仲間』が出来たのかもしれないのだから。

13・旅の仲間（後書き）

キャラクターの能力値管理が面倒で泣きそうです。
ちゃんと職業成長値に従って成長させていくつもりですが、たまに
計算ミスがあっても許して下さい。

『イベントについて』

ペ「ハロー、トラベラーズ！ 悪夢の水先案内人、ペイモン様だぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！ みんなのバスケット！ アスタナちゃんだよー！」

ペ「カゴになっちゃったよ！」

ア「あー！ ちがわないけどちがうよー！ バスケットはバスケットでも、『きゅーぎ』のほう！」

ペイモン先生、バスケがしたいです、とかのほう！

『いまふー』にいうなら、『^{ろーきゅーぶ}籠球部』ってやつだよー！」

ペ「むしろ古くねその言い方！ あと何で部をつけた！？ 籠球だけだよーね！？」

ア「…ふっ」

ペ「アスタナに、鼻で笑われた、だとっ！？」

ア「アスタナにおいつきたかったら、あと十年は『しゅぎょー』して、おととい来ることだね？」

ペ「物理的に不可能なこと言われたっ！？」

ア「??？」

ペ「しかも本人が分かってない！！　ああ、もういい！　今日の議題は『イベント』について！

こいつも結構特殊だから、ちゃんと覚えるんだぞ！」

ア「よーチエックや！」

ペ「なんかうぜえなこいつ！

いいか？　ナイトメアの世界で言う『イベント』っていうのは成功条件を達成すると報酬がもらえる、ちょっとしたトライアルみたいな物』だと思っていりゃあいいんだが、これにも種類があつて、『ナイトメアイベントとカスタムイベントの二種類に分けられる』んだ」

ア「な、ないとめあいべんと？」

ペ「まあ名前の通りだ。『ナイトメアイベント』は、ナイトメアの世界が自動生成するイベントで、イベント達成の報酬とイベントの難易度が釣り合っているのが特徴』だな」

ア「じ、じどーせーせー？　だ、だれがつくってるのー？」

ペ「これについてじゃあ諸説あるが、基本的にはナイトメアにいる人間の願望だの想像だのが集まって作られているって考えられてる。

だから、『ナイトメアにいる人間の考えを反映したような物が起きやすい』傾向はあるって言うな」

ア「ど、どゆことー？」

ペ「モンスターが世界の各地に出て、みんなが、あー、モンスターをばばっとやっつける武器なんかが欲しいなーとか思えば武器探索

系のイベントがよく出て来るし、逆に、あー、このままじゃモンスターに町が滅ばされちゃうよーとか思えばモンスター襲撃系のイベントがたくさん生まれる、って感じかな」

ア「ほーほーなるほどー」

ペ「他にも少人数でも思いが強ければ、イベントは発生しやすくなるぜ。

例えば、全滅しそうなパーティがいて、そいつらが全員助かりたいて強く願えば、近くにいたパーティに、そのパーティの救助イベントが発生する可能性はある」

ア「ぎゃくに、おれたちもーダメだーっておもったら、『モンスターしゅーげきいべんと』がはっせーしたり？」

ペ「そうだけど……。オマエ、たまにえぐいこと言うな」

ア「…えへへ」

ペ「褒めてないぞ？」

ア「…でへへ」

ペ「何でさらに照れた！？ ま、まあいい。

さらに、『ナイトメアイベントをクリアして獲得したウィルは、レベルアップに関係する』から、積極的に受けた方がお得だぜ？

洞窟に入れば洞窟のボスの討伐イベントが発生する、みたいに、『ナイトメアイベントは条件を満たすと勝手にウィンドウが開いて開始を報せる』から、それを見て色々判断するんだな」

ア「おっけー！」

ペ「次にカスタムイベントだが、『カスタムイベントっていうのは、人が自分で作ったイベントのこと』を言うんだ」

ア「い、いべんとってつくれるのー？」

ペ「ああ。別に難しくはないぞ。

『データウォッチのイベントからイベント作成を選んで、条件を設定するだけでカスタムイベントは作れる』んだ。

あとはそれを他人に提示して引き受けてもらっただけだな」

ア「あ、アスタナにもできるー？」

ペ「もちろん。ただ、イベントを作る上で気を付けないといけないのは、そこで『設定した報酬やペナルティは、自動で譲渡・回収される』ってことかな。

例えばゴブリンの素材が欲しくてポジションを報酬にイベントを作ったとして。

他でゴブリン素材を手に入れたりポジションが惜しくなったとしても、誰かがそのイベントを達成したら必ずポジションを渡さなくちゃいけないって訳さ」

ア「なるほどー。『ずる』はできないんだねー」

ペ「まあな。だからアイテムトレードに活用する奴もいる。

ただ、ズルができないのはシステム上だけのことで、カスタムイベントならいくらでも不公平な条件をつけられるぜ？

ドラゴンを倒して報酬がポジション一個とか、理不尽なイベントも設定可能なんだ」

ア「そ、そんなくそげーゆるせないよ、おにいちゃんっ!!」

ペ「何いきなり変なこと口走ってんだよオマエ! ていうかオレ様がオマエの兄とか、いろんな意味でありえねえよ!!」

ア「ご、ごめん。ちょっと『えきさいと』しちやって……」

ペ「とにかくカスタムイベントは色々リスクーだから、受ける時は慎重にな。」

特に、成功条件の他に失敗条件やその時のペナルティが設定されている場合もあるから、注意するんだぞ?」

ア「はい!」

ペ「町の冒険者ギルドなんかにある依頼の類もこのカスタムイベントだな。」

ただ、ギルド員にはある程度イベントの公平さを見抜く能力があるから、ギルドのイベントに理不尽な依頼が並ぶことはそうそうないな」

ア「へー、たくみのわざ、だねー」

ペ「あ、そうそう。人が設定するのはカスタムイベントだって言うたが、実は例外もある。」

『ノークラス、つまりトラベラーになれなかった人たちが作ったカスタムイベントは、ナイトメアイベントになることがある』んだ」

ア「『のーくらす』って、よーは『えぬびーしー』みたいな人たちでしょー? あの人たちにも『とりえ』ってあったんだねー」

ペ「だからオマエ毒舌……」。

ま、まあその代わり、『ノークラスは基本的にナイトメアイベントを受けられない』からそれで相殺って感じだけだな」

ア「ほじょせんもんなんだねー」

ペ「……オマエ、今日はめずらしく話についてきてるよな」

ア「天才ですから」

ペ「うざっ！」

はぁ。あとは説明してねえのはグレードか？

『グレードは1から始まって、モンスターを倒したりイベントを達成したりすると数字が上がっていくし、逆にモンスターから逃げたりイベントを失敗すると減っていく』んだ。

『グレードが一定以上ないと発生しないナイトメアイベントは多い』し、カスタムイベントでもそういう設定ができるから、高額なイベントを受けたいならどんどん上げていった方がいいな」

ア「『ぐれーど』をみれば、その人の『ぼうけんしゃのらんく』がわかるってことだねー」

ペ「そういうことだな。じゃ、そろそろ復習してみるか」

『イベントっていうのは成功条件を達成すると報酬がもらえる、ちよっとしたトライアルみたいな物』

『ナイトメアイベントとカスタムイベントの二種類に分けられる』
『ナイトメアイベントは、ナイトメアの世界が自動生成するイベントで、イベント達成の報酬とイベントの難易度が釣り合っているのが特徴』

『ナイトメアイベントをクリアして獲得したウィルは、レベルアップに関係する』

『ナイトメアイベントは条件を満たすと勝手にウィンドウが開いて開始を報せる』

『カスタムイベントっていうのは、人が自分で作ったイベントのこと』

『データウォッチのイベントからイベント作成を選んで、条件を設定するだけでカスタムイベントは作れる』

『ノークラス、つまりトラベラーになれなかった人たちが作ったカスタムイベントは、ナイトメアイベントになることがある』

『ノークラスは基本的にナイトメアイベントを受けられない』

『グレードは1から始まって、モンスターを倒したりイベントを達成したりすると数字が上がっていくし、逆にモンスターから逃げたりイベントを失敗すると減っていく』

『グレードが一定以上ないと発生しないナイトメアイベントは多い』

ペ「ま、今日はこんなとこだな」

ア「それじゃあ次回まで……」

ペ・ア「グッナイトラベラーズ！ 良い悪夢を！！」

14・戦闘イベント開始（前書き）

残酷描写はじめました

14・戦闘イベント開始

『あの日』よりもだいぶ前。たぶん、縁が夢に慣れ始めた頃の記憶。

『ESPネットワーク？』

縁の口から出たSFっぽい用語に、俺は驚いて聞き返した。

『あくまで仮説、だけど。でも、それが今、一番有力ってされてるこの夢の原因かな』

そんな俺の様子を少しだけ面白そうに眺めながら、縁は言葉を選ぶようにゆっくりと話し始めた。

『遠感とか、精神感応、だったかな。』

そういう超能力が無意識に使われてわたしたちの夢はつながったの。

で、その夢に触発されて、夢を見てるみんなの能力も開発されてるから、今夢を見てるみんなは全員が少なからず超能力者、なんだって』

『つまり、縁も？』

『そういうことになるね』

あっさりと言ったのける縁に、毎度のことながら俺はぽかんとするしかない。

『だから、夢の世界にやってこられるのはそういう方面に適性のある一部の人間だけらしいんだけど、その制限も段々なくなっていくんじゃないかって』

『どういうことだ？』

『夢の世界にいる人たちの能力がどんどん高まって、能力を持たな

い人を入れても機能するくらい超能力が強まっていくから、だってさ」

『ふう、ん？』

どんな人間でも、たぶん、それこそ俺でも、縁の夢の世界に入れる。

それはとても魅力的なことだと思うのだが、俺はなぜか、同時にわずかな恐怖も感じていた。

『うん、それは、とても怖いことだよ。』

もし、ユニークの発現もできない、トラベラーになりえない人たちが、たくさんナイトメアの世界に入ってくるようなことになったら……』

『ユニーク？　トラ、ベラー？』

……それってその夢の専門用語か何か？』

突然聞き慣れない言葉を使い始めた縁に俺が声をかけると、

『あ、あはは。なんでもないなんでもない！』

それより、今日学校でみりんがね……』

縁は突然違う話を始めて、その話題はそれっきりになったのだった。

奏也（優男）の提案で、俺たちは近くの村に移動することになった。

ただ、もしかするとまだこの木に移動してくる人間がいるかもしれないので、ここで一時間ほど休憩、その際にお互いの持っているこの世界に関する情報を交換することになった。

もちろん俺たちが提供するの、ナキ（無愛想）が古書店で偶然に見つけた『ないともめあ の あるきかた 』という本（なんて設定になったらしい）に書いてあったことだ。

そこで一つ分かったことだが、やはり俺以外の全員がナイトメアの世界の記憶を現実世界に持っていけないらしい。

そのせいでナキに対し、ナイトメアの記憶がないはずなのにどうして『ないともめあ の あるきかた 』なんて本を手にとったのか、と鋭い質問が飛んだが、

「…なんとなく」

の一言で切り抜けたナキは、それ以上に大物だと言えよう。

俺とナキは『ないともめあ の あるきかた 』についての情報

を噛み砕いて伝え、代わりにクラス獲得条件や、モンスターの弱点情報（ブレイドラビットは後頭部が弱点らしい）などの実際に経験しなければ手に入れないような情報をいくつか教えてもらった。さらに、

「オマエらさあ。さつきから話してるの、ゲームのルールばかりじゃねえか。

この世界のルールについても、ちゃんと知つとかないとダメだぜ？」

と明人（目付きが悪い）が言い出し、にわかに明人劇場が始まった。

「まず、オレたちの身体能力についてだが……」

「きやつ！？」

明人はちらりと横を見ると、突然近くにいた七瀬（委員長キャラ）を持ち上げた。

「ヘルプとかオマエらの読んだ本には書いてなかったようだが、能力値を上げると身体能力も上がる。

どうやら強化は腕力にある程度対応してるみたいだな。

強化が高ければ、こうやって現実では持てなかったような重い物だつて簡単に持てる」

「失礼ね！ 重い物なんかじゃないわよ！」

七瀬が抗議の声を上げるが、明人は無視。

「さらに言えば、体力も上がってるな。

少なくとも、HPがある内はいくら全力疾走しても全然疲れない。それに、意外とみんな気付いてないみたいだが……」

そこで、明人は自分の持ち上げている七瀬を初めて真正面から見た。

「な、何よ……」

思わず気圧されたような返事をする七瀬。

そんな七瀬に、明人は、

「なあ、オマエさ。こっちに来てから、小便したいと思ったことがあるか？」

平然とセクハラ発言をかました。

「な、な、な、な、なああ……………」

流石に真っ赤になって硬直する七瀬。

「おい、だから、小便したかって聞いてんだよ！
あ、別にでっかい方でもいいぞ？」

そこにさらに追い打ちをかける明人。

「な、ないわよ！ あんた、いい加減に……………」

顔を真っ赤にしながらも、七瀬が必死で抗弁すると、

「とまあ、そういうワケだ。

こんだけ小便近そうな顔のコイツがないって言うてるんだから、

オマエらみんなやってないだろ？」

「しょ……トイレ近そうな顔ってどんな顔よお！」

明人はしれつと話をまとめた。

「オレも前に村に行った時、ちよろつとお宅拝見してきたが、そこにはベッドや風呂はあっても、便所は一個もなかった。

つまり、この世界では排泄の必要がないってことだ」

「ちよ、ちよつと！ 無視しないでよね！」

そんな風に耳元で必死に叫ぶ七瀬を完全に無視出来る明人は、真性のドSかなんかだと思う。

だが、なるほど。

ドSとかセクハラ発言とかはともかくとして、明人の言うことは確かに興味深かった。

「それだけじゃないぜ。

この世界で過ごし始めて数時間しか経っていないから確証はないが、少なくともこれまで眠いと思ったことはないし、腹が減ったと思ったこともない。

ついでに言やあ、間近でこんなにエロい女を見ても、犯したいとも思わない」

「え、エロくなんかないわよ！」

七瀬は宙づりになったまま、両腕で自分の大きな胸を隠しながら叫んだ。

「つまり……」

そこで、今までじつと聞いていた奏也が口を開く。

「つまりこの世界では、食欲も睡眠欲も性欲も、果ては排泄欲までもないと、そう言いたいんですか？」

改めて言葉にされると、それは驚くべき指摘だった。

魔法が使えたり、超人的な力を持ったりというのも、それは大きな問題には違いない。

だが、自身の体が持つ欲求、そんな物を操作されたというのは、どこか生命の根幹を弄られたような、何とも表現し難い不気味さがある。

しかし少なくとも、明人はそのような感傷とは無縁なようだった。

「つつか、そうとでも考えねえと辻褃合わねえだろ？」

奏也の言葉に、何でもないことのようにうなずいてみせる。

「まあ、正確に言えば『ない』ワケじゃあなくて、『極端に少ない』ってだけの話じゃねえかと思うけどな。

特に腹が減ったり眠くなったりしないってだけで飯があれば食べそうだし、眠ろうと思えば眠れそうだ。

排泄についてちやあ分からねえが、セックスだって……例えばこのデカ乳女が裸であつはんうっふん言っただけで……」

「しないわよそんなこと！」

「……迫ってきたら、まあ勃つんじゃねえか？　なあ？」
最後の『なあ？』は男性陣に対する呼びかけである。

「……………」

正直、そんな所で相槌を求められても困る。

俺は無言を押し通したが、奏也は、

「さあ、どうでしょうね」

と苦笑で返し、穂村に至ってはコクコクとバカ正直に首を縦に振って七瀬にいらまれていた。

それで気が済んだのか、

「あ、もうオマエはいーや」

もう用はないとばかりに七瀬が放り投げられる。

「きゃん！」

乱暴された子犬みたいな声を上げて、七瀬が地面に落ちる。

「あー、大丈夫か？」

地面に背中から着地した七瀬を気遣って、手を伸ばしたのだが、

「……全く、これだから男って奴は！」

何だか凄い台詞と共に、伸ばした手を振り払われた。

……少しだけ、この世の理不尽を感じなくもない。

一方、七瀬をリリースした明人は俺たちのやり取りを気にするでもなく、主に奏也とその後ろの月掛（金髪）相手に絶好調でしゃべり続けていた。

「やつばよ。この世界はゲームなんだよ。」

冒険をするって目的のためだけに人間性すら歪められた、ゲームの世界だ。

ここではモンスターを倒したり遺跡を探検したりするべきであつて、生活するべきじゃないっていうのが、この世界を創った奴の考えなんだろうぜ！

全く、本当にもう呆れるくらい実に……」
「実に……？」

奏也の絶妙な相槌に、明人はにやつと笑って言った。

「……実に、オレ好みだ！」

そして、そのあまりに清々しすぎる笑顔を見て、俺は素直に思った。

ああ、こいつ変態だ、と。

という次第で、思わぬ有益な情報が飛び交った一時間の休憩を終え、俺たちは村に移動することにした。

隊列は、先頭から奏也（リーダー的存在）、月掛（奏也の金魚のフン）、明人（変態っぽい）、俺、穂村（馴れ馴れしい）、七瀬（エロい？）、ナキ（無表情）の順だ。

ちなみにメンバーの呼び方が名字だったり名前だったりするのは

本人の自己申告からだ。

具体的には奏也と明人（とついでにナキ）は自分から名前呼びを希望してきた。

一番名前呼びを要求してきそうな穂村が何も言って来なかったのが意外だが、単に何も気にしていないという可能性もある。

そして、肝心のこの並びの意味だが、特に深い意図などは込められてはいない。

少なくとも村までの道には敵は出て来ないらしいので、戦闘なんかは考慮されていない。

それに、ここにいるメンバー全員が、この辺りの敵なら単独で撃退出来る程度の実力はあるらしい。

実際、村までの道は今までの森の道と比べると道幅も広く、心持ち整備もされているようで、非常に歩きやすい。

空から暖かそうな光が降り注いでいるものどかな気分を増大させ、まるで森林浴でもしているかのようだ。

ただし、そんなのんびりとした時間の中で、穂村がしきりに話しかけてくることだけが唯一面倒くさかった。

もちろん俺だって最初から穂村の相手をしようと思っていた訳ではなく、むしろ本当は最後尾でナキとのんびり歩いて行こうかと思っただが、さっきの一件のせいかな明人のことをあからさまに避けている様子の七瀬に気付いてしまったのだ。

気の強そうな顔にかすかな怯えをにじませているその顔に、俺はなんとなくいたたまれなくなってしまった。

そして、ならせめて俺が間に入ってやろうか、なんて仏心を出したのが、間違いの始まりだったのだ。

俺が明人と七瀬の間に陣取ったちょうどその時、月掛に話し掛け

に行つてあえなく追い払われた穂村が、更なる獲物を求めて後ろに歩いてきた。

穂村はまず明人……を華麗にスルーし、特に誰とも話をしていなかった俺を与しやすしと見たのか、ただちにロックオンしてきた。

単独で穂村を相手にするのはつらすぎる。

後ろにいる七瀬がナキを巻き込めば……と後ろを見ると、今まで会話する気配すらなかった七瀬とナキが何か話を始めていた。

うん、なんというか、あれだな。

全く、これだから女って奴は……。

俺は内心の悲嘆を押し隠しながら、満面の笑みでこちらに歩み寄ってくる穂村に、引きつった笑みを浮かべたのだった。

「そんでおれはな、そのブレイドラビットの一撃を華麗にかわして炎の剣をこうズバーツと、ズバババアツとくらわしてやったワケだよ!」

「ああ。ズバーツとな」

俺は穂村の自慢話に適当な相槌を打ちながら、この話、一体何回目だろ、とぼんやりと思っていた。

俺をロックオンしてからこちら、穂村は俺に口を挟む機会も与えずにひたすらこの世界に来てからの自分の活躍を語っていた。

活躍と言っても、ただただブレイドラビットを倒す話を無限ループで聞かされているだけなのだが、その倒し方も今の話のように炎の剣で倒していたり華麗な足技で蹴倒していたり持っていた剣で一刃両断にしていたり、いちいちディテールが異なる。

というか、穂村は確かレベル2だったのでそんなにたくさん敵を倒したはずはないのだが、その辺りはどうなっているのだろうか。

「おーいー！　ここ、重要なトコだぜえ？　しっかりしてくれよお、光一ちゃん！」

そしていつの間にか、穂村の俺の呼び方が『光一ちゃん』になっていた。

さらに何を血迷ったか、「おれのこととはほむちつて呼んでくれよ！」と言ってきたが、絶対に呼ぶまいと心に決めた。

それでも穂村は心行くまで話が出来たせいか、もはや鬱陶しいほど上機嫌だ。

「いやー、なんか光一ちゃんとは気が合うなあ！

なんだろ、おれ、光一ちゃんとは一生モノの親友になれる予感がゆんゆん来るわー！」

「そうか。俺はお前にこれからずっと迷惑かけられる予感がひしひしとするんだが……」

「あつはは！　迷惑かけあえるのが、本当の親友つてもんだろ？」

一方的にかけられ続けるのは絶対親友ではないと思うのだが。

「それで、この奥の村つてのはどんな所なんだ？」

このままでは穂村のおしゃべりが止まりそうにない。

せめて有益な話題をと思って、仕方なく俺が話を振った。

「んー。なんつーか、こう、『村！』って感じかな？」

「……そうか」

これ以上ないほどに無益な言葉を聞いてしまった。

「いや、でもほんと特徴ないんだよ！

RPGにある村みたいないな感じで、家もやったら少ないし……。

あ、でも待った！ すっげえ特徴があった！

あの村、村長の娘が美人だったよ！」

「……そうか」

誰かこいつ何とかしてくれないかな？

穂村はその村長の娘の顔でも思い出したのか、気持ち悪く体を揺らし、

「あー！ 早く戦闘イベントとか起きねえかなー！！

そんでおれがモンスターをこうズバーツと、ズバババアツとやって、村を救っちゃったりしてさ。

そんでそんで、あの人ってばカッコイイ、とか言われちゃったりさあ……」

「ああ。ズバーツとな」

もう相槌を打つ気力さえなくなってきたが、穂村は全く気にせず笑っていた。

というか、そういうことを言うとは本当に起きそうだから困る。

ナイトメアのイベントというのは、確かある程度人の願望に左右されるのだ。

不用意なことを言ったり望んだりするのは本当にやめて欲しい。

と、俺のげっそりとした様子とは裏腹に、そこでまたどんなるくでもないことを思いついたのか、穂村の表情が一層明るくなった。

「あ、そうだ！ 光一ちゃんポーシヨンとか傷薬持ってる？」

おれ、たくさん持つてるんだけど、譲ったげようか？」

「ええと、ポーシヨンと、傷薬？ それって何か違うのか？」

俺が聞くと、穂村は鬼の首を取ったかのように大騒ぎを始めた。

「おいおい冗談だろお、光一ちゃん！」

ポーシヨンはHPを回復する薬で、傷薬は傷を治す薬に決まってるじゃんか！

そんなの赤ちゃんでも知ってる常識だろー？」

「……赤ちゃんはたぶん知らないんじゃないか」

ちよつと悔しかったのでそう反論しておいたものの、本当に常識っぽいことだった。

こつという情報が生死を分けるのかもしれない。

穂村から教わったことだけが業腹だが、久しぶりに聞く価値がある情報を聞いた気がした。

「しょうがないなあ光一ちゃんはあ！」

よし！ なら今だけ特別価格、1本110ウィルで傷薬を譲ってやつてもいいぜ？」

そんな俺の様子に脈ありと見たのか、胡散くさい商人みたいなことを言い始めた穂村の後頭部を、

「いい加減に、しなさい！！」

その真後ろを歩いていた七瀬が力いっぱいはたいた。

どうやら七瀬は、ナキとの会話を早々に諦めたようだ。改めて穂村の横まで歩いてくると、

「普賢君、だっけ？ こいつに騙されちゃ駄目よ。」

傷薬なんて、この奥の村に行けば一本1000ウィルで売ってるんだから、こんな奴に無駄にお金払う必要ないからね」

そう言いながら七瀬がギロリと睨み付けると、穂村は肩をすくめた。

「ちょ、ちよつとした冗談じゃないか。」

もちろん、1本1000ウィルで売るつもりだったって！」

などと弁解するが、誰も信じる者はいない。

「お前って、割とどうしようもない奴だな……」

というか、単なるバカキャラかと思いきや、案外ちゃっかりしてる奴だった。

まあ傷薬1本当たり1000ウィルのもうけとか、どう考えてもせこすぎると思うが。

しかし、それはそれとして、

「1本1000ウィルでいいんだよね？」

だったら、2本もらうよ」

俺はそう穂村に返事をしていた。

「あなた、正気なの？！

こいつ、あなたからお金をだまし取ろうとしたのよ！？」

七瀬が声を荒げるが、

「だけど、それは七瀬がちゃんと止めてくれたんだろ？」

市場価格と同じなら構わないよ。

傷薬は欲しかったし、一度アイテムトレードってのをやってみたかったんだ」

俺は冷静にそう返した。

この世界では、実際に負傷することもありそうだ。

傷薬なんて便利な物があるなら、出来るだけ早い内に手に入れておきたかった。

さっき見た時、俺の所持ウィルは大体5000弱だったはずだ。2000くらいの出費なら問題ない。

「よっしゃ！ 毎度あり！

やっぱ光一ちゃんは話が分かるう！」

そして、俺の言葉を聞いた穂村の反応は早かった。

パッパとデータウォッチを操作し始め、トレード画面を呼び出す。俺もすぐにデータウォッチでインベントリを開いて、そこからトレード画面を呼び出した。

「トレードで金額を誤魔化したりしないでしょうね？」

「し、しねえよ！」

なんてやり取りがあったせいか、トレード自体はスムーズに進んだ。

穂村が傷薬2本を、俺が2000ウィルをそれぞれ提示して、すぐにトレード成立。

2000ウィルが減った代わりに、インベントリに傷薬が2個増えた。

もらった傷薬の内1本は、その場で実体化させた。

青色の液体が入った、栄養ドリンクみたいな外見だった。

しかし、別に眺めるためにインベントリから出した訳じゃない。

俺はそれを手に取ると、

「ナキ！」

後ろで我関せずとばかりに歩いていたナキに向かって放り投げる。

ナキは突然放られた傷薬を危なげなくキャッチしたものの、

「……なに？」

不信感だけで煮固められたような視線を俺に向けてくる。

……実を言うと、俺が穂村から傷薬をもらいたいと思ったのは、半分以上がナキに渡すためだ。

人間不信のきらいがあるナキのことだ。

もしかすると村に着いても人との接触を拒み、薬を買ったりしないかもしれない。

そうではないにしても、なんとなくナキには自分自身の優先順位を低く見ているような所がある。

だから、せめてこれくらい持っていることが確認出来ないと、危なっかしくてたまらない。

だが、素直にそう言ってもナキは受け取ってくれそうにない。

俺は頭をひねって結局こう言った。

「それ、お前が持つといてくれ。」

それで俺が怪我をした時、そいつを使ってくれと嬉しい」

俺がそう言い切ると、ようやくナキは小さくうなずいて、傷薬をインベントリに入れた。

まるで自分のためにナキに傷薬を渡したみたいない方になってしまったが、こうでも言わないとナキは受け取ってくれなかったと思う。

そうは言っても渡してしまえばこっちの物だ。

いくら何でも、ナキだって自分がピンチになればこの傷薬を使つて……使うよな？

ちょっと不安になったのだが、そんな俺の脇腹を穂村が突つてきた。

「おいおい光一ちゃん。」

光一ちゃんも隅におけないねえ」

「……何の話だよ？」

にやにやとしている穂村の笑顔に不吉な物を覚えて、俺はわざと不機嫌そうに言葉を返した。

そんな態度も何のその、穂村はさらに楽しそうに俺の脇腹を突つつきまくった。

「おいおいごまかすなよう、当然いま薬を投げたエルフっ娘のことだつて！」

四方坂ナキちゃん、だっけか？

もうお互い名前で呼び合ってるみたいじゃん？

もしかして、付き合っちゃってるのか？」

「……違う。

名字が嫌いだから、名前で呼んでくれって言われたんだよ」

何でこいつこんなにウザいんだろうと思いつつ、俺は律儀に答えた。

「ふーん。ま、四方坂って名前、たしかに乙女っぽくはないよなあ。うん、わかるわかる！」

「……………」

お前に分かれても、と思わなくもないが、まあ触らぬが得策だろう。

「ていうかそっか、そういうことなら、おれ、アタックしてこよう！」

「はあ！？」

そして何なんだろう。

穂村はいきなりそんなことを口走ると、ナキの方へとスキップするようには歩いて行った。

「ナキさん！ こんにちは！ おれ、穂村陽介です！」

「……………」

呆然と見守る俺と七瀬の前で、穂村がナキに放った第一声がそれだった。

…… キヤラ変わってないか、お前。

そんな俺たちの呆れた視線など、当然気が付くはずも気にするはずもなく、

「あ、あのさ、あ、あのですね。ナキさんって杖持ってるけど、一体どんなタイプのキヤラを……」

「それ、やめて」

「うえ……？」

ノリノリで話し掛けていこうとしたが、それはナキの冷たい声で止められた。

「あ、あの、ナキさん？ それって言うのは……」

「…そのナキって呼ぶの、やめて」

他人の枝毛くらいの関心のなさをにじませ、穂村と目も合わせないままナキが告げる。

「ええ！？ ええっと、でもよお……」

穂村が話が違っぜ、みたいな目で俺を見るが、そんなん知るかというのが正直な感想だ。

「…ナキって名前、気に入ってるから」

「う、うん？」

「……知らない相手に、呼ばれたくない」

「……おう！！」

知らない相手とまで呼ばれ、穂村が撃沈した。

なんというか、ナキって本当に気難しい奴なんだなと再認識させられる一幕だった。

そして一度は心折られたと思われた穂村だが、そこから驚異の粘りを見せ、ナキに無益な突撃を繰り返した。

「……………」

ナキはしゃべることはおろか穂村を見ることがすらないが、本当に迷惑そうだった。

ここは流石に俺が助け舟でも出してやるかと思った時、

「あー。いいいいいよ。ここはオレが行く」

いつ嗅ぎつけたのか、前を歩いていたはずの明人が俺の肩に手を置いていた。

というか、どという風の吹き回しだ？

「……お前が？」

俺が訝しげに明人を見返すと、明人はにやっと男くさく笑った。

「そんな顔するなって、分かってる。」

似合わないってんだろ？

でもオレ、ワガママだからよ。

自分以外のワガママなヤツってのは我慢ならねえんだ」

「……はあ」

良く分からん理屈だった。

だがとにかく、

「ま、任せときなつて！ 見事に解決してやるからさ！」

明人は俺の肩から手を放すと、ナキと穂村の所に歩いて行つてしまった。

しかし、精神的に無敵の耐久力を誇る穂村にどうやって対抗するつもりなのか、俺が多少ワクワクしながら見ていると、

「よーっす、ほむっちい！！ 今日もご機嫌してるかーい！？」

何だかすつげえ馴れ馴れしい態度で穂村の肩にのしかかっていった。

あとセンスがおかしいし、ほむっちって呼び方を考えるとこいつもしかして俺たちのやり取り聞いてたんじゃないかという疑惑も出て来た。

ともあれ、

「え？ あ？ え？ なに？」

この先制攻撃には、流石の穂村も混乱する。

さらに、

「いやいや、そんな他人行儀な言い方するなよ！

オレとほむっちの仲じゃないか！

オレのことはアキアキでいいよ！！」

聞いてないどころか誰も名前呼んでないのにそんなことを言い始めた。

「いや…え？　それでアキアキは何の用？」

そして穂村も適応した！

だがまだ場の主導権は明人にあった。

さらに馴れ馴れしく肩を引き寄せると、本当に嬉しそうに言う。

「じつつはよー！　あ、ほむっちって、第一高なんだろう？」

「ん？　あ、ああ。そうだけど……」

これにはあの穂村も押されていた。

まさかこういう制し方があったとは、勉強になる。

七瀬も同じ感想を持ったのか、

「まさか、あいつを撃退するのにこんなやり方があったなんてね。

やるじゃないあの男も……」

あ、セクハラは許さないけどね！！」

ちよっと混乱した感じの賛辞を送っている。

さらに気が付くと、

「一体どうしたんですか？」

「せっかく奏也様とふたりでおしゃべりしてたのに……」

「…コイチ、気をつけて」

前を歩いていた二人と穂村に話し掛けられていたはずのナキまで隣に来ていて、全員で『穂村vs明人』の好カードを観戦するような運びとなっていた。

だが実は穂村は押しに弱いのか、状況は既にワンサイドゲームの様相を呈していた。

「マジかあ！！」

やー、実はオレの中学時代のダチが第一高行っててよお！

で？ 学年は？ ああ、二年だっけ？

んじゃ、クラスは？」

「え？ あ、ああ、2 - C だけど……」

上がり続けるテンションに、穂村は戸惑いながらも答える。
それを聞いて、うんうんとうなずく明人。

「ふーん。2 - C かあ。あ、ところでよお」

そこでふと、これ以上ないほどの自然な動作で上を指さし、

「あの木の上にあるのって、アイテムじゃね？」

「え？ それってマジ」

その指に釣られ、穂村が上を向いた瞬間、だった。

銀光が、閃く。

その光は無防備に晒した穂村の喉をぱっくりと開き、

「…え？」

わずかな時を置いて、そこから間欠泉のように赤い奔流が噴き出した。

その赤が、笑顔で穂村を見下ろす明人の体を濡らしていく。

「うつわ！　なんだこの勢い！　ありえねえって！！　シャワーみてえ！！」

そう言っただけが笑い出しても俺は、いや、俺たちはまだ、目の前で何が行われたのか、全く理解出来ていなかった。
目の前で起こった起こった凶行を、正しく認識出来なかった。

だが、

「あつははは！　こんなベタに引つかかる奴、いまだにいるんだな！！」

そうやって明人が血染めのナイフを閃かせ、さらに甲高い笑い声を上げて、

「…あ、え、ああ！！」

いまだ血の噴き出す喉を押さえた穂村が、驚愕の表情を浮かべて地面に倒れ伏した所で、俺の頭も動き出した。

「……お前、一体、何してるんだよ？」

俺の喉から、自分の物とも思えないようなかすれた声が出る。
だが、問題ない。
相手には届いた。
そして奴はこう言った。

「もっちゃん、慈善事業だよ。
こいつ、さっき戦闘イベントが欲しいとかって言ってただろ？
だからさ。オレが、プレゼントしてやったんだよ」

ああ、いつもの感覚が来る。
俺の意思とは無関係に、頭の芯が冷えていく。
轟々と、頭の回転だけが加速を始める。

「さあ、どうする？ 戦闘イベント、開始だぜ？」

『戦い』が、今始まった。

『属性について』

ペ「ハロー、トラベラーズ！ オマエらの旅を完全サポート！ お助け悪魔のペイモン様だぜ！」

ア「はろー、とらべらーず！ みんなのリストカット！ アスタナちゃんだよー！」

ペ「手首切ってどうすんだよ！ ってか怖いわー！」

ア「アスタナも、そろそろこの『ろせん』に『げんかい』をかんじはじめているよ……」

ペ「はあ。ま、もしかするとここでお別れなトラベラーもいるかもしれないし、そろそろ潮時かもしれないねえな」

ア「え、ええー？！ この本の『のろい』がとうとう『はつどー』して、ここまでよんだ人みんな、リストカットしてしんじやうのー！？」

ペ「何だその恐怖の本！？ これにはそんな呪いかかってねえよー！

……そうじゃなくてだな。今回の『属性について』で、この『ないとめあ の あるきかた 』の初級編は終わりなんだ。

初級編まで読んだとなれば、一応はナイトメアの最低限のルールは分かっただろうから、この本から卒業する奴もいくらか出そうだなって話だよ」

ア「ふむん。じゃあ『ちゅーとりある』はもうおわり、ってことでよろしいんだね？」

ペ「言い方は引つかかるが、まあそんな感じだな。

当然この本自体は中級編、上級編とまだまだ続いていく。その中にはもちろんオマエらにとって有益な情報が詰まってるが、あんまり前情報が多すぎてもゲームはつまらなくなっちゃう。

個人的な意見を言わせてもらうと、ここらで一度本を読むスピードを緩めて冒険に専念してみる、ってのも、ナイトメアを楽しむ賢い手段かもしれないぜ?」

ア「きみたちはこの本のつづきをよんでもいいし、よまなくてもいい。…だね?」

ペ「ま、結局読む読まないは自由意志。オレ様たちがとやかく言うことでもねーやな。

……つーわけで、今回のテーマは属性、だ!」

ア「え、えーと、『めがねもえ』とか、『ねこみめいどいのち』とか、『つよきおねえさまけいこそしこ』とか、そーゆーの?」

ペ「ぜんっぜん違う!! 攻撃属性とか耐性属性とか、そういう奴のことだよ!

いいか? このナイトメアの世界には、『四つの主属性と、それに付随する無数の副属性がある』んだ」

ア「『しゅぞくせー』と『ふくぞくせー』? それってなにかちがうのー?」

ペ「主属性がスキルの大まかな方向性で、副属性が細かい性質って感じかな。

とりあえず『アクティブスキルには、必ず四つの主属性の内どれ

か一つの属性がついている』んだ」

ア「『しゅぞくせー』がちがうとなにかかわるのー？」

ペ「一番の違いは威力に関わる能力値かな？

スキルの説明の時に少し話したけどな。四つの主属性、つまり『物理・理術・無・時空のそれぞれの属性のスキルによって、対応する能力値が違う』んだよ」

ア「え、えーと？　そういうこともあった……ですか？」

ペ「中途半端に思い出してんじゃねえ！

つて、こんなネタ会話やりたい訳じゃないんだよ！　つつかむしろお前全然覚えてないだろ！？」

……はあ、仕方ないからもう一度だけ言うぞ。

『物理属性なら強化、理術属性なら理法、無属性なら操作の能力値がスキルの威力に係する』ぜ。

ちなみにこれは前に言わなかったが、『時空属性のスキルだけは、能力値によって威力が変わったりしない』んだ」

ア「ほへー。『じくー』だけはとくべつなんだねー」

ペ「それぞれ色々特徴があるけどな。

基本的に『全ての生き物には属性に対する耐性が存在して、攻撃を受けた時、耐性が低ければその属性のダメージは大きくなるし、耐性が高ければその属性のダメージは小さくなる』。

ただし、『物理属性と理術属性両方に強い耐性を持つ魔物は少ないし、時空属性に耐性がある魔物はほとんどいない。そして、無属性だけはそもそも耐性が存在しない』んだ」

ア「う、うーん？　じ、じんせいいろいろだねー？」

ペ「人生まったく関係ないけどな！

で、あと関係するのはスキルの威力だな。これにも属性ごとに傾向があつて、能力値補正、耐性なしの状況では、『時空＞物理・理術＞無』って法則が大体成り立つ。

特に『無属性スキルは誰にでも効く代わりに威力が弱め』なんだ。万能だからって無属性スキルばかり使つてると火力不足で押し切られる可能性大、だぜ？」

ア「つまり、『じくー』こそさいきょー？」

ペ「いや、『時空属性には能力値補正が乗らないし、消費MPが多めで燃費が悪い』。どれも一長一短つてことさ」

ア「ほほー？」

ペ「まあそんな風に主属性はスキル一つに対して基本一つしかつかないが、そこに複数の副属性がついたりするんだ」

ア「あー、うんうん。あるよねー」

ペ「……どんどん適当になつてるな、オマエ。」

副属性は無数にあつて、しかもナイトメアの世界のバージョンアップの度に増えるから把握するのも面倒なんだよな。

ただまあ主属性によって付きやすい副属性が決まっていて、『物理だと斬・殴・突属性、理術だと火・水・風属性なんかの性質を示す属性が付きやすく、時空属性にはほとんど副属性は付かない。そして、無属性には副属性が付くことは絶対はない』んだ」

ア「まあ『むぞくせい』の『ひぞくせい』スキルとかいみわかんないですしね」

ペ「ま、まあそうだな……」。

だから大抵は、物理・斬属性のスキルとか、理術・水属性のスキルみたいなものが多いな。

ただ、物理・欧・火属性のフレイムストライクとか、理術・土・突属性のアースグレイブとか、色々な属性の組み合わせはあるぜ」

ア「じつにきょうみぶかい」

ペ「オマエ、悪いもん食ってないよな。

副属性がたくさんついてた場合、属性耐性は属性全部の平均みたいなので計算されるから、必ずしも多いから有利って訳じゃない。

ま、この辺りは自分で試行錯誤してやってってくれよな」

ア「ふむ。べんきょうになるな」

ペ「……………。きよ、今日の復習な」

『四つの主属性と、それに付随する無数の副属性がある』

『アクティブスキルには、必ず四つの主属性の内どれか一つの属性がついている』

『物理・理術・無・時空のそれぞれの属性のスキルかによって、対応する能力値が違う』

『物理属性なら強化、理術属性なら理法、無属性なら操作の能力値がスキルの威力に係する』

『時空属性のスキルだけは、能力値によって威力が変わったりしな

い』

『全ての生き物には属性に対する耐性が存在して、攻撃を受けた時、耐性が低ければその属性のダメージは大きくなるし、耐性が高ければその属性のダメージは小さくなる』

『物理属性と理術属性両方に強い耐性を持つ魔物は少ないし、時空属性に耐性がある魔物はほとんどいない。そして、無属性だけはそもそも耐性が存在しない』

『無属性スキルは誰にでも効く代わりに威力が弱め』

『時空属性には能力値補正が乗らないし、消費MPが多めで燃費が悪い』

『物理だと斬・殴・突属性、理術だと火・水・風属性なんかの性質を示す属性が付きやすく、時空属性にはほとんど副属性は付かない。そして、無属性には副属性が付くことは絶対でない』

ペ「最後だし、ちょっと量が多かったが大丈夫だったか？

……さて、ご苦労さん。これで初級編は終わりだ。

中にはしばらくお別れって奴もいるかもしれないが、オレ様はオマエらがまたこの本を開くって信じてるぜ？」

ア「そしてそのとき、あなたの目のまえには『ちてきキャラ』に『かれーなへんしん』をとげたアスタナのすがたが！？」

ペ「あ、それはないな」

ア「えー?! なんでー?!」

ペ「それじゃ、また会う日まで……」

ペ・ア「グッバイトラベラーズ!! 良い悪夢を!!」

ア「じゃ、アスタナは『ちてき』になるために、さっそく『めがね』をさがしにいくのー!」

ペ「うん。まず知的になる第一歩として、オマエの中の知的像から改善していかうか」

ア「ふっ。しんぱいするな。アスタナの『でーた』によると……かちかちかちかち……アスタナが『ちてき』になるかくりつ、ひやくにじゅうはちぱーせんと!」

ペ「だからそれが既にバカの発想なんだよ!!」

15・牙を剥く悪夢

学校が、臨時休校になった。

考えてみれば当然の処置だ。

こんな時に勉強したいと考える奴もいないだろうし、保護者だつて学校に通わせたいはずもない。

かと言って、いきなり家に帰れと言われても困ってしまう。

この時間、家には誰もいやしないだろうし、他に行く当てもない。なんだかんだと考えながら、俺の足は自然と自宅への帰路を進んでいた。

300

まるで活気のない町並みを歩いて、何事もなく家に帰り着く。

隣の家を見上げて、やはり人の気配がしない。

もしかして……。

『ッ！』

最悪の想像を振り払って、俺は逃げるように自分の家の鍵を開けた。

『……ただいま』

俺はあいさつというより、独り言みたいにそう言い捨てながら、玄関の扉を開けて、

『おかえり』

すぐにその返答が返ってきたことに驚いて、玄関の前でしばし、硬直した。

『おかえり、光一』

それが不満だったのか、自分の存在を主張するみたいに、もう一度声かけられる。

それで、ようやく俺の硬直は解けた。

『なんだ、縁か』

そう安堵の吐息を漏らしてから、違和感に気付く。

……そうだ。

『ちょっと待て。お前、鍵はどうしたんだよ?』

こんなご時世だからこそ、空き巣が横行する可能性はある。

俺はそんなことを思いながら朝、しっかりと鍵をして出たのをはつきりと覚えている。

だが、

『わたしは、魔法使いだから』

本気とも冗談ともつかぬことを言って、縁はさっさと奥に入ってしまった。

俺は手早く荷物を自室に置いて、手洗いなどを早々に済ませ、制服を着替える手間も惜しんで居間に戻った。

縁は、自分の家のようにくつろいでそこに座っていた。

やっぱりこれは異常だ。

縁は唐突な奴だが、他人の家に勝手に上がり込むようなことはしなかった。

『どうしていきなりうちに来たんだ？』

意識して少し険しい表情を作って俺はそう問い掛けるが、

『光一に会いに来るのに、理由なんているの？』

そんな台詞でごまかそうとしてくる。

だが、そんな言葉にすら心臓が跳ねてしまうのは、思春期男子の性という所か。

俺は内心の動揺を外に出さないように、出来るだけ気のない調子で言う。

『そういう台詞は、恋人にでも言ってもらいたかったよ』

『そう？ わたしはそれでも構わないよ？』

それは、何を考えて口にされた言葉だったのか。

俺は真意を探るように縁と目を合わせて、すぐに逃げた。

『ちよつと、飲み物を取ってくる』

自分でも弱いなと思いつつ、跳ねる鼓動を落ち着かせるために、少し時間が必要だと思った。

冷蔵庫に何かあっただろうか。

そんなことを考えながら、二、三步、キッチンの方へ歩を進めて、

『……縁？』

背中にぶつかってきた縁の熱と重みに、俺は上ずった声を出した。

何が起こったのか、分からない。

ただ、ゆっくりと俺の胸にまで回された縁の手は、小さく震えていた。

くぐもった声が俺の耳を打つ。

『昨夜、みりんが、消えたって』

まさか、とか、嘘だろ、とか、そんな言葉が頭を巡って消える。だが本当は、いつそんなことが起こってもおかしくないことは、俺の理性がはつきりと理解していた。

『……バニシング・ドリームか』

人が消える夢、悪夢への誘い、永遠の夢への招待状。

誰よりもその夢に詳しい縁のおかげで、俺は他の多くの人よりも事態に詳しいはずだった。

それでも、身近な人間が巻き込まれたと聞けば、流石に穏やかではいられない。

『大丈夫。みりんのことは、わたしが《向こう》でどうにかするよ。だけど、わたしにももう、時間がない』
『もう危ない、のか？』

俺の問いに、背中で縁がうなずく気配。

『わたしの仲間も、二人、取り込まれた。

わたしについているのは《魔力親和性》だから、《魔力侵食》の人よりは進行が遅い、けど、この前レベル8に上がったから、あと一週間ももたないと思う』

『確か、レベル10まで行ったら終わり、なんだよな？』

『たぶん、ね』

くぐもった、苦々しい声を聞く。

《魔力親和性》。

縁が夢の世界での記憶を現実にとって来られる理由とされるスキル。

本当の所は知らない。いや、誰にも分からない。

だが、決して上げ過ぎてはいけないスキルだということは分かっている。

『だから、わたしは近い内に戦うよ』

『たたか、う？』

『うん。わたしは、あの悪夢の世界を、打ち倒す。そして』

物騒な言葉とは裏腹な、どこか切なげな声で、縁は後ろから俺の耳にささやいた。

『絶対、光一を守るから』

そう、そうだった。

これが、俺が思い出そうとして、でも絶対に思い出せなかった記憶の欠片、その一つ。

全てが変わった『あの日』より、二日だけ前の出来事だった。

「おっ？」

いかにも愉快そうな明人の声にその視線の先を追ってみると、地面に倒れていた穂村が粒子になって空に溶けていくのが見えた。

視線を戻すと、明人の体の半分くらいにべったりとついていた穂村の血液も、時を同じくして剥離して、空に溶けていく。

「へええ。『トラベラー』だって、死ぬと粒子になるワケね。こいつぁ興味深いな。」

ウィルが増えたかどうかも見たいが、そんな時間は流石にねえかな？」

明人はやっぱり楽しそうにこちらに流し目を送る。

それに初めに反応したのは、俺の隣に立っていた七瀬だった。全身から怒りを発散させながら、明人に向かって一歩前が出る。

「あなたは！ 自分が何をしたか、ちゃんと分かって」

「じゃあオマエは、オレが一体何をしたか、ちゃあんと分かってんのかよ」

糾弾の声は、しかし明人の言葉に上書きされた。

「確かにこいつはオレに喉掻っ切られて消えた。……それで？」

「それで、って、あなたは、人を、殺して……」

「そこだよ！！」

強気に出ていた七瀬をビクツとすくませるほどの大声を、明人は出した。

大袈裟な身振りで、まるで演説のように声を張り上げる。

「どうしてこれが人殺しなんだ？」

そもそも人殺しだとして、これは悪いことなのか？

ここは、ゲームの世界なんだぜ？」

「げ、ゲームの世界だって、やっていいことと、悪いことが……」
七瀬はかろうじて反論するが、

「なあ、ここがゲームの世界なら、PKするのはルールの内なんじゃないか？」

「そ、んなこと……」

「見ろよ」

明人の言葉に、俺を含めた全員の視線が穂村の体があった場所に向かう。

そこには、穂村が持っていた物なのか、いくつかのアイテムが落ちていた。

「人を殺すとアイテムドロップするのは、つまりPK用の仕様なんじゃないか？」

ゲームならプレイヤー殺して経験値やアイテム奪うのも、遊び方の一つ、だろ？

オレはただ、オレなりに真剣にこの『ゲーム』を遊んでるだけなんだよ」

明人は全く悪びれる様子もなく、ゆっくりと七瀬に歩み寄っていく。

「それ以上、近付かないで！」

七瀬がヒステリックに叫んで槍を構える。

その先端が明人の体に突きつけられるが、それでも明人は表情を変えなかった。

その時、

「…あぶない。私の射線を、遮ろうとしてる」

不意にぼそりと、俺の右隣でナキが声を上げた。

そして、気付いた。

明人は巧妙に体の位置をずらし、ナキと自分の間に七瀬の体を入れ、ナキの攻撃を封じようとしている。

つまり、何か仕掛けてくる?!

俺がその理解に至った直後だった。

明人が動く。

「わかったわかった。

オマエらはオレがこんなモン持つてるから信じられないんだろ？
なら、よ……」

明人は槍が自分の体に触れることにすら無頓着に、更に七瀬に体を寄せ、ゆつくりとナイフを持っている右手を上げる。

そして、

「このナイフ、捨ててやれば満足なんだろ？

……ほら！」

右手に持ったナイフを、上に放り投げ、

「…あ、え？」

次の瞬間、七瀬が身を二つに折って、地面に崩れ落ちていた。

「あ、うあ、いた、い…痛い!!」

お腹を押さえて苦しむ七瀬を、明人は傲然と見下ろす。

「まったくよお。オマエらホントにちよろすぎなんだよ。
なあんで一度やった手に、二度もひつかかるかねえ？」

そんな明人が左手に持っているのは、さっき右手が投げたはずのナイフ。

しかも、誰かの血によって真っ赤に染まっている。

ナイフを上に向けて注意を向けた瞬間、左手で七瀬の腹を刺した？！

そうとしか考えられない。

上に投げたはずのナイフが左手に移動したことだけが解せないが、流れ自体は穂村の時と同じ。

明人が危険だというのは分かっていたはずなのに、また目の前で犠牲者を出してしまうとは……！

俺が怒りを込めて明人を睨みつけると、

「あー、だいじょうぶだいじょうぶ。たぶん死んでねえよ？
こいつを殺したって、別にいいことないしな」

明人は軽薄に両手を横に開いて無実をアピールする。

「どついう、ことだよ？」

「あの穂村つてのを殺したのは、まあ単純にむかついたつてもあるにはあるが、この世界で死んでも本当に現実世界に影響がないか、調べたかっただけだ。」

新東京第一高校の二年C組、だったか。
それだけ分かりゃあ十分調べられんだろ」

残った四人の鋭い視線を受け流しながら、明人はへらへらと笑った。

「問題は、現実でのオレがそれを覚えてられるかってことだが、このエルフ娘もなんとなく『ナイトメア』って単語を覚えてたみたいだし、まあ現実に戻る時に強く念じてればきつとちよつとは覚えてるだろ。

ま、失敗しても別にオレにリスクはないしな」

「そんな、ことのために……」

俺の左隣、金髪の月掛が、思わずといったようにそう漏らす。

その意見には、全くの同感だった。

そのために穂村は消えて、七瀬はまだ死にはしていないが、今も苦しんでいる。

正気の沙汰じゃない。

「で、どうする？」

明人がにやにや笑いながら聞く。

主語も何もない言葉だが、その意味は明白だった。

「オマエらは許せないんだろ、オレを。

仲間の仇ー、とかって思っちゃってるワケだろ？

だけだよぉ……それでオマエら、オレを殺せるのか？

それってオレがしてることと、一体何が違うんだ？」

「……………」

誰も、何も、答えられない。

確かに明人は許せないと、そう思う。

感情では、確かにそう思う。

だからといって、明人を殺してもいいのかと問われると、即答は出来ない。

そして、明人を殺さずに無力化出来るかどうかは分からない。

そもそも、ここで明人にかかっていって、更に犠牲が増えてしまっただらう？

……頭が、空転する。

俺の悪い癖だ。

肝心な時ほど考えばかりが頭を巡って、行動を起こせない。

笑う明人を前に、誰も何も出来ず、ただ、固まって……。

「アイスニードル！」

一人だけ、そんな葛藤を全く気にせず、動いた奴がいた。

その出所に視線を走らせると、きらめく銀髪に尖った耳が見える。
ナキだ。

「…あんなのに、つきあう必要ない」

ナキはクールに言い放つと、

「アイスニードル！」

更に連続で魔法を放つ。

放たれたのは、棒切れほどの大きさの、氷の槍。

ニードルなんて名前が詐欺に思えてくるほどの凶悪な魔法だ。

「おわっ！　こりゃっ！　すごいな！」

それでも明人は、その氷の槍を機敏な動きで後ろに跳んで回避する。

それを見て、俺も覚悟を決めた。

「悪いが、俺はここで死ぬ訳にはいかない！」

ここには、縁が、消えた幼なじみの手がかりがあるかもしれないんだ。

だから多少の無理をしてでも、俺は我を押し通す。

そんな風に俺が心を決めた時、

「アイスニードル！！」

そんな俺の決断を後押しするように、ナキが声を張り上げる。

今度生まれた氷の槍は三本。

それは微妙な時間差をつけて明人に放たれる！

「やるっ！！」

明人は二本までを姿勢を崩して避けたが、完全に体勢の崩れたその胸の中心に、最後の氷の槍が迫る。
ほとんど完璧なタイミングと位置。

俺はそれを見た瞬間、当たった、と思った。
だが、

「ッ！？」

信じられないことが起こった。

明人の胸に吸い込まれるはずだったその最後の氷の槍は、明人に当たったと思った瞬間に反転、一直線に術者、ナキを狙う！

「ナキ！！」

そして俺は見た。

明人に向かった時と同じ、視認が困難なほどの速度で氷の槍が飛び、その槍がナキにぶつかっていくのを。

見るからに質量のある氷の槍、その尖った先端がナキの華奢な体に刺さり、その身を吹き飛ばすのを、はっきりと見た。

頭の中の全部が、吹っ飛んだ。

「『オーバードライブ』!!」

小賢しい計算とか、人としての倫理とか、この世界での目的とか、そんな物はもう俺の中になかった。

頭の中が煮えたぎるほど沸騰して、なのに思考だけはいつもよりも速く動いていた。

『オーバードライブ』の加速が確認出来るや否や、俺は即座に『魔力機動』を発動、今の俺に出来る最大の速度で高速移動をして、

「借りるぞ!」

隣にいた月掛の腰から、ショートソードを抜き取った。

「ちょ、ちよつと…!?!」

抗議の声が聞こえるが、そんな物はどうでもいい。

「奏也! ナキを!」

そう言い捨てると返事も待たず、俺は明人に向かって飛ぶ。

『オーバードライブ』の有効時間はたったの6秒。

この時間の間に勝負を決める。

そもそも、能力値は軒並み向こうの方が上。

俺にアドバンテージがあるとしたら、この『魔力機動』と『オーバードライブ』のスキルを持つていることだけだ。

そして、『オーバードライブ』で攻撃力を強化するためには、『刀剣』スキルを使うために、どうしても『剣』カテゴリの武器が必要となる。

そして今、俺が使えるような『剣』は、元々トラベラーだったらしい月掛が持っていた、このショートソードしかなかったのだ。

加速した思考でそんなことを考えながら、明人を観察する。

俺が仲間の武器を奪った時はわずかに意外そうな顔をしていたものの、その顔から余裕の色は消えない。

なら、それでいい。

その慢心の隙を、俺が突く！

「来いよ」

ナイフを構えて、明人が誘う。

そして元より、俺に退くなんて選択肢はない。

俺は『オーバードライブ』で強化された『魔力機動』を全開にして、一直線に明人に飛び込んで行き、

「ああ?!」

直前で、その軌道を変える！

『魔力機動』の特徴は、足場や予備動作なしに、どんな風にも動ける所にある。

俺は明人の目の前で右に移動、それから急角度で右側から明人に襲い掛かる、V字の軌道を描いた。

当然直進を予測していた明人のナイフは空を切り、

「これでっ！！」

殺すこともいとわないう勢いで放った俺の斬撃が、明人の左肩に吸い込まれ……

パキン！

想像したより、乾いた音が鼓膜を叩く。

「くう！！」

ショートソードが明人に当たる直前、驚異的な勢いで体をひねった明人のナイフが防御に間に合った。

不自然な体勢、苦し紛れの勢いのない防御だったはずだが、

「折れ、た……？」

一瞬の接触だけで、明人のナイフは俺の振るったショートソードを真っ二つに切り裂いていた。

距離を取って地面に降りると同時に、『オーバードライブ』の効果時間が終わる。

世界が急速に重みを増し、体がねっとりした物に包まれる感覚。

呆然とする俺に、明人がこやかに声をかける。

「いや、正直惜しかったと思うぜ。」

ただ、こいつは初心者を持つにしちゃあ上等なアイテムなんだよ」「その、ナイフは……？」

かすれた声で尋ねると、明人は嬉しそうに答えた。

「こいつはな、村のある家の金庫からかっぱらってきたんだ。
昔冒険者だったとかいう爺の目の前で、ちよっと婆を脅すだけの
簡単なお仕事だったよ。」

あ、もちろん両方とも用が済んだら殺しといたけどな」
そうして、この世界じゃ死体が残らないから完全犯罪し放題だな、
と明人は笑った。

怒りが、体を駆け巡る。

だが、打つ手はあるのか？

最大の切り札を失った俺に、この半分になったショートソードで
何が出来る？

しかし、俺には考える時間すら与えられなかった。

「へへっ」

明人はなぜか俺の顔を見てそんな声を出すと、

「なっ!?!」

無防備にも、俺に背中を向ける。

そして、これ見よがしにナイフを持った右手を振り上げる。
その刃の向かう先には……。

「七瀬!?!」

傷ついた、七瀬がいた。

「……う、あ、あ……！」

戦いが続いていた間ずっと苦しみ続けていた七瀬が、振り上げられる凶刃を見てはつきりと恐怖の色を浮かべる。

「くそっ……！」

この位置からでは、かばうとか助けるとか、そんなことは出来ない。

だから、明人が七瀬を斬るより先に、背中から明人を斬る！

「こ、の……！」

それ以上を考えている暇はなかった。

再び『魔力機動』を全開にして、俺は明人に突撃する。

俺の折れたショートソードが、明人の背中に届くかと思われたその瞬間、

ソワッ……！

俺の背中を、悪寒が走る。

同時に襲うのは、半身になった明人の左手。

そこには、さっき右手に握られていたはずの、血塗れのナイフがあつて……。

（罨かつ！！）

初めから狙いは俺だった。

七瀬を救おうとやってきた俺を斬るのが明人の真の狙いで、

（これ、避けられな…！？）

走る死の予感。

回避は出来ない。

からうじてナイフの軌道に自分の剣を差し入れるのが精一杯で…。

パキン！

そして俺の耳に、金属が切り飛ばされる乾いた音が響いた。

15・牙を剥く悪夢（後書き）

オマケ

『ちよつと、飲み物を取ってくる』

自分でも弱いなと思いつつ、跳ねる鼓動を落ち着かせるために、少し時間が必要だと思った。

冷蔵庫に何かあっただろうか。

そんなことを考えながら、二、三步、キッチンの方へ歩を進めて、

『……縁？』

背中にぶつかってきた縁の熱と重みに、俺は上ずった声を出した。

何が起こったのか、分からない。

ただ、ゆっくりと俺の胸にまで回された緑の手は、小さく震えていた。

くぐもった声が俺の耳を打つ。

『昨夜、みりんが、消えたって……食卓から』
『食卓からっ!?!』

全国の煮物がピンチだった。

16・彼女のための戦い

『ごめんね、光一。さよなら……』

あれ？

剣が切られた音が聞こえてから、俺は反射的に目を閉じて『その

瞬間』を待ったが、いつまで経っても予想された痛みはやって来ない。

俺が目を開けると、そこには珍しく不可解そうな顔をしている明人がいた。

……何だ？

俺は、自分の手を見る。

半分ほどになっていたショートソードはさらに刀身を削られ、ほとんど根本くらいしか残っていなかった。

やはり明人のナイフに切り飛ばされたのだと分かる。

しかし、

「　　なんだ、今のは？」

明人のナイフもまた、刀身を折られていた。

握りに近い場所でぶつかったのか、俺のショートソードよりも短いくらいだ。

明人は狐につままれたように顔をしているが、混乱しているのは俺も同じだ。

お互いの武器のどちらかが短くなっているのなら分かる。

それはどちらかの武器が勝って、相手の武器を切り飛ばしたということだ。

だが、両方の武器が切られているというのはどういうことなんだ？

「っと！」

そこで明人が我に返り、後ろに飛び退いた。

俺からも、そして七瀬からも距離を取り、仕切り直しをする。

「どういう仕組みかは知らないが、おもしろいな。
今のがオマエの『隠し玉』か」

心の底から感心したような声で明人が言う。
そこにはもう、こちらを馬鹿にしたような響きはなかった。
こんな時だというのに、少し胸がスツとした。

とはいえ……。

『隠し玉』も何も、俺にだって何が起こったのか分かってはいない。
い。

だが、これなら行けるかもしれない。

「まだやるのか？
戦うのがキツイなら、そろそろ白旗上げてもいいんだぜ？」

わざと余裕ぶった顔を作りながら、俺はそう明人に問い掛ける。
降伏勧告だ。

死の淵に立って、少し頭が冷えた。

このまま明人と戦っても勝てるか分からないし、何よりナキや七
瀬の状態が心配だ。

ナキがやられた瞬間、カツとなってしまつて戦うことしか考えられなかったが、七瀬は傷からの出血が心配なもののまだ生きているし、ナキだつてあれ一発で死んでしまったとは考え難い。

例えここで明人を倒せても、その間にナキや七瀬が死んでしまつては何もならない。

「そいつぁ気遣いありがとうさん。

まあしかし、そいつは無用な心配つてもんだ」

だが、明人は俺の言葉を笑い飛ばすと、データウォッチを操作、一秒にも満たない時間で新たなナイフを呼び出し、折れたナイフの代わりに右手に握りしめた。

(……ちっ！ やっぱりそう簡単にはいかないか)

内心で悪態をつく。

ショートカットキーの設定による特定アイテムの取り出し。

相手はこういう状況も想定していたってことだ。

おそらく今取り出した新しいナイフはスカウトの初期装備だろう。攻撃力は確実に落ちたはずだが、向こうに武器があつてこっちにないという状況はかなり不利だ。

「いいのか？ そのナイフだつて、一本目と同じ運命を辿ることになるぜ？」

それでも俺は精一杯の虚勢を張つた。

これで相手が攻撃をためらってくれば御の字だ。

しかし、明人は愉快そうに頬を歪めた。

「いいや、無理だね」

そして何を思ったか、ナイフを持った手を背中にまわす。

(……何をするつもりだ?)

相手の意図が全く読めない。

背中に隠したナイフで抜き打ちのようなことをするつもりなのだろうか。

とにかく何があっても対応出来るように、明人の手の動きを見張っていようと目を凝らした瞬間、

ソワッ!!

再び俺を襲う悪寒!

しかも、さっきよりも明確で、何より近い!!

「く、う!!」

逡巡する暇はなかった。

ヤバイと感じた瞬間、『魔力機動』で無理矢理体をよじる。

そして、さっきまで自分の頭があった場所を振り返って、俺は驚きの声を上げた。

「なっ!?!」

そこに見えたのは、おおよそありえない光景。

刃が、空中から生えていた。

わずかな時間とはいえ、はつきりと呆け、硬直する俺。
その時、

「…気をつけて。そいつは多分、離れた空間をつなげる能力をもっている」

俺の耳に、待ちに待った声が届いた。

「ナキ!!」

もちろん俺は歓声のような声を上げて後ろを振り向き、

「敵から目を離さないで!」

……早速怒られた。

だが、これでこそそのナキだ。

一瞬見ただけだが、目立った外傷もなさそうに見えた。

また、ナキと並んで、奏也と月掛も武器を構えている。
どうやら戦う覚悟を決めてくれたようだ。

思わぬ援軍を得て、俄然勢いづいた俺たちに、

「はいはい。やめやめ！」

明人はあっさりとナイフをしまうと、両手を上げた。

「どういうつもりだ？」

また何かの計略だろうか。

俺は決して油断しないように、折れた剣を構えながら問い掛ける。しかし、明人の瞳からは先程までの爛々とした輝きが消えていた。

「さっき言っただろ？」

別にオレとしては、今オマエらと戦う旨みつてのは実はほとんどないんだよ。

しかも、ユニークスキルのタネまで割れちゃった。

ネタのわかってる手品ほど、見ててつまんねえもんもねえだろ？」

「そんな理屈、信じろってのか？！」

今まで散々俺たちを騙しておいて、よくも言う。

それ以上に、ここまでやっておいてつまらなくなったから帰るなんていう発言が、俺のはらわたを煮えくり返らせた。

「別に信じなくたって構わねえよ。
ただ、まあ、そうだな。」

今から……二、三日は襲わないでいてやるよ。
約束する」

俺たちはそう言われてもまだ、油断なく身構えていた。
今更そんな口約束、信じられるはずもない。

だが、俺の心は確かに休戦に傾いていた。

だから明人がナキを警戒しながら下がっていても、動かないし、
動けない。

「じゃ、ま、そういうことでな！」

最後に明人はそう言つと、何の気負いもなく俺たちに背を向け、
森の奥、村とは反対の方向へ歩き出していつてしまった。

「……いまなら、殺せるかも」

明人の後ろ姿にナキがぼそつとつぶやくが、俺は首を横に振つた。
最大の脅威だった業物のナイフは潰したが、高い敏捷と強化の値、
それに『離れた空間をつなげる』らしいユニークスキルはいまだに
顕在だ。

正直、今からもう一度戦つても勝ち目があるか分からないし、俺
にはまだ人殺しが出来る自信がない。

ここで逃がして後で不意打ちなんてされたら余計に勝ち目はない

が、俺は不思議とあいつは約束を守るような気がしていた。
それに、何より、

「今は、それより七瀬の治療だ。」

ナキはあいつが戻って来ないか、見張りを頼む」

事は一刻を争う。

俺は倒れたままの七瀬に駆け寄った。

「……ああ、う、ああ……！」

七瀬は右手に槍を握ったまま、左手で傷口を押さえて苦しんでいる。

「七瀬！ 傷薬だ！」

インベントリから取り出した傷薬を、七瀬に渡そうとするが、

「……ひっ！ く、るな！ くるなあ……！」

錯乱した七瀬は、近づく俺を警戒して、槍をぶんぶん振りまわす。

「七瀬！ 俺だ、光一だ！」

もう明人は行った！ もう大丈夫だから！」

そう必死に呼び掛けるが、七瀬からの反応は槍の一撃だった。
これじゃあ近付けない！

「奏也！ 月掛！ 何か、傷薬以外に回復手段はないのか！」

俺は後ろを振り返って尋ねるが、二人は首を振る。

「HP回復スキルはあっても、傷を癒すスキルは……」
「わたしは、戦闘系だから……」

そう話している間にも、七瀬の傷口からはどんどんと血が溢れ出している。

「くそっ！」

俺は覚悟を決めた。

槍がまた目の前を横切った隙を見計らって『魔力機動』を発動させる。七瀬に思いきりぶつかって、地面に組み敷く。

「ひう！ やめ、やめ、てえ……！！」

半狂乱になった七瀬の槍が、俺の背中を打つ。
だが、

「これ、を……！」

俺はその間に、傷薬を開けて七瀬の傷口に振りかける。

「あ、あああああああああ……！！」

耳を覆いたくなるような絶叫が響いた。

傷口からは泡と煙が立ち、相当な痛みが七瀬を襲っていることが想像出来る。

だが、こうでもしなければ七瀬は助からない。

「七瀬！ 大丈夫、大丈夫だから！！」

七瀬の体を必死で押さえつけながら、俺は傷薬を掛け続ける。
ランクの低い薬だからか、なかなか傷は塞がらない。

「ああああ！！ あああああ！！」

七瀬の抵抗が激しくなる。

「があ！！」

偶然にも振り回された槍の穂先が、俺のわき腹に当たり、思い切り肉をえぐられる。

それでも、

「だい、じょうぶ。七瀬は、大丈夫だから……！！」

俺は、薬を振りかけるのをやめなかった。

脇腹が熱い。

疲労と激痛で、気が遠くなりかける。

だが、七瀬の傷口は、確実に塞がってきていた。

（もう少し！ あとちょっとだけ、こらえれば！）

それだけを必死に念じて、半ば七瀬にしがみつくようにして、治療を続ける。

そして、

「…ななせ？」

もうそろそろ傷口も塞がろうという時、急に下からの抵抗がぱたりと止んだ。

慌てて彼女の顔を見ると、七瀬は目を閉じていた。

「七瀬っ！？」

まさか、間に合わなかったのか？！

俺は慌てて脈を確かめようとするが、

「…スリープの魔法をかけた」

上から、誰よりも心強い、ぼそつとしたつぶやきが降ってきた。声の主が誰かなんて、もはや確かめるまでもない。

「流石だな。そんなスキルも覚えてたのか？」

俺が問うと、ナキはにこりともせずに応えた。

「…いま、覚えた」

そう答えたナキの目の前には、確かにデータウォッチのスキル画面。

「ははっ！ おまえはやっぱ、最高だよ」

こいつと出会えたことが、この世界での俺の最大の幸運だと素直に思えた。

訳もなく、大声で笑いだしたくなる。

けれど、実際にはそんな体力も気力も残ってなくて、

「んじゃ、あと、たのんだ……」

頼れる相棒に全てを任せ、俺は意識を手放した。

17・リスタート

夢は、見なかった。

「……………」

起きた瞬間、氷点下を下回る絶対零度の瞳に迎えられた。
なんともさわやかな目覚めだ。

「おはよう、ナキ」

「……………」

一応あいさつしてみるが、返事はなかった。
だが、やや間があつて、

「……気絶したあなたは村のベッドに運ばれて、いままで、三十分ほど寝ていた。」

それと、彼女も無事。まだ寝ている」

これからの俺の質問を先回りしたみたいな状況説明をしてくれる。
彼女、というのは七瀬のことだろうか。

七瀬が無事だというのはとにかく喜ぶべき材料だろう。

「……………」

「……ええつと」

そして、状況が理解出来た途端、話題が消えた。
ナキのまるで感情の浮かんていない顔が気まずいので、無理矢理に話をひねり出す。

「明人は、睡眠欲なんてないって言つてたけど、あれは嘘だな。
あの時、ものすごく眠くなって……」

「睡眠中は回復の速度が速くなるという記述が本にあった」

「あ、いや、その……すいません」

ナキさんは容赦なかった。

雑談を振つたはずが、なぜか俺が怒られて終わる羽目に。

このままでは良くないと、話題を変えることにした。

「あ、あー、とにかく、さっきはありがとう！」

明人への攻撃も凄かったし、スリープの魔法で手助けしてくれた
り、本当に助かった！」

「ふざけないで」

「…え？」

素直な感謝を伝えたはずなのだが、なぜだかその言葉が一番、彼女を怒らせたらしい。

隠し切れない憤りを瞳ににじませながら、ナキが俺のいるベッドまで近付いてくる。

「な、ナキ…？」

俺が上ずった声を上げても、ナキは止まらない。

ナキはベッドに体を半分起こした体勢の俺を見下ろすと、スツと手を伸ばした。

ナキの小さな手が俺のわき腹、ちょうど七瀬の槍にえぐられた箇所に触れる。

「ッ！」

痛みを覚悟したが、もうそこにあっただけの傷は完治しているようだ。

ただ、布越しにも分かるナキのひんやりとした手の感触が何だかくすぐったかった。

「お、おい…？」

顔を上げてナキの顔を見て、ギョツとする。

その顔は一見いつも通りの無表情だが、見て分かるほどに強く、その薄い唇を噛み締めていた。

「やめろって、唇切れるぞ」

むしろ俺が慌てて、わき腹に伸びていた手をつかんで制止する。

「……………」

俺の忠告が分かったのだから分かってないのだが、ナキはなんだこいつ、みたいな無機質な目でひとしきり俺を見下ろして、それから唐突に俺から距離を取った。

そのまま俺の言葉には結局何も答えることなく、部屋の外に向かって歩き始め、

「……………次は、もっとうまくやる」

それだけ言い残し、ナキは家から出て行ってしまった。

そして、

「やあどうも。こうして二人きりで話すのは初めてですね」

その代わりのように入れ替わりでやってきたのは、奏也だった。珍しく、金髪の腰ぎんちゃくの姿も見えない。

「お前が俺をここまで運んでくれたのか？」

俺が先制攻撃代わりにそう聞くと、奏也は肩をすくめた。

「まさか。あなたを運んだのは、彼女ですよ」

「彼女？ ……もしかして、ナキが？」

あの細い体で俺を運んでいく映像が、どうやっても思い浮かばない。

「どうやら僕は彼女にあまり信用されていないようですからね。

あなたの体には、指一本触れされてはもらえませんでした」

「やめろよ。そんな言い方するとお前が俺に触りたかったみたいじゃないか」

俺が言つと、

「ふふふ……」

奏也は含み笑いをした。

やめろ、マジ怖いよそれ。

が、すぐに真顔に戻る。

「とまあ、そんな冗談はともかく」

良かった、冗談だったのか。

「戦力が問題です」

「戦力？」

奏也はうなずいた。

「パーティの最大人数は8人だと言いましたよね。

最初、僕は7人いました。

しかし今はたったの4人です。

これは最大人数のたったの半……」

「…待て」

奏也の言葉を、俺は遮った。

「4人じゃない。5人だろ？」

……七瀬だつて、助かったはずだ」

たぶん奏也は、まだ七瀬の目が覚めていないから数に入れなかっただけなんだろう。

だが、それはどうしても見過ごしておけなかった。

「……そう、だいいですけどね」

やけに含みのある言い方をする。

「どういう意味だ？」

自然、言葉が冷たくなった。

「体が治っても、心が治るとは限らないという話です。

……あなたは、彼、四ツ木明人のことをどう思いますか？」

「どう、って……」

正直、思い出したくはない。

俺たちは、あいつ一人に完全に踊らされた。

後から冷静になって考えてみると、色々と見えてくることもある。
ナキが言っていたが、あいつのユニークスキルは『離れた空間をつなげる能力』だそうだ。

『離れた空間をつなげる』ではイメージし難いが、要は『小さなどこ〇もドアを作る能力』とも言えば分かり易い。

それが本当だとしたら、不可解だったいくつかのことが理解出来るてくる。

あいつと戦っている時、右手に持っていたはずのナイフがいつの間にか左手に移動している、という場面が何度かあった。

あれはあいつのスキルで右手と左手の傍にそれぞれ『ドア』を作り、そこを通じてナイフの受け渡しをしていたのだろう。

たぶん、ナキの魔法を跳ね返したのもそうだ。

『ドア』の入口と出口の向きを反対にすれば、疑似的に相手の攻撃を跳ね返すことだって出来るはずだ。

更に言うなら、戦闘中に何度も走った悪寒。

あれは明人のスキルが発動したことを、俺の『魔力感知』が捉えて警告してくれたのだと考えられる。

それを踏まえるとスキルの相性は悪くはないが、正直二度とは戦いたくはない相手だ。

俺がそれを素直に伝えると、

「それくらいで済んでいるのなら、あなたは大丈夫だということですよ」

と笑顔で答えられた。

「そうかよ」

自然と言葉はぶつきらばうになる。

言いたいことは分かる。

七瀬は明人とのことがトラウマになって、まともに戦いなんて出ないだろうと言いたいんだろ。

もしかするとそれは真実なのかもしれない。

しかし、他人の心まで勝手に決めつけるような話し方は、どうしても俺に不快感を覚えさせた。

「とにかく、僕らのパーティは最大でも5人にしかないということです。」

今、月掛さんにもう一度あの大樹の所まで人を探しに行ってもらっています、望み薄でしょう」

「ちよつと待て！ 月掛を一人で行かせたのか？！」

パーティの人数云々より、そのことが俺の気にかかった。

まだ明人がどこにいるか分からないのに、単独行動させるなんて正気の沙汰とは思えない。

しかし、奏也は全く動揺しなかった。

「はい。むしろ、今が一番安全だと僕は思っていますから。彼が戦わないと約束した今が、動くチャンスなんです」

「あいつが約束を守ると？」

「さあ？ でも約束をした直後の方が、気が変わる可能性も少ないでしょう。」

「僕は出来るだけ早く、戦力の充実を図らなければならないんです」

「……………」

俺は黙ってしまった。

俺自身、あいつは約束を守るのではないかと思っている。

一方でほんの気まぐれからあっさり約束を破るような気もしているが、その危険性は約束をしてから時間が経てば時間が経つほど増していくだろう。

それを正確に見て取って、トドメとばかりに奏也は言った。

「今僕らが一番警戒しなくてはならないのは四ツ木君だと思います。しかし、彼を恐れてグズグズとこの村に留まっていたでは、逆に最悪の事態を招きかねません。」

僕の計画はこうです。

この村で数日、多少の無理をしてもレベルを上げます。そしてレベルが上がったら、四ツ木君から離れるために、一気に大きな町を目指して進む」

「大きな町について……………」

人に紛れたくらいであいつがあきらめるのか？」

明人はむしろ、他人の目があるとはしゃぐタイプのような気がするのだが。

奏也は首を振った。

「彼が本気であれば無意味でしょう。」

ですがそもそも、彼の興味が長く持続するとは思えません。

他にたくさんの人がいる町になど出れば、すぐに僕たちのことな

んて忘れるでしょう」

「それは……あるかもな」

明人が俺たちを攻撃したのは、ナイトメアの仕様を確かめたかったのが半分、気まぐれが半分、といった所だろう。

現状、特に俺たちに特別な興味を抱いているという感じはない。

なら、他に興味をひかれそうな物が多い町に脱出するというのは、単純だが有効な離脱手段になり得る。

ここまで聞けば、奏也がどういう方向に話を誘導したいのかもそろそろ見えてきた。

「で？ お前は一体、何をやりたいんだ？

そこまで言うなら、レベル上げの手段についてももう目星はついているんだろ？」

そして案の定、にやりと笑う奏也。

さっきまでも薄々とは思っていたが、今、確信した。

こいつたぶん、結構性格悪い。

俺がそんなことを考えているなんて知る由もなく、奏也は心持ち自慢げに話す。

「はい。あなたが気絶している数十分の間に村を回って、色々なイベントを収集していました。

そこで見つけた、短時間でこなせそうで実入りの多いイベントは二つ。

その内の一つを、これから現実に戻るまでの三時間で済ませてしまいたいと思っています」

「……どんなイベントだ？」

俺の問いに、奏也は性格の悪い笑みを更に深めて、言った。

「目的は、東の森に現れた特殊モンスターの撃退。
レベル13のユニークモンスター『ヘルサラマンダー』の討伐で
す」

18・遠い人たち

奏也から今回のモンスター討伐イベントの話聞いた俺は、もちろん反対した。

「ちよつと待て！ レベル13のモンスター？

流石に無謀すぎるだろ、それは！」

俺たちはまだ、全員がレベル一桁だ。

いきなり二桁レベルのボスを倒すなんて、無茶を通り越して無謀に思えた。

「村で次の移動場所についても検討を重ねました。

大樹から北に進めば大きな町に着くそうですが、その途中のフィールドでは15レベル前後のモンスターが現れるそうです」

「だからってなあ！」

レベル差が10もあるような敵と戦って勝てるとは思えない。

「よく、考えてみて下さい。

クラスの成長値を見れば分かりますが、1レベルにつき能力値は平均で2ずつ上がります。

10レベルだと、それぞれの能力値に20程度の差が出るということです。

それは結構な差ではありますが、初期能力値やスキルでカバー出来ないこともないと僕は思います」

「その根拠は？」

「あなたは四ツ木君と一対一で渡り合いました」

そう言われた途端、俺は一瞬言葉に詰まった。

確かに、明人の方が俺よりも能力値は高かったし、強力な武器と

いう要素も含めれば、その戦力差はあるいは20程度の能力値差を越えるかもしれない。

その明人と、スキルを駆使して何とかやりあったというのは嘘ではないが……。

明人の武器が破壊された原因ははまだ謎で、それも含めてもう一度やれと言われても出来るか分からない。

しかし、その辺りのことを言い出す前に、奏也が言葉をついだ。

「もちろん、次は僕らもためらいません。

このメンバーが4対1で戦えば、たとえばレベル13のモンスターが相手でも後れを取ることはない、僕は信じています」

「奏也……」

はつきりとそう言い放つ。

その覚悟には、少し胸打たれるものがあつた。

しかしその直後、

「しかも、物凄く実入りがいいんです、このイベント。

一匹モンスターを倒してドロップアイテムを届けるだけで、12000ウイルももらえるんですよ？」

満面の笑みでそう口にする奏也の言葉に、

（やっぱこのイベント、危ないんじゃないかなあ……）

俺は不安を隠せなかったのだった。

俺は奏也との話を一区切りつけると、運び込まれた家から外に出た。

そして、

「……おお」

思わず感嘆の息を漏らす。

穂村はRPGに出て来るような普通の村で、特徴なんてないと言っていたが、それは嘘八百もいい所だった。

そもそも、RPGに出て来る普通の村が実際にあつたら特徴がないはずなんてなかった。

どこの匠が作ったんだと言いたくなるような、木と藁で作った感じの、今時現実世界じゃお目にかかれな家々が並び、更にその屋根にはもさもさと木の葉がつけられてアフロみたいに盛り上がっていた。

もしかすると、木に偽装してモンスターから姿を隠そうとしているとかかもしれない。

まあ、横から見ると普通に家だと丸分かりなのであまり意味はなさそうだが。

「ここは、ハリルの村と言うそうですよ？」

思わず足を止めてしまった俺に、奏也が横に並んで言う。

「初めて見ると、それなりに壮観でしょう？」

「ああ……」

俺は素直にそう答えるしかなかった。

こんな景色を見せられると、改めてファンタジー世界に来たと実感させられる。

「折角ですので村を案内してあげたい所ですが、あまり時間がありません。」

月掛が戻って来る前にこちら準備を整えておきましょう」

「ああ。そうだな。」

ナキも、探さないといけないし……」

俺も渋々と景色から目を引きはがしてうなずいた。

現実に戻るまで、残り2時間半程度しか猶予がない。

イベントをこなすなら、観光は後回しにするべきだ。

「なら、道具屋に行きましょうか。」

装備もアイテムも、そこで全て手に入ります。

月掛にも、ここにいなかったら道具屋まで来るようにと言っておきましたから」

道具屋、と言いながら、簡単な武器防具も扱っているらしい。

小さい村なので、別々の店舗を構える必要も余裕もないんだそう
だ。

そんな説明を受けながら歩いていると、村の人とすれ違った。

「おや、旅人さんかい？」

なあんもない村だけど、ゆっくりしていきなよ」

「ありがとうございます」

通りすがりに声を掛けてくる村の人に、如才なく返事を返す奏也。
一方の俺は固まってしまって、何も言えなかった。

人が、あまりにリアル過ぎた。

それこそ、現実世界の人間と何も変わりがないような……。

「……びっくりしましたか？」

それを見透かしたように、

「この村にいるのは、僕たち以外は全て『ノークラス』、つまりN
PCなんだそうです。」

なのに誰もが自然に話し、考え、行動しています。

まるで、現実の世界の人間と同じように……」

奏也が口元に笑みをにじませながら、語る。

「そしてこれは、まだ誰にも言っていないことなのですが……。彼らは一度も見たことがないはずなのに、『テレビ』や『パソコン』、『インターネット』なんて言葉についての知識を持っているんですよ。」

にもかかわらず、彼らはここで原始的な狩猟民族のような生活を送っている。

何の疑問も持たずに、ね……。

これって結構、恐ろしいことだと思いませんか？」

あくまで柔和なその笑顔に、俺はぞわつと体の毛が逆立つのを感じた。

あの本から得た知識で、俺たちがまだ奏也たちに伝えていないことがある。

ユニークスキルを決める、選別の儀式。

その儀式に失敗した者が、『ノークラス』、つまりこの世界のNPCとなって、世界の操り人形にされるという荒唐無稽な仮説。

黙り込んだ俺の様子から、一体何を読み取ったのか。

「つまらないことを言ってしまったね。」

道具屋に案内します。

予定通り、月掛が戻るまでにこちらの準備を整えましょう」

奏也は話を切り上げて、先に立って歩き出した。

狭い村だ。

道具屋には、ほんの二分ほどで着いた。

「よう！　いらっしやい！」

かけられた声に中を覗くと、店のカウンターには気の良さそうなおじさんがいた。

やはり彼も普通の人間としか思えない。

奏也の言葉が脳裏に蘇る。

いや、今は考えても仕方ない。

「……武器、ありますか？」

俺はとりあえず、自分の目的を優先することにした。

「まいどありい！」

おじさんの威勢の良い声を聞きながら、俺たちは店を後にする。

店にはポーシヨンと傷薬の他には、それぞれの職の初期装備になりそうな武器が種類ずつ置いてあるだけだった。

俺はポーシヨンを2本、傷薬を2本、ショートソードを2本買った。

値段は、ポーシヨンが1本200ウイル、傷薬が100ウイル、ショートソードが600ウイル。

合計で1800ウイルになるはずだったが、

「お、兄ちゃんこれから東の森の化け物退治しに行くんだって？

あいつらおっかないからね！

兄ちゃんの活躍に期待して、1500までまけといてやるよ！」

気の良さそうな店のおっちゃんが気の良い所を見せて、300ウイルまけてもらった。

とはいえ、それなりのお金。これによって、大樹に着いた時には5000近くあった所持金が、3200にまで減ってしまった。

それなりに懐は痛んだが、止むを得ない出費という奴だろう。

ちなみに、だが、ブレイドラビットを倒すと一体につき80ウィル、グリーンウルフを倒すと100ウィル程度もらえるらしい。どう考えても50匹もあいつらを倒した覚えはないので、なぜ5000もウィルが溜まっていたのかは不明だ。

ついでに言っておくと、どうして600ウィルもするショートソードを2本も買ったかというところ……。

「奏也様！　ただいま戻りました！」

今ちようどこちらに駆けてくる、金髪の弓使いのためである。

月掛は横にいる俺を気にも留めず、敬愛する奏也の所に報告をしに走り寄って行った。

まあ内容については聞かなくても分かる。

誰も連れてきていないのだから、大樹の傍には誰もいなかったのだろう。

それはそれとして、

「あー、月掛？」

楽しそうに報告をしている月掛に横から近付いて、声をかける。

「……何？」

ただ話し掛けただけのなのに、凄い目付きをされた。

なによせっかく奏也様に褒めてもらってたのに邪魔しないでよね、みたいな心の声が聞こえてくるようだ。

一瞬心が折れそうになったが、かろうじて踏みとどまって、買ったばかりのショートソードを月掛に差し出した。

「悪かったな。」

お前の剣、勝手に使って、壊しちゃって。
遅れたけど、これ、代わりに使ってくれ」

俺の言葉に、月掛はきょとした顔をして、奏也をうかがうように見る。

奏也は、

「なるほど、そういうことでしたか……」

とつぶやいて、月掛を促すようにうなずいた。

ここで月掛もうなずいて、俺の差し出したショートソードを受け取る……と綺麗に収まったはずなのだが、しかし、

「いらないわよ、そんなの」

月掛は、俺が差し出した手を、押し返した。

「え？ あ、いや、でもな……」

まさか突き返されるとは思っていなかった俺はまごついてしまうが、そんな俺に、月掛は両腕を腰において、

「あの時は一応、予備の武器として持ってたけど、あたし、弓使いなの。」

だから、そもそも剣なんていらないの。

……わかる？」

背が低いながらに精一杯背をそらして、上から目線でそう言った。

「それにあんた、トラベラーなのに武器持ってなかったってことは、初期装備のショートソード、壊したんでしょ？」

「まあ……」

「ふん！ やっぱりね！

あんたみたいなヘボトラベラーは、また武器を壊すわよ、きっと

！」

「そんな決めつけられても……」
「というか、話がズレて来ている気がする。」

「それで結局、何が言いたいんだ？」

痺れを切らして俺が尋ねると、

「あ、あんた頭わるいんじゃないの！？」

だ、だから、また武器を壊されたら迷惑だし、それはあんたが使
いなさいってこと！！」

月掛はなぜか真っ赤になりながら叫ぶ。

「え、でも、いいのか？」

そして、俺の確認の言葉に更に顔を赤くすると、

「いいのかって……あ、あたりまえでしょ！

ば、バカ！ もう知らないわよ！！」

そんな言葉を吐くと、一目散に走って逃げてしまった。

能力値補正だろうか。

意外な俊足で、あっという間に見えなくなる月掛。

そして、

「ええと……なんでだ？」

それを間抜け面で見送る俺。

意味が分からない。

本当に、意味が分からない。

何で月掛が逃げるんだ？

混乱している俺に、奏也が苦笑しながら近付いてきた。

「すみませんね、普賢君。」

「ここだけの話、実は彼女……………ツンデレなんです」

「ああ、なるほど、ツンデ……………うん？」

こんなに近くににいるのに、何だか奏也まで遠くに行ってしまったような気がした。

良く分らないが、とにかく世の中、色んな人がいるらしい。

一度は走り去った月掛だが、当然別に行き場もなく、すぐにバツが悪そうな顔をして戻ってきた。

今は奏也の陰からこつちを見て、うーっと唸って威嚇している。

もしかすると情緒不安定な感じの子なんだろうか。

正直あまり関わり合いになりたくないかと横に視線をそらしてみると、ちょうどこちらに歩いてくるナキの姿を見つけた。

「ナキ！」

これぞ天佑と、俺はナキに駆け寄った。

足音から、少し遅れて奏也と月掛もついてくるのが分かる。

「…なに？」

あいかわらずの落ち着いた、というよりは冷たく突き放したような口調に、なぜか安心してしまう。

俺は、奏也から聞いた話を踏まえ、これから東の森にモンスター討伐に行きたいと説明した。

敵は強いかもしれないが、大量のウィルが入るし、危険なモンス

ターを倒すのは村の人たちのためにもなる。

そんな風に説得したのだが、なぜだか話せば話すほど、ナキの瞳に懐疑的な色がにじんでいき、

「化かしあいなら、他所でやって。

私は、茶番につきあうつもりはない」

そう言うのと、俺たちに背を向けてどこかに歩き出してしまった。

「ナキ?! ちょっと待ってくれ!」

俺は慌ててその後ろ姿に呼びかけるが、振り向いてすらもらえない。

何が彼女の逆鱗に触れたのかは分からないが、どうやらひどく怒らせてしまったらしい。

だったらせめて、と思い、

「分かった。ナキが嫌なら一緒に来いとは言わない。

でも、もしこの村に残るんなら、七瀬の面倒を……」

そう口にしたのだが、

「私にも、行くところがあるから」

それすらも断られ、ナキはとうとう振り返りもせずに、村の外れの方に歩き去っていつてしまった。

呆然と立ち尽くす俺の後ろから、

「……感じわるいヤツ」

とつぶやいた月掛の声が、妙に耳に突き刺さった。

19・最初のモンスター、討伐イベント

森を駆ける。

現実世界では不可能なくらいの速度で、俺たちは一心不乱に森の中を駆け抜けていた。

現実の俺であれば、仮にこの速度で走ることが出来てもすぐに息切れして足を止めてしまっただろう。

だが、この異世界での体は休憩すら必要としない。

立ち止まるのは、分かれ道で奏也が方位磁石を確かめる時と、

「敵だ！ 前方、グリーンウルフ2！」

俺がモンスターを発見した時だけ。

「分かりました。…月掛！」

「はいっ、奏也様！」

声と共に、グリーンウルフ目がけて弓が引き絞られる。

俺はそれを横目で確認しながら、グリーンウルフに気付かれないギリギリの距離まで近付いて、

「行きますっ！」

そんな月掛の声が耳に届くと同時に、『魔力機動』で前へ飛び出していく。

ヒュン！

そして、俺の耳元をかすめて追い抜いていった矢が先頭のウルフ

に刺さり、たまらず苦悶の声を漏らした所を、

「キャウン!!」

更に追い打ち。

ウルフの上げるいじめられた犬みたいな鳴き声に気が咎めるが、
こればかりは仕方ない。

無防備な頭を斬りつけて、まず手負いの一匹を仕留める。

先頭の一匹が粒子に変わる頃には二匹目がこちらに向かってきて
いるが、一対一なら問題ない。

「よっ、と!」

飛び掛かってきた所を『魔力機動』で平行移動、後頭部に一撃、
のコンボで仕留める。

新たに手に入れたショートソードとボーナスで上げた強化のおかげで、
援護なしでも一撃で倒すことが出来た。

実は木の棒時代はグリーンウルフだと当たり所によっては一撃で
死なないこともあったのだが、村で剣を買ってからそんなことも
起こらなくなった。

「……ふう」

俺が剣を腰に戻しながら息をつくと、

「お疲れ様です」

と奏也が声を掛けてくれて、

「ふん!」

と月掛が鼻を鳴らした。

今回のイベントに参加したのはこの3人。

メンバー構成は、旅人に弓使いに吟遊詩人という異色のトリオだ。バランスも何もない適当な編成なのだが、トラベラーである俺が前衛を務め、弓使いの月掛が遠距離攻撃、吟遊詩人の奏也が回復と補助で……なんて説明してみるとまるでまともなパーティーみたいで怖い。

素早くウルフのドロップを回収、すぐにまた走り出しながら、俺はもう一度、俺たちが受けたイベントを確認した。

ナイトメアイベント『ヘルサラマンダーを倒せ』

【イベント達成条件】

ユニークモンスター『ヘルサラマンダー』を倒し、そのドロップアイテムである『火蜥蜴の徽章』をハリル村の『トマス』に渡す

【イベント達成ボーナス】

12000ウイル

『炎のシミター』×1

【イベント失敗条件】

1. 『火蜥蜴の徽章』の破壊

2. 『トマス』の死亡

【イベント失敗ペナルティ】
なし

【受諾可能グレード】

1)

これが、俺たちの受けた最初のイベントの内容だ。

依頼はパーティで受けることが出来、その場合、報酬のウィルは山分けでなく、全員に丸々同じだけ入るらしい。

つまり俺たちは俺と奏也と月掛でパーティを組んで受けたので、全員に12000ウィルずつ、合計36000ものウィルが手に入ることになる。

破格の報酬だが、その分のリスクも想像出来るイベントだ。

正直に言えば、ナキが参加を断った以上、奏也がこのイベントを受けるとは思わなかった。

これは中止かなと思ったのだが、奏也の判断は逆だった。

「見ていると、彼女は他人に対して無関心なようですが、あなたには甘い所があります。」

あなたが死地に赴くというのなら、多少の無理をしてもついていくか、あるいはあなたの参加自体をやめさせようとするでしょう。その彼女が同行せず、あなたがイベントにチャレンジするのも止めなかったということは、つまりこのイベント、危険性はそう高くないと彼女が判断したということです」

それを聞いて、こいつとんだだけポジティブシンキングなんだ、と俺は呆れたが、ナキに同行を断られたことで、俺も引っ込みがつかなくなっていた。

こうなったらばつちりとモンスターを倒してナキの鼻を明かしたい、という気持ちだが、俺の中でメラメラと燃えていた。

奏也が言うには、情報収集の結果、『ヘルサランダー』は大樹から歩いて二時間程度の場所にいる可能性が高いらしい。

村を出た時点で残り時間は2時間と少し。

戦闘や搜索の時間を考えると、やはり時間が少し厳しい。

そこで、自分たちの限界を確かめる意味も込めて、全員で駆け足での行軍となったのだった。

「次の分かれ道、右です」

「分かった！」

「りようかいです、奏也様！」

方位磁石を持っている奏也が東に近い方向を調べ、それに従って道を選ぶ。

かなりアバウトな道の選択だが、それでも問題ないらしい。

また、これだけの速度で走っているのに、敵と遭遇することすら稀だった。

森の中の風景はどこも似たり寄ったりで、正直ナキと二人で歩いてきた道と同じように見えるが、エンカウント率にはかなりの差があるらしい。

しかし、時間がない時にこれは嬉しい。

この調子なら、一時間もかからずに目的地まで着けるかもしれない。

「普賢君！　そろそろ目的地が近いかもしれません。

モンスターと遭遇したら、その様子を詳しく観察するようにしてください」

走りながら、奏也がそんなことを頼んでくる。

「モンスターの様子を？　どうしてだ？」

俺も走りながら叫び返す。

「イベントモンスターののような強力なモンスターがいると、それ以外の雑魚モンスターは逃げ出すそうです。

なので、特定の方向からモンスターが逃げてきたり、特定の方向を見て怯える仕種を見せれば……」

「そっちに『ヘルサラマンダー』がいるってことか、了解！」

それなら話は早い、と思ったが、奏也の言葉はそれで終わりではなかった。

「それに『ヘルサラマンダー』は、レベル9のモンスター『ヘルリザード』を何匹も連れて、ここら一帯を支配しているそうです。

一匹でも『ヘルリザード』がやられれば、ボスである『ヘルサラマンダー』が寄ってくるそうですから、すぐに見つけられますよ」

なんて新情報を、あっさりと告白してくる。

「聞いてないぞ、そんなこと！」

倒すのは『ヘルサラマンダー』だけじゃなかったのか？！

俺がたまらず叫ぶが、

「だって、事前に言っていたら、来てくれなかったかもしれないじゃないですか」

そう言つて、黒い笑いを浮かべる奏也。

なんて奴だ。

「大丈夫。僕だって死にたくはないですし、勝てそうになかったら逃げましょう。」

まだBPは残っているんですね？

いざとなればそれを全部俊敏に振れば、最悪あなただけなら簡単に逃げられるはずです」

「お前なあ！」

ここまで来た以上、こいつら二人を置いて、自分一人で逃げるなんて出来そうにない。

そして恐らく、こいつはそんな俺の性格すらも織り込んで、こんなことを言っているのだ。

俺がもう一度、何か文句を言ってやろうとした時だった。

「ッ！？ ちょっと、待って下さい！

あそこ、何か、様子がおかしい」

珍しく奏也が切羽詰まった声を出して、俺を制止した。
そして俺も、前方、奏也が見つけた物と同じ物を見て、硬直した。

青々とした木が立ち並ぶ中、俺たちが進もうとする先の木々だけが、一面に枯れていた。

「もしかすると、これもイベントの一部かもしれません。

……慎重に、進みましょう」

奏也が心なしに声を潜め、そう提案してくる。

俺も月掛も、これには一も二もなくうなずいた。

周りを見回す。

意識的に『魔力感知』も発動させて魔物の気配を探ってみるが、近くに敵がいる様子はない。

油断出来る状況ではないが、少しだけ緊張を緩める。

「あ、あれ……！」
すると今度は、月掛が声を上げた。
その指差した先には……。

「なんだ、あれ？」

いくつもの小さなクレーターが出来た地面があった。

こんな物を見たことがない。

何か強い力が加えられて地面がえぐられたのだろうか、どれだけの力が加えられたらこんな風に地面に穴が開くんだ？

まるで、人間離れた力を持った乱暴な子供が、癇癪を起こして何度も何度も地面を叩いたような……。

「こんなの、ふつうじゃない……」

つんとした生意気な顔にはつきりと怯えの色を乗せて、月掛がそうつぶやいた。

「月掛……？」

俺に見られていたことに気付くとハッとして強気な表情を繕ったが、湧き上がる不安は隠せていない。

さりげない様を装って、俺たちの方に近付いてきた。

「……行きましょう」

奏也もそのクレーターを興味悪げに見ていたが、退く気はないようだ。

俺たちを促して、先頭に立って枯れた森へと足を進めていく。

「……う」

それを見て、月掛が躊躇う素振りを見せた。
奏也の指示には従いたいが、恐怖に固まった足がついていけない
のだろう。

俺はその小さい肩を、ポンと叩いた。

「なっ、なっ、にゃあ！」

すると、叩いたこっちがびっくりするくらい飛び上がって、口を
ぱくぱくさせた。

「大丈夫だ。奏也だって、引き時は心得てるさ」

何か言われる前に、そう言っでやると、

「あ、あつたりまえでしょ！」

あたしだって、奏也様を信じてるわよ！」

とこつちに小声で怒鳴って、ぱたぱたと奏也の方に駆けて行った。

やれやれ、とは思うが、月掛が元気になったのならそれが一番だ。

「ほらー！ あんたもいつまでもびびってないで、早くこつちに来
なさいよ！」

という声に背中を押され、俺は奏也たちの後を追った。

「生命力が奪われている、という感じですね」

見渡す限りの枯れた森を歩きながら、先頭に行く奏也がぽつりと
漏らした。

枯れてしまった木を良く見ると、全体的にしおれ、確かに生命力
が感じられない。

そうして木々が全面的に生命力を失っているのに、地面がぬかるんだように湿気を帯びているのが不気味さを煽る。

それにしても、これだけの広い範囲の木から力を奪うような物とは一体なんなのか。

想像もつかないだけに、恐怖を感じずにはいられない。

それに、枯れた森の中に入ってからもう数分が経つが、まだ『ヘルサラマンダー』はおろか、他の雑魚モンスターの姿も一度も見かけていない。

これは明らかに異常な事態だと言えた。

ちなみに隊列だが、先頭が奏也、月掛、しんがりが俺、という並びに自然と変わった。

本当は俺が先頭を行くべきなのだが、この不気味な森を積極的に進む勇氣は俺にはなかった。

月掛もやはり恐ろしいのか、たまに後ろを振り返っては俺がいるのを確認してホッとした様子を見せ、その後なぜか目をつりあげて不機嫌そうな顔をして前を向く、という奇行を繰り返している。

本当に何を考えているんだか。

俺がこっそりため息をつこうとした時、淀みなく歩いていた奏也の足が、不意に止まった。

また後ろを振り向こうとしていた月掛がその背中につっかりそうになり、慌てて足を止めた。

「何があつたんだ？」

俺も疑問の声と共に奏也の肩越しに前を見て……その理由を知った。

ここにやって来てから、三つ目の異変。

それは、真つ二つに切り倒された大木だった。

その木は、ちょうど俺の胸の辺りで、綺麗な真一文字に切り倒されていた。

大木、と言ってもせいぜい一抱えくらいの大きさだが、それでも切り倒そうと思ったならそれなりの労力が必要だろう。

それに、何より……。

「切断面が、綺麗過ぎる……」

切り株となった木の表面を撫でて、俺はつぶやいた。

切断面に、段差やざらつきが全くない。

余程鋭利な刃物で一息に切らなければ、こんな切り口にはならないだろう。

試しに、と、切り株の隣に落ちた木の上半分に、俺は渾身の力を込めてショートソードを振り下ろした。

サクツと思ったよりも軽い手応えが伝わって、ショートソードが木の中にめり込む。

しかし、刃が完全に木に埋まった辺りで刃は止まり、それ以上は力を入れても進みそうになかった。

少なくとも、一太刀で木を真つ二つ、なんて、俺にはとても無理だろう。

「一体どれだけの力があれば、こんなことが出来るんでしょうね」
それを見て、奏也も流石に顔色を青くしている。

月掛は奏也の後ろで小さく震えているようだ。

俺だってこんなことが出来る化け物とは戦いたくない。

だからこそ、重い口を開いた。

「『ヘルサラマンダー』っていうのは、もしかして手にハサミでもくつつけてるのか？」

冗談めかして尋ねる。

これが『ヘルサラマンダー』なら相手は相当な強敵ということになるし、そうでないなら別の恐ろしい何かがこの森にいたということになる。

「『ヘルサラマンダー』は、『ヘルリザード』と同じくリザードマンの亜種です。

当然人型の魔物で、今回は村の人間に、曲刀を持っている姿を目撃されたそうです」

「……つまり？」

「恐らく、これを行ったのは『ヘルサラマンダー』でしょうね」

沈鬱な声で答える奏也の声。

そしてそれを最後に、俺たち3人の間に沈黙が落ちる。

奏也は未練がましく何か抜け道を探すように木の切断面を撫でている。

月掛はそんな奏也を不安そうに眺めながら、物音がする度に大袈裟なほどビクツと反応して、心細そうにしている。

その様子を見て、俺は、

「……戻ろっ」

とうとうその言葉を口にした。

即座に反応したのは奏也だった。

「そんな、ここまで来てっ！」

と激昂しかけるが、

「……いえ、そうですね。その方が、いいかもしれない」

自分を抑えるだけの理性はあったようだ。

一方で、

「あ、あたしは、奏也様がいいって言うなら、もどつても……」

月掛は奏也に気を遣いながらも安心した様子だった。

俺はと言えば、本音を言えばここで諦めたくないという気持ちはある。

だが、ここでの異変の原因が『ヘルサラムンダー』だとすると、相手は木を一太刀で両断出来るほどの剣の腕を持っていて、素手でも地面をえぐるほどの力を持ち、最悪の場合広範囲にわたるエナジードレインの技まで持っているかもしれないのだ。くだらない意地なんかで戦っていい相手ではない。

(……これでいいんだ。これで)

俺は湧き上がる悔しさとやるせなさを胸に押し込めて、先頭に立って枯れた道に戻っていった。

こうして、俺たちの初めてのモンスター討伐は、始まる前に終わってしまったのだった。

皮肉にも、帰り道は行きよりも順調に進んだ。

俺たちはイベントを失敗した鬱憤を晴らすように足を速め、大樹に戻る道を急いだ。

おまけに行きでモンスターを倒していたせいか、魔物とのエンカウントも輪をかけて少なかった。

そのような要素もあり、結局俺たちは現実世界に戻る10分前にはもう、村の入り口まで戻って来ることが出来た。

「まず、七瀬の様子を見に行こうか」

やはり気落ちしている様子の二人に気を遣って、わざと明るくそう提案した。

七瀬が寝ているという家を覗くと、そこには先客がいた。
後ろ姿だけで分かる。

銀髪に尖った耳。

……ナキだ。

「ナキ。七瀬についててくれたのか？」

俺が声を掛けると、

「…用事が、思ったより早く終わっただけ」

そうつれない言葉を残すが、俺の言葉を気にしていってくれたのは明らかだった。

「それでもありがとう。」

そっちの用はうまくいったのか？

残念ながら、こっちは失敗しちゃってさ」

悔しさを紛らわすようにわざとらしくはははと笑うと、そんな俺をナキが冷ややかな目で見た。

「……そんなの、当たり前」

そして、ぼつりとこぼしたのはそんな言葉。

その言葉が、イベントの失敗に苛立っていた月掛を暴発させた。

「あ、あんたねっ！ 勝手なことを言わないでよ！

あんたは、あれを見てないから……」

苛立ちをぶつけるようにそう叫ぶが、ナキはあくまで冷静だった。

「もちろん私にだって、無理。だって……」

そう言っつて、ナキは俺の顔を見ながら、

「……『ヘルサランダー』は、ずっと前に死んでいるから」

突拍子もないことを口にした。
一泊遅れ、

「「「……は？」」」

俺と月掛、奏也の顔までが、驚きに染まる。

「ど、どういふことなんだ?!」

もしかしてナキ、お前、『ヘルサラマンダー』を前に倒して……」

俺がそう問い掛けるが、ナキは首を横に振った。

「私じゃ、ない。倒したのは……」

そうして、ナキの細い指が示したのは、

「え? 俺?」

なぜか、俺だった。

「普賢、君?」

奏也が信じられないというような顔で俺を見て、

「……………」

月掛が、うわ、こいついつかやると思ってたわよ、みたいな軽蔑の眼差しを俺に向けた。

「ちょ、ちょっと待てよ!

俺はここに来るまで『ヘルサラマンダー』なんてモンスター、見たことも聞いたこともなかったんだぞ!?

一体いつ……………」

俺は慌てて抗弁しようとするが、

「インベントリ、開いてみて」

というナキの言葉に、渋々インベントリを開く。

「ここに何があるって言うんだ？」

俺はそう言いながら一つ一つアイテムを確認していく。

ポーションに傷薬、予備のショートソード。

それ以外にあるのはモンスタードロップのウサギの尻尾に、最初の魚人がドロップしたアイテムだけで……と最初の二つのアイテムにカーソルを合わせて、

『火蜥蜴の徽章』

『ヘルサラマンダーの鱗』

俺は、完全に固まった。

なぜだろう。

暑くもないのに汗が噴き出て、だらだらと流れて止まらない。

うん、落ち着こう。

落ち着いて、ちよっとだけ考えてみようか。

俺は努めて冷静になって、最初の夜にナキを襲おうとしていた鱗野郎、俺が初めて倒したモンスターのことを思い出す。

今思えば、あいつは他のグリーンウルフやブレイドラビットなんかのモンスターに比べると、若干毛色が違うというか、ちよっと強そうじゃなかっただろうか。

それに、ナキに切り付けようとした剣はなんとなくだが曲刀っぽかった気がするし、ついでに良く思い出してみれば、あの鱗の感じは魚人というよりなんとなくリザードマンっぽかったような気も……。

そして、それが本当なら、つまり……。

俺たちは、もうとつくに倒した相手を探して森をさまよって、既に持っているアイテムを渡すだけのイベントのために、あんなに神経をすり減らしてたってことか？

こんなの、言える訳がない。

俺はインベントリから視線を逸らし、こっそりと皆の様子を盗み見た。

あからさまに動揺している俺に眉をひそめている奏也。

何かを予感しているのか、腰に手を当てて説教モードに移りそうな月掛。

呆れた様子で俺に冷たい視線を送っているナキ。

三者三様の反応だが、確実に言えることは、全員が等しくその目に懷疑と不審の色を備えているということだった。

(ど、どうしよう…!?)

俺は針のむしろのような視線に晒されながら、貴重なクエストアイテムの入ったインベントリを前に、ただだらだらと汗を流し続けていた。

こうして、俺たちの初めてのモンスター討伐は、始まる前に終わってしまったことが発覚したのだった。

20・クラスチェンジ（前書き）

投稿ミスにより、19話を投稿後にかなり修正しました

読んだ時のタイトルが『19・初めてのモンスター、討伐イベント』
だった場合、修正前だった可能性があります

その場合はお手数がかかりますが、もう一度19話をチェックして頂けるとありがたいです

20・クラスチェンジ

「…………ふう」

現実世界に戻ってきた俺は、大きくため息をついた。

「……………なんとか、生き残ったな」

あれから本当に大変だった。

自分のインベントリに『火蜥蜴の徽章』が入っていることに気付いた後、

「あ、あれー？

な、なんでか知らないけどおれのいんべんとりにひとかげのきし
ようがはいっているぞー？

こっこれはすごいぐうぜんだなあー」

と俺が叫んだ後の沈黙と来たらそれはもうヤバかった。

イメージで言うなら軽蔑のブリザードがビュービュー吹き荒れ、
視線の槍がザクザクで俺は血塗れハリネズミみたいになった。

もしも沈黙で人が殺せるなら、俺は阿僧祇を越える死を体験し、
那由多の輪廻の果てにとうとう悟りの境地に至っていたに違いない
と思う。

「しかし、参ったな……………」

それでも何とかノリで押し切って、イベントを終了させて、こうして現実世界に戻ってきた訳だが、

「転職するの、忘れてた……」

ということに、気付いてしまったのだった。

「よし、こんなもんかな？」

夕食を終えた俺はすぐに部屋に閉じこもり、ルーズリーフに奏也たちから聞いたクラスについての情報を書き込んでいった。

クラスについて、もう一度腰を据えて検討するためだ。

トラベラーのクラスは、継承率が0%で上位職の情報もないというかなりの地雷職だ。

これからもナイトメアを続けていくのなら、転職はほぼ必須と言える。

本当は『ヘルサラマンドー』のイベントを転職した状態でクリアして、新しいクラスのレベルを上げるつもりだったのだが、騒動のどさくさですっかり忘れていた。

ついでに言うと、そのことについてナキに相談しようかなと思
ったのだが……。

ナキには、学校で夢の話をすると言われていた。

そして、それより何より、学校では当然ナキの姿を見かけたが、
話し掛けることは出来なかったのだ。

俺の方が色々と気まずくて話し掛けられなかったというのもある
が、それだけではない。

一昨日のお前を殺す事件に続けて、昨日の飴玉ぼろり&これ読ん
で下さい事件。

そのせいでなんとなく俺はクラスの女子連中に危険人物認定され
てしまった節があり、それとなく俺をブロックしているような感じ
がしたのだ。

普段接点がないくせに、こういう時に連携するのは女子の奇妙な
生態だろうか。

ここでナキに突貫していく勇氣は俺にはなかった。

俺は必死でナキの方を気にしてないよアピールをしつつ、つらい
学校の時間を乗り切ったのだった。

そんなことを思い出しながら、俺が書きあがった表を見て満足げ
にうなずいていると、

「お兄ちゃん？ いるー？」

妹が、部屋のドアをノックした。

今は結芽の相手をするのは面倒だ。

俺は躊躇いなく、

「いないぞー」

と返事をする、怒ったようにドアが開かれた。

「いないって言ったのに!？」

とまあちよつとしたボケを挟みつつ、俺は観念して結芽を手招きした。

一人で考えるのも心細いと思っていた所だ。

考えてみれば結芽は俺よりもゲームに詳しいし、いいアドバイザーになってくれるだろう。

俺はクラスチェンジの助言をもらいたいただけだったが、結芽がゲームの詳しい話をせがんできたので、もうこの際だと今までの話を全部ぶちまけることにした。

もちろんナイトメアが別の世界で実際に冒険をするゲームであることや、仲間の名前などの固有名詞は伏せて、だが、最初のスタートからあのイベントをこなした所まで、ほとんど全部を結芽に話した。

「へー」とか「うわー」とか「ひゃー」とか、いちいち大仰なりアクションで俺の話を聞いていた結芽だったが、一番気になったのは、やはり『ヘルサラマンドー』との戦いについてだった。

「お兄ちゃん、やっぱりそれ、おかしいと思う」
はつきりと異を唱えてきた。

「やっぱり、お前から見てもそんなにおかしいか？」

俺も漠然とおかしいなとは思っていたが、ゲーム経験が少ないせいか、今一つピンと来なかったのだ。

それを俺の表情から理解して、妹は少し考えるような顔をする。そしてパツと顔を輝かせると、話し始めた。

「じゃあ、ゲームに疎いお兄ちゃんのために、わかりやすくゲームで例えると……」

そこはかとなく矛盾した発言だが、話の腰を折らないように俺は黙っていた。

「レベル1の勇者（ひのきのぼう装備）が動いてる石像を一撃でノックアウトするようなものだよ？」

「それは無理だ!!」

確かにすごく分かりやすかった。

リアルで想像してみても、そんなことしたらひのきのぼうが折れるだけだろう。

というか実際、俺のショートソードは壊れた訳だし。

しかし、ナイトメアは純粋なゲームという訳でもなく、疑似的ゲーム世界というかなんというかであり、その辺りは色々と抜け道がありそうである。

「でも、現に倒しちゃったからな。

たぶん、『オーバードライブ』の効果だとは思っけど……」

しかし、なぜかその言葉にも困ったような顔をして言うことには、それなんだけど……。

たぶん『オーバードライブ』は、あんまり関係ない気がする」ということらしかった。

「そもそも、『オーバードライブ』って能力値を上げるワケじゃなくて、現状、ただスキルの効果を2倍くらいにするだけなんだよね？」

「まあ……そうだな」

「だったら、話を聞く限り、攻撃力に関係ありそうなスキルは『刀剣』スキルだけ。」

でも、たった5%の補正が2倍になったって、それだけじゃあんまり意味がないと思う」

「あー……」

正論過ぎて、ぐうの音も出ない。

「それにリザードマンと言えばどのゲームでも防御力高めって相場が決まってるし、その上ユニークモンスターでレベルも10以上上だったら、絶対初期状態のお兄ちゃんに勝てる相手じゃないはずだよ」

「そう、だなあ……」

最初に俺がステータスを見た時、俺はもう既にレベル5だった。だから俺の初期レベルは5なのだと思っていたのだが、これは恐らく『ヘルサラマンダー』を倒した時のウィル、つまりは経験値、が既に加算された結果だったのだろう。

つまり、トラベラーレベル1の俺VSレベル13のユニークモンスター『ヘルサラマンダー』。

……勝てる要素がない。

「だったら俺は、どうしてあいつに勝てたんだろうな」

ほとんど独り言のようにつぶやかれた言葉にも、結芽は丁寧に言葉を返した。

「お兄ちゃんと出会った時、すでに瀕死だったのか……」。

あるいはもしかすると、お兄ちゃんのユニークスキルが発動したのかも……」

「ゆ、ユニークスキル？ どうしてだ？」

一瞬声がどもってしまったのは、……まあ、あれだ。

ユニークスキルについては、結芽にもあまり詳しくは話さなかった。

結局出せたことがないし、アレには色々トラウマが多いからだ。

もしかしてあの話もなくちゃいけないのかな、と思っていたが、結芽にはその辺りを聞こうとする意志はないようで、

「お兄ちゃん、『ヘルサラマンダー』を倒してすぐ、気を失っちゃったんだよね？」

「あ、ああ……」

そしてそのおかげでナキに膝枕を……という邪念は捨てて、結芽の話に集中する。

そんな俺の邪な思いに気付くはずもなく、結芽は思案顔で続ける。

「HPやMPがなくなったら、疲れて眠くはなるかもしれないけど、気絶まではしないはずだよ。」

でも、DPがなくなったら絶対に気を失う。

だからお兄ちゃんは、『ヘルサラマンダー』との戦いで無意識にユニークスキルを使って、それで倒れたのかもって思ったんだけど

……」

「なるほど、それはあり得るな……」

妹の訝え具合が留まる所を知らなかった。

「それにしても、そんなこと良く知ってるな。」

他のゲームにはDPとかないはずなのに……」

「だ、だって、わたしだって本読んだから……」

そう言って、前髪をいじいじとやりながら妹は照れた。

（しかし、ユニークスキルか……）

戦いの間、意識して発動させようとした記憶はないが、『魔力機動』や『オーバードライブ』も最初の発動は無意識だった。

そういうことが、なかったとは言えない。

（そういえば、明人との戦いの時も……）

折れたショートソードで相手の剣を受けようとして、明人の持っていた高レベルのはずのナイフを切ったことがあった。

似ている、と思う。

剣が壊された直後という状況。

そして、あり得るはずのないほどの攻撃力。

（『真実の剣』、か……）

仮初めの剣が壊れた時だけに現れる、本当の剣。
なんて解釈をするのは、少し夢を見過ぎているだろうか。

（今度、向こうに行ったらどうにかして調べてみないと……）
やるべきことが増えた。

「そ、それよりお兄ちゃん、転職！
転職するんでしょ？」

は、早く、クラスを見てみようよ！」

もしかすると、俺が考えている間もずっと照れ続けていたのだから。
うか。

妙に焦った声でそう言ってくる妹にはいいいと答え、俺は今度こ

そクラス性能の書かれたルーズリーフを、妹の前に広げたのだった。

そうして数分後、

「ぜったいぜったい剣士！！」

「いや、ここは手堅く戦士だろ！」

「手堅さなんて求められてないよ！

ここはガツンと剣士一択だよ！」

「そんなリスクな選択が出来るか！

攻防のバランスがいい戦士が一番だ！」

「お兄ちゃんの分からず屋ー！」

「お前だって十分頑固じゃねえか！」

俄かに兄妹喧嘩が発生していた。

ちなみに俺が妹に見せた資料はこんなのである。

【戦士】

《成長値》

魔力：3

理力：1

強化：3

耐久：3

俊敏：2
器用：2
理法：1
克己：2
操作：1
信心：1

B P：1

総合：20

継承：20%

《クラススキル》

パッシブ『戦の手腕』

攻撃・防御が上昇

《クラス獲得条件》

魔力・強化・耐久12以上

【槍戦士】

《成長値》

魔力：3
理力：1
強化：2
耐久：3
俊敏：2
器用：2
理法：1
克己：3
操作：1

信心：2

B P：1

総合：2 1

継承：2 0 %

《クラススキル》

パッシブ『鉄の防護』

防具の防御・耐久が上昇する

《クラス獲得条件》

魔力・耐久15以上

『槍』スキルレベル1以上

【剣士】

《成長値》

魔力：2

理力：1

強化：4

耐久：2

俊敏：3

器用：3

理法：1

克己：1

操作：1

信心：2

B P：1

総合：2 1

継承：20%

《クラススキル》

アクティブ『ブーストパワー』

一定時間攻撃力を上昇させる

《クラス獲得条件》

強化・俊敏15以上

『刀剣』スキルレベル1以上

【魔法使い】

《成長値》

魔力：1

理力：3

強化：1

耐久：1

俊敏：1

器用：2

理法：3

克己：2

操作：2

信心：3

BP：1

総合：20

継承：20%

《クラススキル》

パッシブ『理術の知識』

理術の攻撃力が上がる

《クラス獲得条件》

理力・理法・操作12以上

【魔女】

《成長値》

魔力：3

理力：4

強化：1

耐久：1

俊敏：1

器用：2

理法：5

克己：2

操作：3

信心：1

B P：1

総合：24

継承：25%

《クラススキル》

パッシブ『ウィッチクラフト』

理術発動速度短縮

《クラス獲得条件》

理力・理法30以上

女性限定

【吟遊詩人】

《成長値》

魔力：2

理力：2

強化：1

耐久：2

俊敏：2

器用：3

理法：2

克己：1

操作：3

信心：2

B P：1

総合：21

継承：20%

《クラススキル》

パッシブ『優れた奏者』

演奏関連のスキル効果がUP

《クラス獲得条件》

器用・操作15以上

『演奏』スキルレベル1以上

【弓使い】

《成長値》

魔力：2
理力：2
強化：3
耐久：1
俊敏：2
器用：3
理法：1
克己：2
操作：2
信心：2

B P：1

総合：21

継承：20%

《クラススキル》
パッシブ『射撃の習熟』
遠距離武器の射程UP

《クラス獲得条件》
器用20以上

『弓』スキルレベル1以上

【スカウト】

《成長値》

魔力：2
理力：2
強化：2
耐久：1

俊敏：3
器用：4
理法：1
克己：1
操作：2
信心：2

BP：1
総合：21
継承：20%

《クラススキル》
アクティブ『簡易探査』
近くの敵やアイテムを察知する

《クラス獲得条件》
俊敏・器用15以上
索敵系スキルを所持

全部向こうの世界でみんなに教えてもらった物を思い出して書き出したのだが、たぶん間違っではないと思う。

実はこういう意味のない数字や文字列を暗記するのは得意だったりするのだ。

そのおかげで入試で苦労した覚えはないし、それなりな進学校である宿鳳しゅほう高校でも落ちこぼれていないと言える。

まあそれはともかく、だ。

喧嘩の内容を聞いてみれば分かると思うが、俺と妹の間で意見が割れた。

とりあえず俺の理術系の能力は絶望的だ。
まず真っ先に魔法系は消えた。

次に、特別なスキルを必要とする上に仲間と職業がかぶる槍と弓が消える。

最終的に候補に残ったのは戦士と剣士とスカウト。

そこで俺は物理系能力のバランスのいい戦士を推し、妹は攻撃に特化した剣士を推し、先程のようなやり取りに発展したということである。

戦士も剣士も、総合力や継承率に大差はない。

この場合の争点は防御もこなせるバランス型でいくか、攻撃特化でいくかという一点だけだ。

俺はやっぱり色々な場面で対応出来る方が強いと考えた。

一撃の重さっていうのは確かに貴重だが、それで防御がおろそかになっては元も子もない。

だが、結芽の考えは違うようだった。

「お兄ちゃん。前に教えたはずだよ？

パーティには役割が大切だって。

タンクをやるならもう槍使いがいるんだから、お兄ちゃんはアタッカーをするべきだと思う」

タンクというのは、味方の盾になって攻撃を引き付ける役。

一方でアタッカーとかダメージディーラーとか呼ばれるのが、攻撃に特化して敵にダメージを与える役だと前に教わった。

結芽の言うことは分かる。

分かるが、

「だけど、なあ……」

特化しているというのは、その分何か足りない、つまり不安定だということだ。

あまり今すぐに特化したスタイルを選ぶと、逃げ道がなくなりそうで嫌だという心理もある。

何より今の所、俺の仲間には後衛が多い。

盾役が出来る人間は多い方がいい気がするということもある。それに、

（今の七瀬に、タンクなんて任せていいのか？）

という疑問もあった。

しかし、詳しい事情を話していない妹に、そのことが伝わるはずもなく……。

結局この喧嘩は、風呂が空いたと諒子さんが結芽を呼びに来るまで続いた。

そして、

「結局、決められなかったな……」

午前0時。

明確な答えを出せないまま、今日も悪夢の幕が上がる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6970y/>

異世界回帰ナイトメア

2012年1月8日20時14分発行